Jyu roku chou hira ta

拾六町平田遺跡 2

——— 第 2 次調査 ———

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 349 集

1 9 9 3

福 岡 市 教 育 委 員 会

拾六町平田正誤表

頁	行	誤	正
挿図目次	1	捜図目次	挿図目次
〃	18	Fig.16 包含層出土遺物（1/3・1/2）	Fig.16 包含層出土遺物4（1/3・1/2）
図版目次	35	PL.4（8）SD15第2号ベルト土層	PL.4（8）SD15第2号ベルト土層（東から）
1	19	埋蔵文化財課　第1係 中山昭則	埋蔵文化財課　第1係 中山昭則・吉田麻由美
12	10	挙し状	挙し大
24	9	158	157
〃	10	板付Ⅱ期	板付Ⅱ式
〃	22	（164・166）	（163・166）
〃	12	稜杉文	綾杉文
36	11	215	214
〃	23	207	227
42	12	4．まとめ	4．小結
〃	13	調査の成果の若干の整理を行い	調査成果の若干の整理を行い
〃	23	水田遺構か確認出来なかったが	水田遺構が確認出来なかったが
奥付け		拾六町平田遺跡	拾六町平田遺跡2

（行数は見出しも含む）

Jyu roku chou hira ta

拾六町平田遺跡 2

——— 第 2 次調査 ———

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 349 集

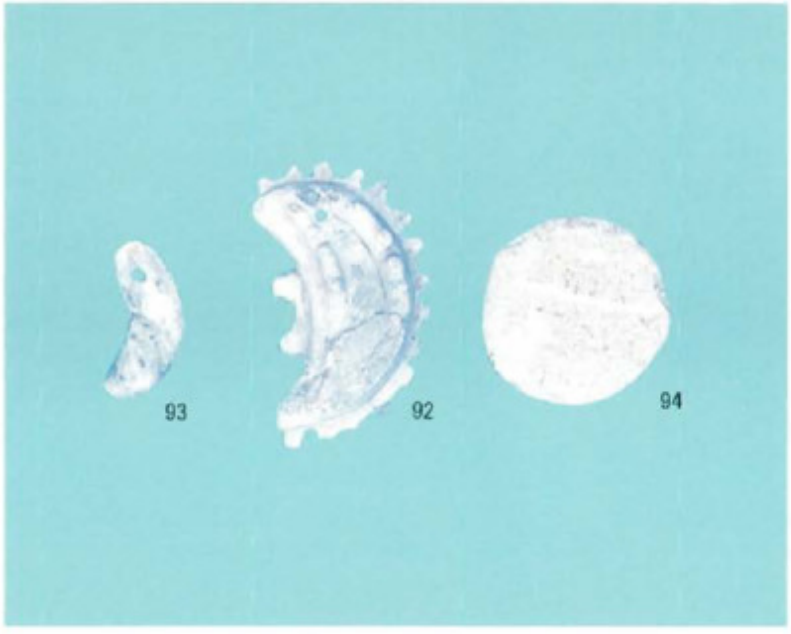
1 9 9 3

福岡市教育委員会

(1)　SD15 出土家形土製品

(2)　SD01 出土脚付杯

(1)　ＳＤ15 出土紡錘車



(2)　包含層出土祭祀遺物

序

福岡市の西部に位置する西区は、地下鉄開通と共に目ざましく発展をとげている地域です。この西区には早良王墓の吉武高木遺跡を始め、国史跡の野方遺跡や大塚古墳など数多くの史跡・文化財に恵まれています。

本書は、この西区の石丸地区で行なわれた民間の共同住宅建設に伴う遺跡調査の成果を報告するものです。今回の調査では、弥生時代前期の旧河川や集落跡及び古墳時代中期の祭祀遺構などが発見され、前期の旧河川跡からは、最古の家形土製品を始め、木製脚付杯・炭化米など、また、古墳時代の祭祀遺構では市内で数例しか出土例がない子持勾玉が出土するなど、各時代で貴重な遺物の発見がありました。

発掘調査から報告書作成にいたるまで、株式会社穴吹工務店を始めとする関係各位に、多大な御理解と御協力を賜わりましたことに深く感謝の意を表します。

本書が埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり、合せて研究資料としてご活用いただける事を願うものです。

平成5年1月

福岡市教育委員会

教育長　井口雄哉

例　　言

1．本書は、1990年度に福岡市教育委員会が福岡市西区石丸２丁目489－1において緊急発掘調査した、拾六町平田遺跡第２次調査の発掘調査報告書である。
2．本書に使用した方位はすべて磁北である。
3．遺構名称は本市埋文センターの基準にそって記号化している。
4．調査は埋蔵文化財課第２係山崎龍雄が担当した。
5．本書に使用した遺構実測図は山崎・黒田和男・英豪之・清原ユリ子・宮原邦江・原田圭助による。
6．本書に使用した遺物実測図は、山崎・平川敬治・井上加代子による。石器の整理については本課山口譲治氏の協力を受けた。
7．本書の整図は山崎・井上・坂本智子が行なった。
8．本書に用いた写真は山崎による。
9．本書には自然科学的考察として、磯望（西南学院大学）氏・下山正一（九州大学）氏、岡田文男（財京都府埋蔵文化財研究所）氏、野井英明（北九州大学）氏、桃崎祐輔（筑波大学）氏にそれぞれ原稿を頂いた。
10．本書の執筆・編集は山崎が行なった。
11．本書にかかわる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管されるので活用されたい。

遺跡調査番号	９０１１		遺跡略号	ＪＲＨ	
調査地地籍	福岡市西区石丸２丁目489		分布地図番号	０９０－Ａ－１１	
申請面積	3987㎡	調査対象面積	1150㎡	調査実施面積	1260㎡
調査期間	1990年５月17日～９月21日		事前調査番号	１－２－３０８	

本 文 目 次

頁

第1章　はじめに …… 1

1．調査に至る経過 …… 1

2．調査の組織 …… 1

第2章　立地と歴史的環境 …… 2

第3章　調査の記録 …… 5

1．調査の概要 …… 5

2．出土遺構 …… 5

(1)　古墳時代の調査 …… 5

(2)　弥生時代の調査 …… 7

3．出土遺物 ……13

(1)　古墳時代の調査 ……13

(2)　弥生時代の調査 ……19

4．小結 ……42

第4章　自然科学的考察 ……43

1．拾六町平田遺跡周辺の地質と地形 ……（下山正一・磯　望）43

2．花粉分析による拾六町平田遺跡の古環境の復元 ……（野井英明）51

3．福岡市拾六町平田遺跡第2次調査出土の種実について ……（桃崎祐輔）55

4．拾六町平田遺跡出土胎漆器の塗膜について ……（岡田文男・本出光子・成瀬正和）59

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図（1/25,000）……3
Fig. 2 拾六町平田遺跡周辺地形図（1/25,000）……4
Fig. 3 拾六町平田遺跡位置図（1/10,000）……4
Fig. 4 調査区周辺地形図（1/600）……6
Fig. 5 遺構全体図（1/200）……折込み
Fig. 6 調査区土層図（1/60）……折込み
Fig. 7 1・2号祭祀（1/6）……7
Fig. 8 土坑1（1/40）……9
Fig. 9 土坑2（1/40）……10
Fig. 10 SD01土層図（1/60）……11
Fig. 11 SD15土層図（1/60）……折込み
Fig. 12 SD01木器出土状況（1/75）……折込み（裏）
Fig. 13 包含層出土遺物1（1/4）……14
Fig. 14 包含層出土遺物2（1/4・1/3）……15
Fig. 15 包含層出土遺物3（1/3）……16
Fig. 16 包含層出土遺物（1/3・1/2）……17
Fig. 17 祭祀遺構出土遺物（1/3・1/2）……18
Fig. 18 土坑出土遺物（1/4）……19
Fig. 19 SD01出土遺物1（1/4）……21
Fig. 20 SD01・16・18・20・21出土遺物2（1/4・1/3・1/2）……22
Fig. 21 SD01出土木器1（1/6）……23
Fig. 22 SD01出土木器2（1/3・1/12）……24
Fig. 23 SD15出土遺物1（1/4）……25
Fig. 24 SD15出土遺物2（1/4・1/3）……26
Fig. 25 SD15出土遺物3（1/4）……27
Fig. 26 SD15出土遺物4（1/4）……28
Fig. 27 SD15出土遺物5（1/4）……29
Fig. 28 SD15出土遺物6（1/4）……30
Fig. 29 SD15出土遺物7（1/4）……31
Fig. 30 SD15出土遺物8（1/4）……32
Fig. 31 SD15出土遺物9（1/4）……33
Fig. 32 SD15出土遺物10（1/4）……34
Fig. 33 SD15出土遺物11（1/3）……35
Fig. 34 SD15出土遺物12（1/3）……36
Fig. 35 SD15出土遺物13（1/3）……37
Fig. 36 SD15出土遺物14（1/3・1/2）……38
Fig. 37 SD15出土遺物15（1/5）……39
Fig. 38 SD15出土木器1（1/6）……40
Fig. 39 SD15出土木器2（1/8）……41

図版目次

巻頭図版1 (1) SD15出土家形土製品
(2) SD15出土脚付杯
巻頭図版2 (1) SD15出土紡錘車
(2) 包含層出土祭祀遺物
PL. 1 (1) 調査区遠景（北から）
(2) 調査区全景（西から）
PL. 2 (1) SD01（北から）
(2) 木器出土状況（南から）
(3) 遺物出土状況（南から）
(4) 木器出土状況
(5) SD01炭化米出土状況
PL. 3 (1) SK05（東から）
(2) SK06（北から）
(3) SK07（南から）
(4) SK08（東から）
(5) SK25（東から）
(6) SK17（北から）
(7) SD02（北から）
(8) SD16・18（北から）
PL. 4 (1) SD19（南西から）
(2) SD20・21（東から）
(3) 1号祭祀（南から）
(4) 2号祭祀（西から）
(5) SD15遺物出土状況
(6) SD15遺物出土状況
(7) 調査区南壁上層（北から）
(8) SD15第2号ベルト土層
PL. 5 祭祀遺構・包含層出土遺物
PL. 6 溝・SD01出土遺物
PL. 7 SD15出土遺物1
PL. 8 SD15出土遺物2

第1章　はじめに

1．調査に至る経過

拾六町平田遺跡が立地する石丸地区は西区の玄関口である地下鉄姪ノ浜駅に近く、近郊住宅地として発展が著しい地域である。

1989（平成元）年度、埋蔵文化財課に株式会社穴吹工務店より福岡市西区石丸2丁目489－1地内における分譲マンション建設の為の事前調査願いが提出された。申請地は周知の遺跡の範囲外であったが、面積が広い事と従来余り調査が行なわれていない地域である事から、試掘調査を実施した。その結果、予期しなかった埋蔵文化財の存在を確認した為、その取り扱いについて申請者と協議を行なった。協議の結果、費用を原因者負担で発掘調査を行ない、記録保存するという事になり、申請者の穴吹工務店と受託契約を締結した。発掘調査は1990（平成2）年度事業として、5月17日から9月21日迄行なった。調査後の報告書作成作業については平成4年度に行なった。

調査に際しては、申請者の穴吹工務店をはじめ、地元各位の多大なる御理解と御協力を賜わった。記して感謝の意を表します。

2．調査の組織

調査委託	株式会社穴吹工務店
調査主体	福岡市教育委員会教育長　佐藤善郎（当時）
調査総括	埋蔵文化財課長　柳田純孝（当時）　同課第1係長　飛高憲雄
調査庶務	埋蔵文化財課第1係　中山昭則
調査担当	埋蔵文化財課第1係　山崎龍雄
調査・整理補助	平川敬治（九州大学）　野井英明（九州大学理学部） 黒田和生　英豪之　井上加代子
調査協力	瀬戸啓治　原田圭助　百武義隆　吉村哲美　有富澄子　井上紀代子 緒方マサヨ　平井和子　宮原邦江　山田サヨ子　吉岡田鶴子 柴田勝子　庄野崎ヒデ子　土斐崎初栄　藤崎久子　若狭睦代 西尾タツヨ　金子由利子　松井邦子　佐藤テル子　柴田常人 松尾キミ子　松尾鈴子　門司弘子　舎川春江　堀川ヒロ子 松井フユ子　清原ユリ子
資料整理	池田礼子　井上マツミ　内尾トミ子　中原尚美　松下節子　吉田祝子 大賀順子　岩下郁子　釘崎由美　坂木智子　田口美智子

第2章　立地と歴史的環境

拾六町平田遺跡は福岡市の西南部に位置する早良平野の北西側に立地する。国土地理院の『福岡西南部1/25,000』の地図によれば、北から6.7cm、東から20.0cmの交点にあたる。行政区分としては福岡市西区石丸地内に所在する。

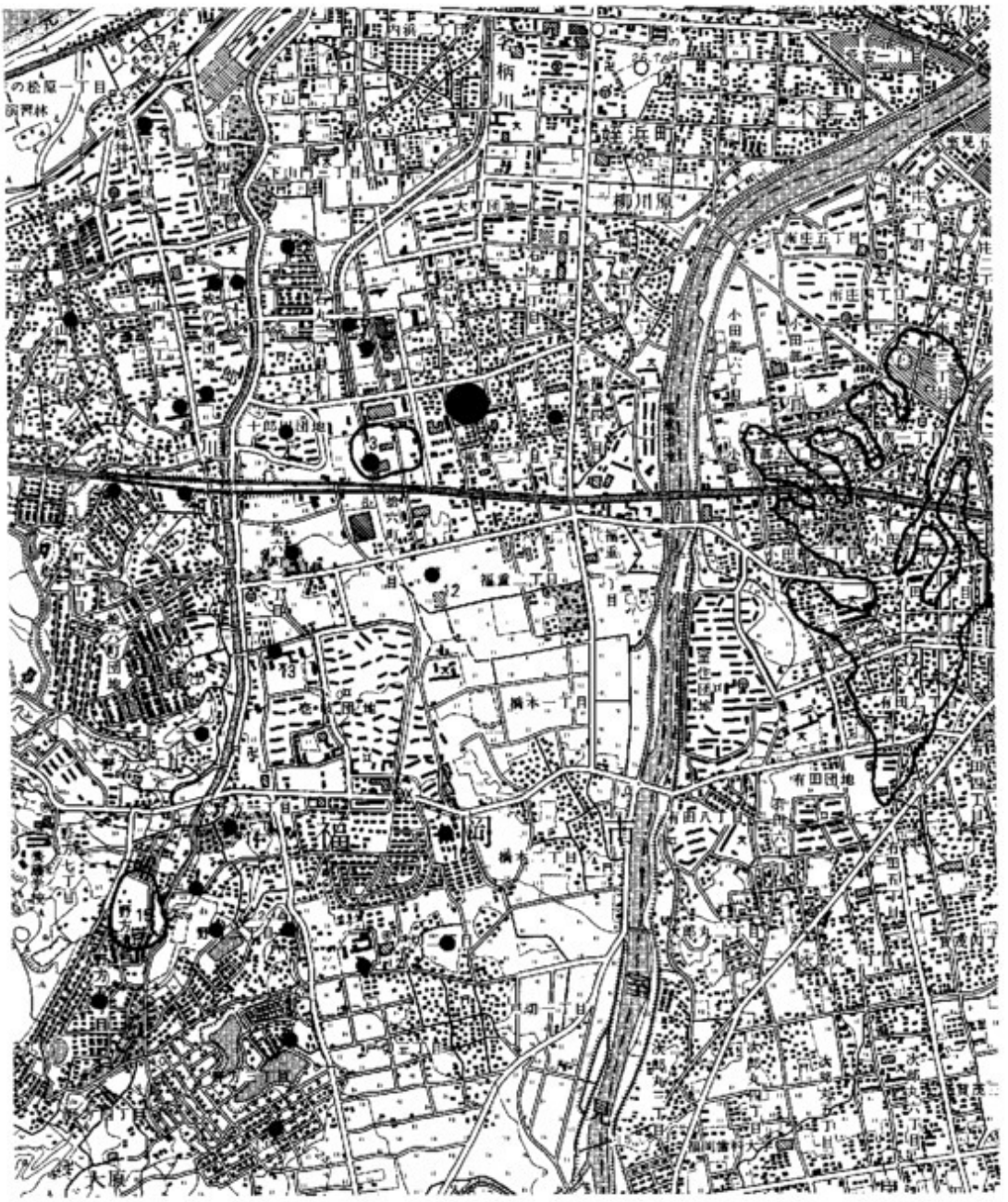
拾六町平田遺跡の所在する早良平野は、中心を貫流する室見川と周辺の十郎川・金屑川などの小河川によって形成された沖積平野であるが、北側の海岸部を除いて、周囲を山地で限定された最大幅約6kmを測る扇形を呈す狭小な平野である。

周辺の歴史環境について概観すると、旧石器時代の遺跡は、山麓や洪積台地上に立地する羽根戸原遺跡や吉武遺跡群・有田遺跡群などで遺物が発見されている。縄文時代初めは前時代の立地を踏襲する。西側の山麓部に羽根戸遺跡や広石遺跡群・名切谷遺跡などがある。中期から後期にかけては吉武遺跡群・有田遺跡群・湯納遺跡などで貯蔵穴群が発見されている。晩期になると中・下流域の微高地上に遺跡は進出する。拾六町ツイジ遺跡や十郎川遺跡・有田七田前遺跡などがある。いずれも縄文時代最終末の夜臼期の遺跡で、大陸系磨製石器を伴っており稲作農耕を行っていたと考えられている。

弥生時代には遺跡は海岸部迄進出する。前期では有田遺跡群で早良平野では唯一の環濠集落が確認されている。前期後半から中期にかけては「早良国」ともいうべき時代で、内陸の室見川左岸の吉武高木遺跡を中心として野方久保遺跡や有田遺跡群・飯倉遺跡群・藤崎・西新町遺跡群など各地の有力な拠点集落遺跡がネットワーク的に分布する。中心となる吉武高木遺跡では墳墓から多数の青銅器類や玉類と鏡が出土している。この「早良国」の時代は吉武遺跡群の樋渡墳丘墓の時代を持って終わりをつげる。後期の代表的遺跡として国史跡の野方中原遺跡があり、方形に巡る居館的な環濠集落が確認されている。また墳墓としては野方塚原遺跡や宮ノ前古墳が終末期のものとしてある。

古墳時代は各地で前方後円墳などの古墳が作られた時代であるが、早良平野では内陸部の吉武地区に前期末頃に樋渡古墳、重留地区に拝塚古墳が作られる。また海岸部では前期で三角縁神獣鏡を出土した藤崎方形周溝墓や後漢鏡を出土した五島山古墳などがある。集落遺跡は平野部全域に拡がり、海岸部の姪ノ浜・藤崎・西新町遺跡では漁撈・製塩関係の、また山麓部の広石古墳群などでは製鉄関係の地域的特色を持った集落が出現する。西側山麓部一帯には北から草場・高崎・コノリ・野方・金武古墳群などの群集墳が築造される。

歴史時代になると平野部には条里が施行され、官道も整備され早良郡が置かれる。早良郡内には6郷が存在するが、当地は額田郷にあたる。郡衙の所在地はまだ特定出来ていないが、有田遺跡群では官衙規模の大型建物群が見つかっている。寺院としては当地より北西側の丘陵裾部に城の原廃寺・古瓦窯址の斜ケ浦瓦窯址などがある。



1.拾六町平田遺跡　2.第2地点　3.第1地点　4.石丸古川遺跡　5.石丸A遺跡　6.石丸B遺跡　7.下山門敷町遺跡
8.下山門遺跡　9.拾六町ツイジ遺跡　10.渕納遺跡　11.拾六町亀出遺跡　12.橋本一丁目遺跡　13.牟田多遺跡
14.野方久保遺跡　15.野方中原遺跡　16.橋本榎田遺跡　17.有田遺跡群

Fig.1　周辺遺跡分布図(1/25,000)

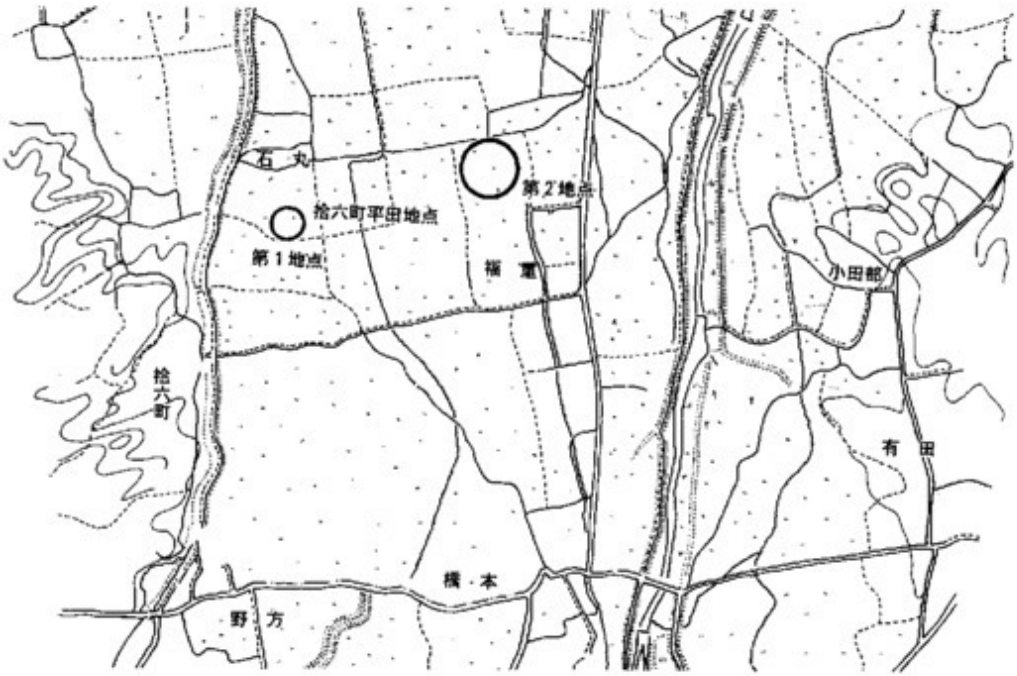


Fig. 2　拾六町平田遺跡周辺地形図（1/ 25,000）

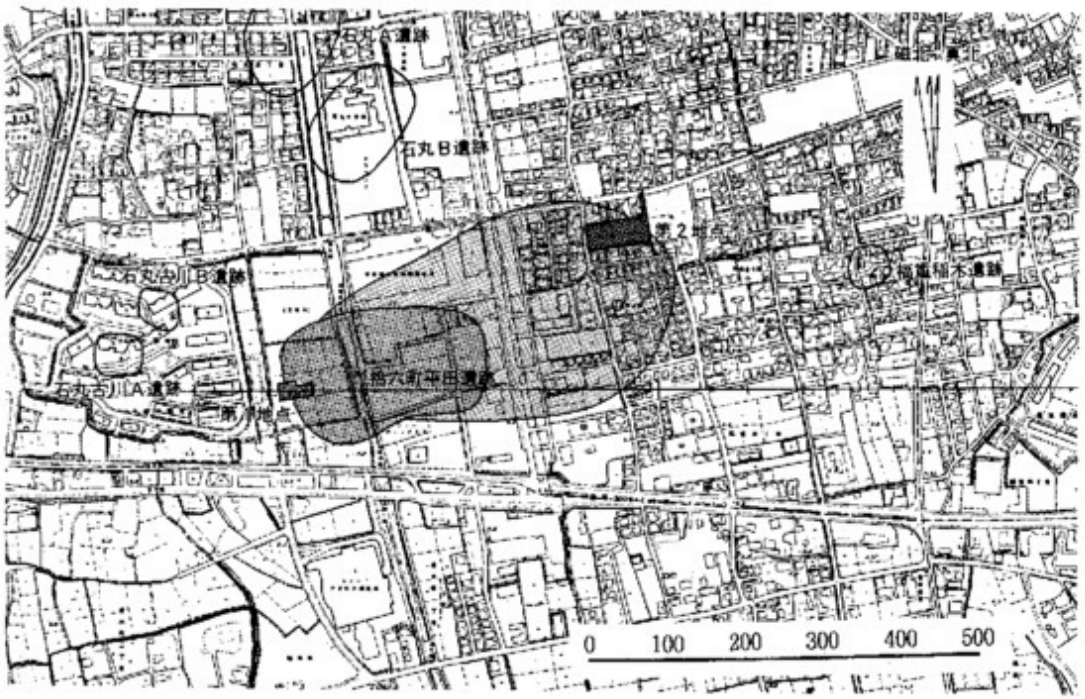


Fig. 3　拾六町平田遺跡位置図（1/ 10,000）

第３章　調査の記録

１．調査の概要（Fig. 4）

今回の調査は、試掘データを基に建物建設予定地部分を中心とする範囲に対して行なった。調査範囲は申請面積3987.47㎡中1260㎡である。調査期間は５月17日の重機による表土除去作業開始から９月21日の埋戻し終了迄である。

試掘データの土層は、上から第１層0.8～１mの造成土、第２層0.15～0.25mの近現代水田土、第３層褐色～黒褐色粘土（遺物包含層）、第４層黄灰～灰褐色粘土、第５層暗褐色粘土……とあり、第３層の包含層に対しての調査予定であった。まず重機によって造成土・水田土を厚さ１～1.3m程除去した後、包含層の調査に入った。調査は磁北を基準として10mグリッドの調査区を設定し、各グリッドを更に２mグリッドに細分して遺物の取り上げを行った。包含層は縄文時代晩期末の夜臼式土器から古式の須恵器迄を含んでいた。Ａ・Ｂ３区で意外にも子持勾玉を含む祭祀遺物が出土した。包含層は西北側が薄く、東・東南側が厚くなる。包含層を取り除くと、青灰色の粘質シルトが遺構面となり、弥生時代前期の土坑群や溝、南北に流れる旧河川と北側に弧状に湾曲する旧河川などが検出された。旧河川からは縄文時代晩期末から前期にかけての多量の土器類や石器類・木器・炭化米・植物遺体などが出土した。遺物量はコンテナ116箱に及ぶ。

２．出土遺構

(1)　古墳時代の遺構

包含層の調査

表土除去後包含層の調査を行った。包含層は暗褐色～黒褐色粘質土であるが、堆積層は西側で０～15cm、東側で10～40cmと東側がやや厚くなる。傾向として旧河川ＳＤ01・15付近は当時既に埋没していたが、完全に埋まりきらず窪んでいた為、その部分に厚く包含層が堆積していた。遺物もその部分から多く出土している。祭祀遺物は窪地であるＡ～Ｃ２・３区あたりから主に出土した。調査区東側では重機で一部掘り下げた。遺物は縄文時代最終末の夜臼式土器から古墳時代の中期５世紀代迄の須恵器を含んでいる。弥生時代は中期後半迄が多く、古墳時代は５世紀代のものが多い。石器は大陸系磨製石器や打製石鏃・砥石・鋳型など、祭祀遺物は土製模造品・滑石製模造品などがある。

祭祀遺構

１号祭祀（Fig. 7、PL. 4）

２号祭祀遺構から4.5m程離れたＢ３－１区で検出した。ここはＳＤ15の中央部にあたるが、

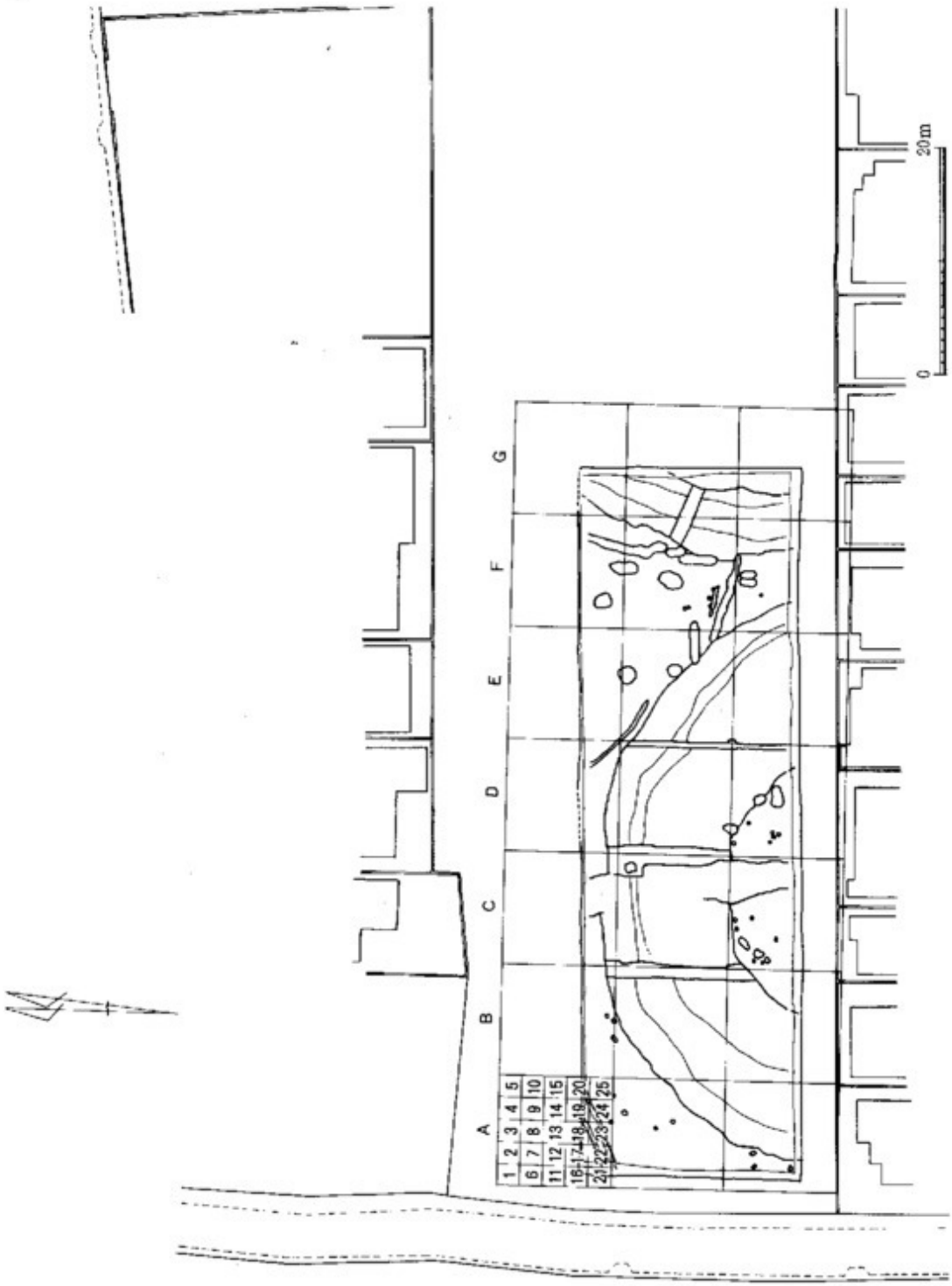


Fig. 4　調 査 区 周 辺 地 形 図（1/600）

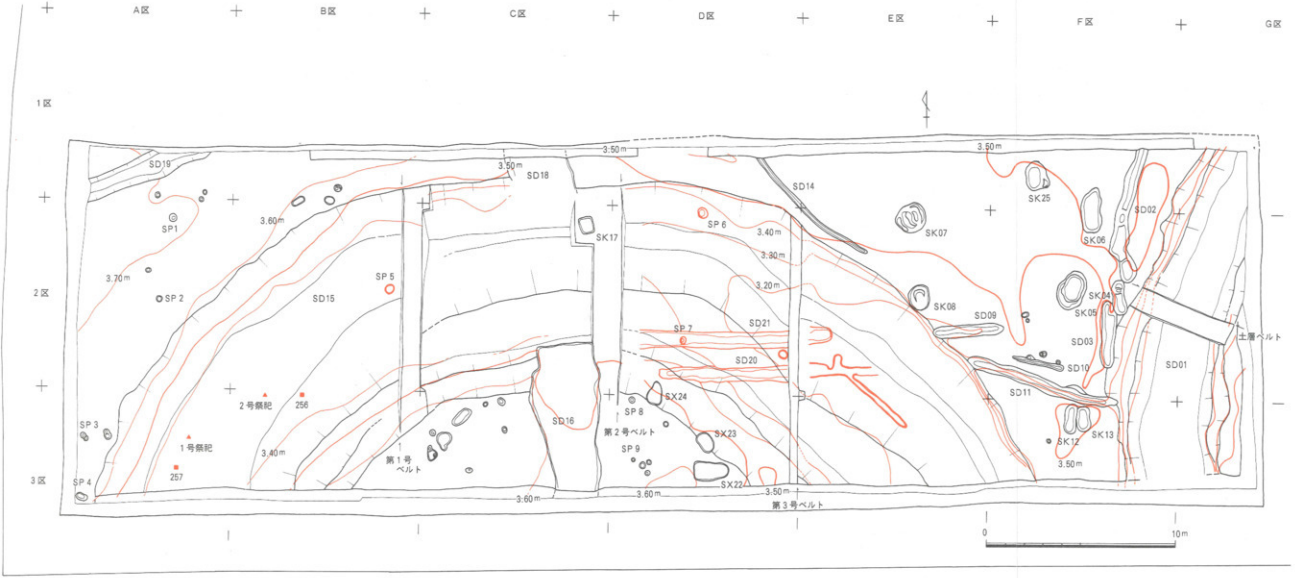


Fig. 5　遺構全体図（1/200）

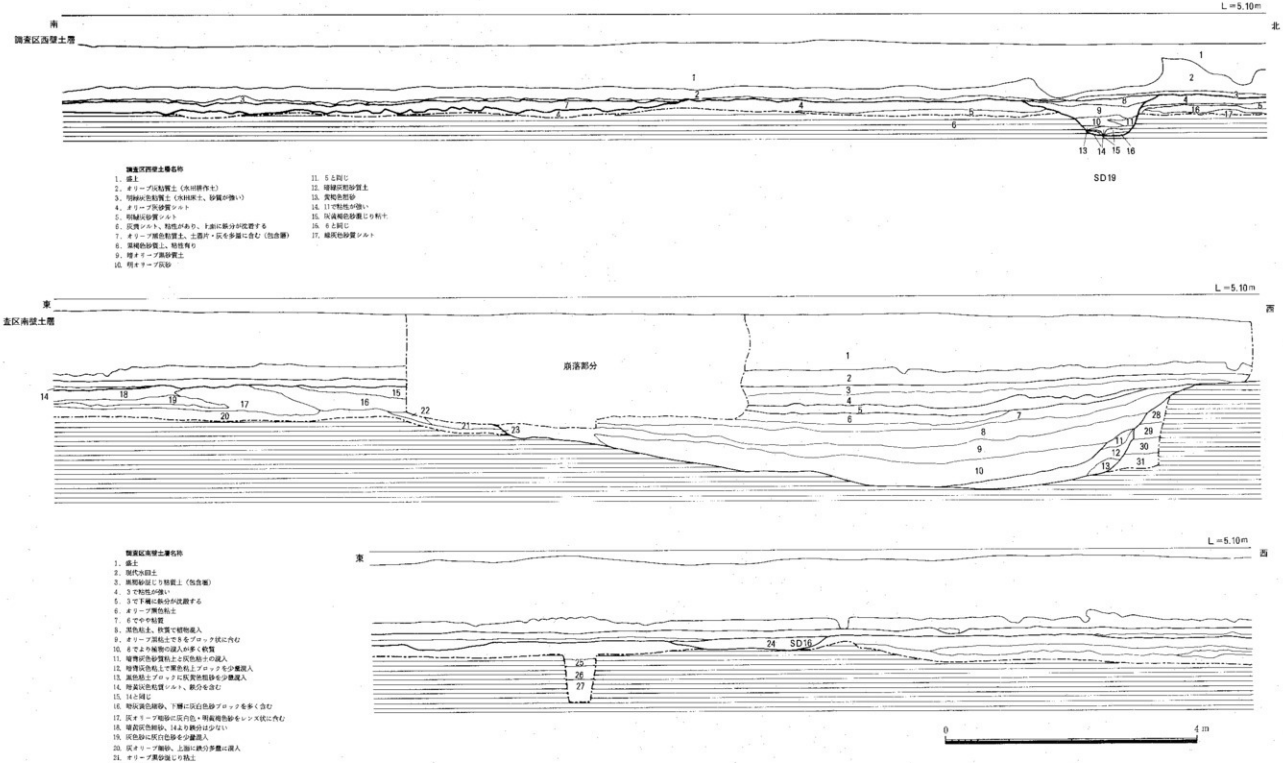


Fig. 6　調査区土層図（1/60）

レベル的には2号祭祀より上位で検出した。口を上にした手捏土器と横向きの滑石製の扁平な勾玉を1個ずつ検出した。掘り込みのようなものはなく、ただ同じ場所から出土したという事である。

2号祭祀（Fig. 7、PL. 4）

埋没旧河川ＳＤ15の中央部にあたるＡ３－９区で検出した。包含層の下位で滑石製子持勾玉が1個横向きに置いた感じで検出された。掘り込みのようなものはなかった。

(2) 弥生時代の遺構

土坑

9基出土したが、ＳＫ04・12・13は浅く、形も不明瞭な為、説明から除外する。

ＳＫ05（Fig. 8、PL. 3）

東側のＦ２区中央で検出した不整楕円形（洋梨形）の土坑。規模は2.05×1.40m、最大深33cmを測る。断面は逆台形で、土坑自体二段掘りで、南側に最大幅25cm位のテラスを持つ。埋土は暗灰褐色粘質シルト土で炭化物・灰混じり・中層以下で混入が多かった。また底面中央部には灰色粘土のようなものがあった。底面表面には鉄分が沈澱している。弥生前期の土器片や黒曜石片などが上層で出土している。その部分には特に炭化物を多く混じえていた。

ＳＫ06（Fig. 8、PL. 3）

Ｆ１－23区とＦ２－３区にまたがって検出した、平面形が船形、断面形が逆台形を呈す土坑。北側に小さなテラスを持つ。規模は2.35×1.0m、深さ30cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、

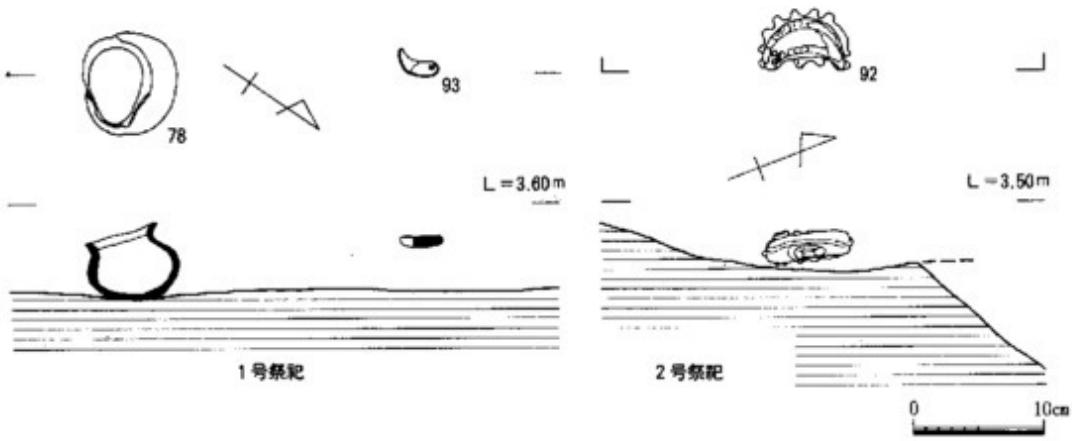


Fig. 7　1・2号祭祀（1/6）

北側が若干低くなる。埋土は上層がオリーブ黒色砂質粘土（炭化物多量混入）、下層は暗緑灰色砂質シルト（炭化物は上層より少ない）である。遺物は夜臼式土器などの土器片や柱状片刃石斧などが炭化物を混じえて、床面からやや浮いた状況で出土している。廃棄物処理用の土坑か。

ＳＫ07（Fig. 8、PL. 3）

Ｅ２－３区から４区にかけて検出した略円形を呈する土坑。規模は1.62×1.47m、深さは最深で50cm を測る。底面は複雑で東西断面は階段状に深くなっている。埋土は灰色粗砂粒混入シルト土に暗褐色粘土ブロックを混入するが、南側下層は灰色砂質シルトに暗褐色粘土大ブロックを少し含む。遺物はまったく出土しなかった。

ＳＫ08（Fig. 8、PL. 3）

Ｅ２－13・14区で検出した不整楕円形を呈する土坑。規模は1.34×1.08m、深さ40cm を測る。壁面の角度は急で、底面は中央が６cm 掘り下がるが、ほぼ平坦。埋土は灰色砂質シルトと暗褐色粘土ブロックを主体とする。遺物は土器片が２点出土。

ＳＫ17（Fig. 9、PL. 3）

Ｃ２－５区、旧河川上面で検出した平面が長方形を呈する土坑。規模は0.88×0.75m、深さは最深で44cm を測る。壁面は直に近く、底面は中央がわずかに深くなる。埋土は単純で暗オリーブ灰色シルト土に黒褐色粘土をブロック状に含む。遺物は夜臼式土器の甕口縁部と底部が出土している。

ＳＫ25（Fig. 9、PL. 3）

Ｆ１－21・22区にかけて検出した瓢形を呈する土坑。規模は1.52×1.22m、深さは最大で42cm を測る。断面は船底形を呈すが、東側は２段掘り、南東側にテラスを持つ。埋土は灰オリーブ砂礫混ざりシルトで暗褐色・黄褐色粘土大ブロックを少量含むが、下層は暗褐色粘土ブロックに灰オリーブ砂礫混じりシルトを混入する。遺物の出土はなかった。

溝状遺構

旧河川ＳＤ01・15を除いて番号を付したのは10条である。

ＳＤ02（PL. 3）

ＳＤ01の西側で検出した南北方向の小溝である。確認長は７m、溝幅は0.55～0.95mを測る。底面は凹凸があり、その深さは８～22cm を測り一定していないが、北側に向かって深くなって行く。埋土は黒褐色砂質土に灰オリーブシルトブロックを含む。遺物には夜臼式土器を含む弥生土器片を少量と黒曜石の細片を２点含む。自然流路であろうか。

ＳＤ03

ＳＤ02の南側で検出した長さ3.54m、幅0.60～0.75m、深さ６～10cm を測る浅い小溝。埋土はＳＤ02とほぼ同じ。遺物は弥生土器の細片を少量含む。ＳＤ02と同じような自然流路であろうか。

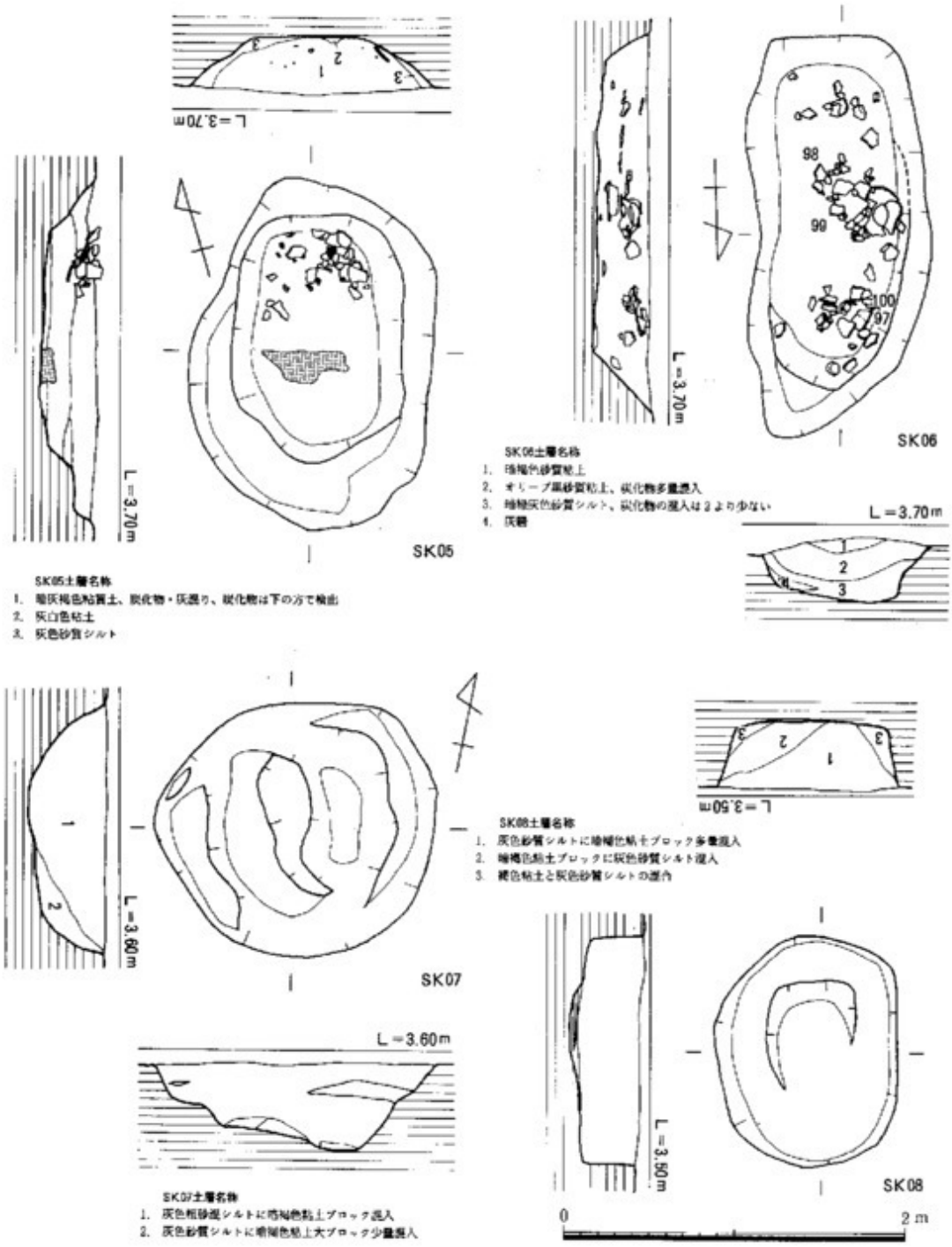

L=3.70m
SK05
SK05土層名称
1. 暗灰褐色粘質土、炭化物・焼塊り、炭化物は下の方で検出
2. 灰白色粘土
3. 灰色砂質シルト
L=3.70m
SK06
SK06土層名称
1. 暗褐色砂質粘土
2. オリーブ黒砂質粘土、炭化物多量混入
3. 暗褐灰色砂質シルト、炭化物の混入は2より少ない
4. 焼塊
L=3.70m
L=3.60m
SK07
L=3.60m
SK07土層名称
1. 灰色粗砂混シルトに暗褐色粘土ブロック混入
2. 灰色砂質シルトに暗褐色粘土大ブロック少量混入
L=3.50m
SK08土層名称
1. 灰色砂質シルトに暗褐色粘をブロック多量混入
2. 暗褐色粘土ブロックに灰色砂質シルト混入
3. 褐色粘土と灰色砂質シルトの混合
L=3.50m
SK08
0
2m

Fig. 8　土坑 1 （1/ 40）

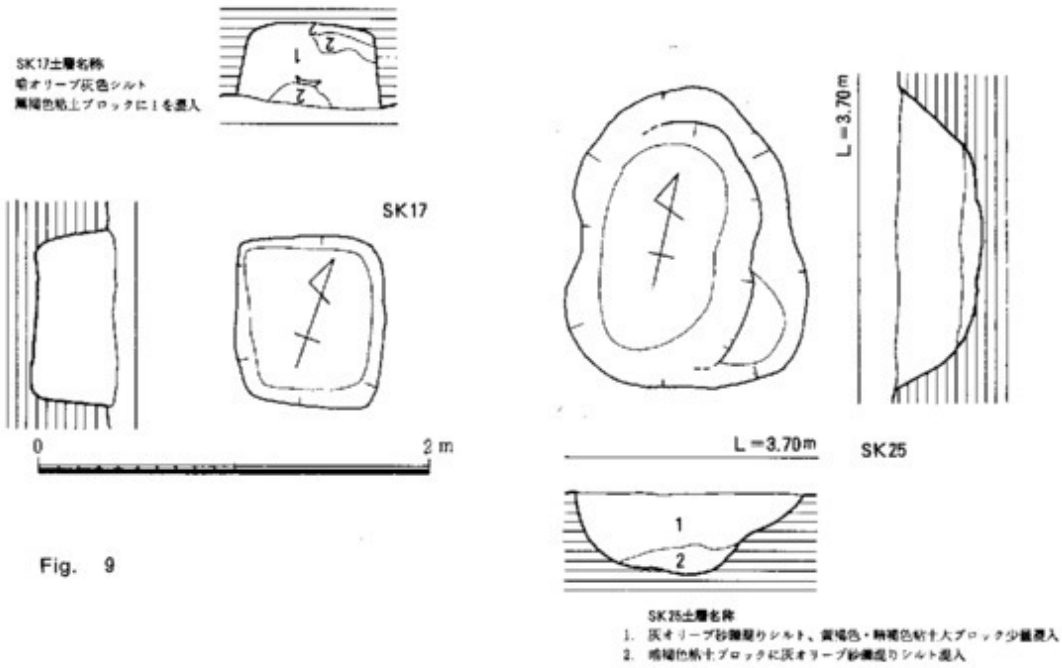


Fig. 9

Fig. 9　土坑２（1/40）

ＳＤ09

Ｅ２区で検出した東西方向の小溝、全長3.6m、幅0.54～0.64m、深さ６～12cmを測る。埋土は褐色粘土に灰色地山シルトを混入する。

ＳＤ10

Ｆ２区で検出した東西方向から北へやや振った浅い小溝、全長2.8m、幅30cm前後、深さ３～４cmを測る。埋土はＳＤ09などと同じ。遺物は夜臼式土器の底部らしきものがある。

ＳＤ11

ＳＤ09と平行する小溝、全長8.2m、幅0.45～0.7m、深さ10cm前後を測る。埋土は、褐色粘土に灰色地山シルトを混入する。遺物は弥生土器の細片が少量出土した。

ＳＤ14

調査区Ｄ１区からＦ２区にかけて南西側に湾曲する小溝。確認長は8.5m、幅は30cm前後、深さは５～８cm前後を測り、断面形は逆台形を呈す。埋土は黒褐色砂質土である。

ＳＤ16（PL. 3）

調査区中央Ｃ区で検出したＳＤ15を切る南北方向の溝、溝自体浅く北側は不明である。確認長は９m、幅2.3～3.25m、深さは20cm前後を測る。底面は比較的水平で断面は浅い皿形を呈す。埋土は黒褐色粘質土に灰色細砂を混入する。遺物は弥生中期中頃から後半の甕口縁部などを含む弥生土器片の外に黒曜石の剥片・石核・敲石・石包丁などの破片を含む。ＳＤ15を挟んで北側に対応するＳＤ18と本来は繋がるものかもしれない。

ＳＤ18（PL. 3）

ＳＤ16と対応して北側で検出した溝、現代井戸や検出範囲が狭い為はっきりしないが、規模は確認長2.2m、幅3.15m、深さ20cm 前後を測る。断面は水平だが、東側壁の残りは悪い。埋土は黒褐色粘質土で、ＳＤ15の上層の埋土に近い。遺物は弥生前期を含む土器片と敲石１点出土。

ＳＤ19（Fig. 6、PL. 4）

北西端部で検出した主軸をＮ－64°－Ｅの西南西、西から東北東に取る溝である。確認全長７m、幅1.5m、深さ65cm を測る。溝断面は逆台形を呈す。埋土は上面から黒褐色砂質土・暗オリーブ黒砂質土、その下は砂になり細砂又は粗砂の互層、底面はグライ化した粘土で水が流れていた状況を示していた。水路であろうか。遺物は夜臼式土器片など２点出土。

ＳＤ20（PL. 4）

Ｄ２区で検出した東西方向の小溝、古墳時代包含層を含む第１面を掘り下げた後検出した。平面形がへ字状を呈し、規模は直線で13.5ｍ、幅１ｍ前後、深さは約15cmを測る。断面は浅い逆台形である。埋土は暗灰黄色シルト、下層は灰黄褐色粘質シルトで鉄分が垂直に沈澱していた。形が不定形であるので切り合いは確認出来なかったが、溝が重複している可能性がある。遺物は土器が弥生前期から中期位迄のものがあり、石器が剥片・未製品を少量含む。

ＳＤ21（PL. 4）

Ｄ２区、ＳＤ20と平行して検出された小溝。西端は２号ベルト手前で消失する。全長10.2＋αｍ、幅0.9m、深さ15cm 前後を測り、浅い逆台形を呈す。規模的にはＳＤ20とほぼ同じ。埋土は暗灰黄色シルトで鉄分を多く混入する。遺物はそれ程多くない。土器は弥生前期から中期までの土器片があり、石器は剥片や敲石片などを少量含む。

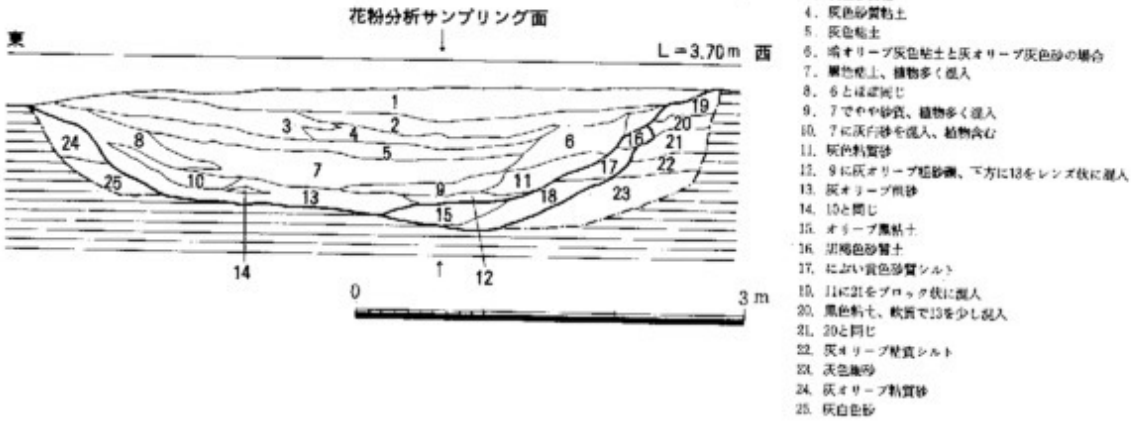


Fig.10　ＳＤ01土層図　（1/ 60）

旧河川

SD01（Fig. 10・12、PL. 2）

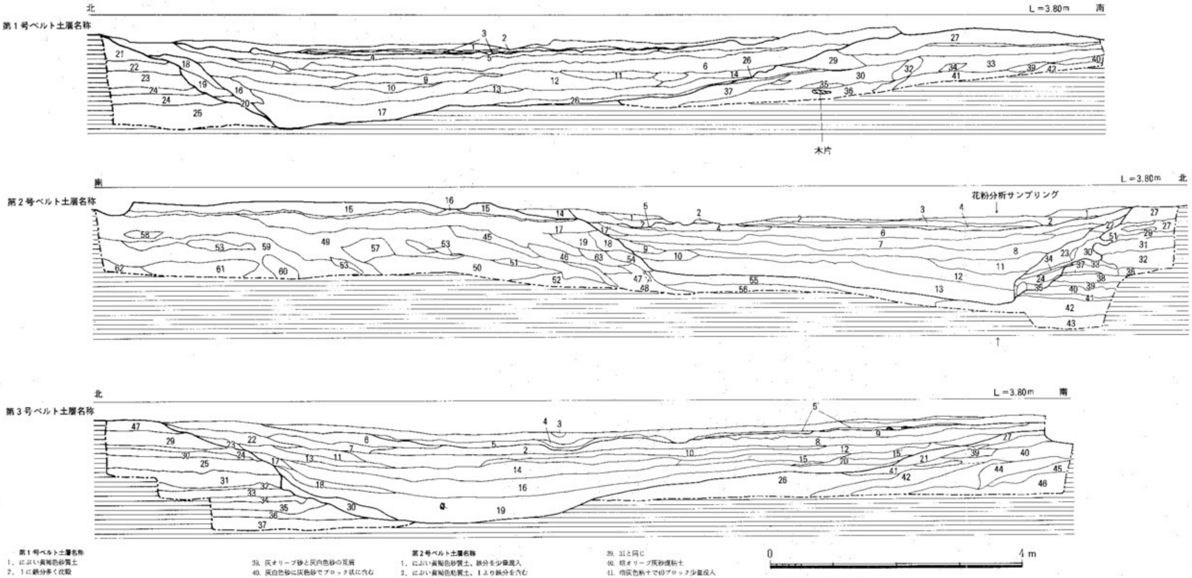
調査区東側、南から北北東方向へやや湾曲して流れる小河川である。川幅は5～6m、深さは0.7～1.1mを測り、川底のレベルは北から南へ低くなっている。川岸は流水によって削られたのか、えぐれている所がある。川の堆積土は大きく上・中・下・底層の4層に大別する。上層は第1～2層で、暗灰黄色砂質土を主体とする。中層は第2～5層で、灰色砂質土又は粘土を主体とする。下層は第6～9層で黒色粘土を主体とし、植物遺体・流木などを多く含む。底層は第10～13層で灰色砂又は粗砂礫で、水が流れた状況を示す。遺物はかなり出土しているが、特に下層の粘土層からは流木と一緒に木器類や建築部材・杭・板材などが出土している。又東岸下層から炭化米が10ヶ所、拳し状の塊で出土しており、東側台地面からの流れ込みの可能性がある。西岸の基盤土は砂質シルトであるが、東岸の方は灰白色の砂であり、東から西へ川が移動していった状況を示す。柵とか杭列などはなかった。

SD15（Fig. 11、PL. 1・4）

調査区A～F区にかけて検出した北側に弧状に湾曲する川である。川幅は10.5～12m、深さ1.5～1.6mを測る。川岸は比較的緩やかであるが、外側の方が水が速く流れた為か、壁面がえぐれてやや急になっている。川底は中央部より外側寄りが深くなっている。レベル的には西から東へやや低くなっていく。北岸には木が生えていたのか根株があった。

堆積土は上面に包含層の残りがあるが、その下は一応上・中・下・底の4層に分類する。上層は灰色粘土系を主体とし、中層はオリーブ黒色粘土から暗緑灰色粘土、下層は黒色粘土、底層も黒色粘土で、軟質でしまらなく、植物遺体を多く含んでいた。またE2・3区の外側近くでは上・中層の埋土に炭化物を多く含んでいた。

遺物は土器を中心に多量に出土している。特に上・中層からの出土が多く、しかも内側の方からの出土が多い。木器については、数が少ないが、下層・底層からの出土が多い。製品は少なく、杭や板材、未加工品などが比較的多い。外側の壁面土は浅黄色シルトで比較的しっかりするが、内側は上面が灰色砂又はシルト、下方が粗砂礫になり、南側にあった川が、砂礫の堆積と共に北の方へ川が移っていた状態を示し、また堆積層の状況から最終段階では三ケ月湖みたいな感じの状況になり、自然に埋没していった事が考えられる。また遺物の出土が内側に多いという事は、集落の中心が南側にあるという事が考えられる。自然河川ではあるが、形態的に見て環濠と同じような役割をなしていたことが予想される。



第1号ベルト土層名称

1. にぶい黄褐色砂質土
2. 1に鉄分多く沈殿
3. 暗褐色砂質土
4. 黒褐色粘土
5. 灰色粘土、鉄分が垂直に沈殿、軟質
6. オリーブ黒色粘土、植物多く混入
7. 暗オリーブ灰粘土、5より暗い
8. 7に灰白色砂を少量混入
9. 6に細砂多く混入
10. オリーブ黒粘土、植物多く混入
11. 暗緑灰色粘土、軟質
12. 10でより暗い、軟質で締まらず、植物多く混入
13. 灰色粘土で暗黄褐色砂をレンズ状に少し混入
14. 暗灰黄褐色砂質シルト、鉄分多く混入、緻密
15. 灰色細砂、やや粘質、灰白色細砂を少量混入
16. 黒色粘土、12に近い軟質で締まらない
17. 8に灰色粘土・灰白色シルト少量混入
18. オリーブ黒粘土に灰色粗砂・オリーブ灰色粘土若干混入
19. 灰色細砂
20. 浅黄色シルト、緻密鉄分混入
21. 緑黒色粘土
22. オリーブ灰色粘土、下方オリーブ黒粘土ブロック少量混入
23. 22よりオリーブ黒色粘土の混入多い
24. オリーブ黒色粘土と灰色砂の互層
25. 16と黄褐色砂の混合、鉄分沈殿
26. 灰オリーブ細砂、鉄分が斑点沈殿
27. 暗オリーブ灰色細砂
28. 灰色粘土、やや細砂混じり
29. 灰色砂で黄褐色砂ブロックを少量混入　29'. 灰色砂で黄褐色砂ブロック少量混入
30. 暗灰褐色砂で灰白色砂をレンズ状に混入
31. 暗黄褐色細砂
32. 灰オリーブ砂、やや目は細かい
33. 灰色細砂、鉄分混り垂直に入る
34. 灰白色細砂
35. 灰白色中粒砂
36. 灰白色粘質細砂と灰白色粗砂の互層、植物遺物多量混入
37. 灰白色粗砂、鉄気を帯び、植物を含む
38. 灰オリーブ中粒砂
39. 灰オリーブ砂と灰白色砂の互層
40. 灰白色砂に灰色砂でブロック状に含む
41. 暗灰色細砂、水平堆積
42. 暗灰色細砂で灰白色砂をブロック状に混入

第2号ベルト土層名称

1. にぶい黄褐色砂質土、鉄分を少量混入
2. にぶい黄褐色粘質土、1より鉄分を含む
3. 明黄褐色砂質土、鉄分混り
4. 灰色粘土、少し軟質
5. 4に細砂混入
6. 4に黒褐色粘土ブロック少量混入
7. 黒褐色粘土で灰色粘土少量混入
8. オリーブ黒色砂混粘土
9. 灰色粘土に灰白色砂を少量混入
10. 灰色砂混粘土で灰白色砂を少量混、植物遺体多く混入
11. オリーブ黒色粘土でやや砂質、植物遺体特に多く含む
12. オリーブ黒色粘土、軟質で締まらず、植物遺体多く混入
13. オリーブ黒色粘土、やや砂質で軟質
14. 暗灰黄色砂質シルト、暗灰黄色粘土少量混入
15. 暗灰黄色細砂
16. 明黄褐色細砂
17. 灰色細砂、鉄分上より沈殿、 17'. 17に6粘土ブロック少量混入
18. 灰色粘質砂にオリーブ黒砂ブロック混入
19. 灰オリーブ砂と灰白色の混合
20. 灰オリーブから暗灰色砂
21. 暗灰黄褐色砂質土、硬く締まる
22. 暗灰黄褐色細砂、灰白色砂わずかに混入
23. 暗灰色粘質砂に灰オリーブ砂少量混入
24. 緑黒色粘土にオリーブ灰色粘土・灰白色砂少量混入
25. オリーブ灰色粘土と緑黒色粘土の混合
26. オリーブ灰色粘土
27. 灰オリーブシルト
28. 27で灰白色細砂をレンズ状に混入
29. 27で灰白色細砂をうすく縞状に混入
30. 黒色粘土と灰オリーブ砂の混合
31. 黒色粘土
32. 緑灰色粘土
33. 黒色粘土ブロックで灰白色砂をレンズ状に混入
34. 灰オリーブ砂レンズ状に混入
35. 暗灰色粘質砂に灰オリーブ砂ブロック混入
36. 緑灰色粘質砂
37. 36とほぼ同じ
38. オリーブ灰粘土
39. 31と同じ
40. 暗オリーブ灰砂混粘土
41. 暗灰色粘土で40ブロック少量混入
42. オリーブ黒粘土
43. 黒色粘土で砂混り
44. 緑灰色粘土ブロック
45. 灰オリーブ中粒砂
46. 暗灰色細砂を縞状に混入
47. 灰色砂
48. 灰白色砂
49. くらい灰色細砂に48レンズ状に混入
50. 灰白色粗砂と灰色中粒砂の互層
51. 灰白色粗砂
52. 灰白色細砂
53. くすんだ灰白色砂
54. にぶい黄色細砂に灰色細砂ブロック状に混入
55. 灰白色中粒～粗粒
56. 灰色中粒砂
57. 灰白色中粒砂に灰色砂をブロック状に混入
58. 黄色粗砂
59. 灰色細砂で灰白色砂をレンズ状に混入
60. 灰色砂に暗灰色砂を斑状に混入
61. 60で植物遺体を含む
62. 暗灰色砂
63. 灰色粘質砂とにぶい赤褐色砂の互層

第3号ベルト土層名称

1. 褐色粘質シルト
2. 暗灰黄色シルト　鉄分が帯状に沈殿する
3. 灰オリーブ細砂（攪乱）
4. 灰黄褐色粘質シルト
5. 黄灰色粘土、やや砂質　5'. 5に黒褐色粘質砂少量混入
6. 灰オリーブシルト質細砂、硬くしまり鉄分混入
7. 暗灰黄色粘土で炭化物多量混入
8. 暗緑灰色粘土
9. 灰オリーブシルトで鉄分が多く沈殿する
10. 暗緑灰色粘土、8よりくらい
11. 灰色砂混り粘土、やや砂質
12. 灰色粘土とオリーブ黒粘土の混合
13. 灰色細砂混粘土、鉄分をやや含む
14. 暗緑灰色砂混粘土
15. オリーブ黒粘土で16より少し明るい　15'. 15にオリーブ黒色砂混り粘土混入
16. 15より暗く、植物遺体多く混入
17. 13とほぼ同じで灰白色細砂わずかに混入
18. 灰色細砂で灰白色細砂を若干含む
19. オリーブ黒粘土、16に比べ粗砂混入、植物遺体多く混入
20. 灰色粘土、南側若干砂質
21. 灰色粘土
22. 灰オリーブシルト質細砂、6より暗い
23. 22に灰白色砂を若干混入
24. 灰黄色シルト質細砂
25. 緑黒色粘土で緑灰色粘土を少量混入
26. 灰白色粗砂礫
27. 灰色軟質細砂、上面より鉄分が垂直に沈殿
28. 暗灰色砂、やや粘質で灰白色砂をレンズ状に混入
29. 暗灰黄褐色細砂、硬く締まる
30. 緑灰色細砂、灰白色砂を縞状に混入
31. 緑灰色粘土、35をわずかに混入
32. 31で灰色砂を多く混入
33. オリーブ灰色粘土、軟質
34. 25で暗灰黄色砂を縞状に混入する
35. 暗灰黄色砂質粘土にオリーブ灰色粘質砂を混入
36. 暗灰色粘土、やや砂質
37. 黒色粘土で細砂を少し含む。植物遺体も混入、軟質
38. 灰色細砂、少し粘質があり灰白色砂をレンズ状に含む
39. 灰白色細砂と灰白色砂の左下りの縞状の互層
40. 灰色細砂で灰白色細砂を左下りに縞状に多く含む
41. 灰白色砂に灰黄色砂が幾筋も縞状に入る
42. 灰白色砂と黒褐色砂の互層
43. 42で灰白色粗砂をレンズ状に含む
44. 暗灰色細砂で黒褐色砂・灰色砂を縞状に含む
45. 36と同じ
46. 暗灰色砂に黒褐色砂が薄く縞状に入る
47. 灰オリーブ砂質シルト

Fig.11　ＳＤ15土層図（1/60）

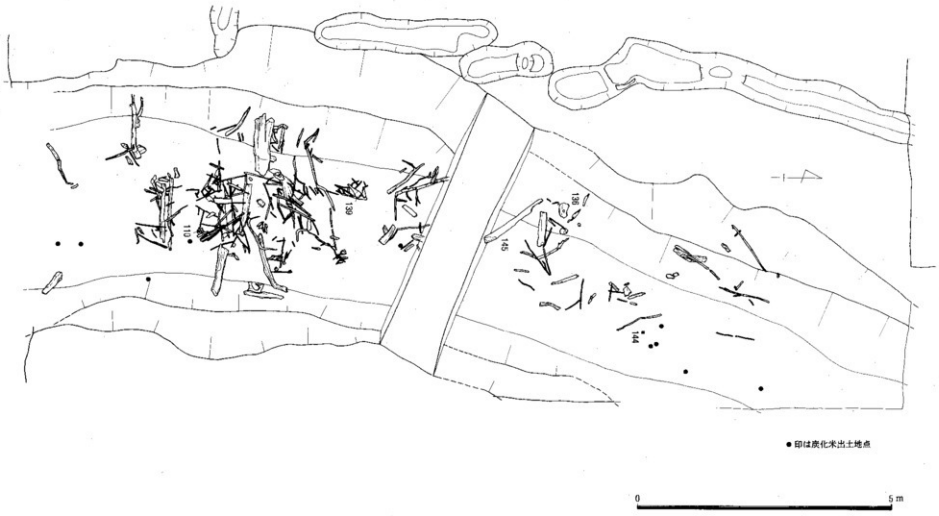


Fig.12　SD01木器出土状況（1/75）

3．出土遺物

(1) 古墳時代の調査

包含層出土遺物（Fig. 13～16、PL. 5）

1～17は須恵器。1・2は有蓋高杯の蓋片。天井部が中窪む扁円なつまみがつくもの。天井部と口縁部の境には明瞭な段が付く。1はA 2区、2はA 3区出土。3～7は杯蓋片。天井部は割合平坦で、その大半は回転ヘラ削り。天井部と口縁部の境には断面三角状の突帯が付く。7は天井部がわりと高く丸味を帯びる。天井部にヘラ記号らしきものがある。3・4はA 2区、5～7はB 2区出土。8～13は杯身。いずれも立上がりが直立気味に高く、受部は短く水平に付く。12にヘラ記号がある。8はA 2区、9～11はB 2区、12はC 2区、13はE 2区出土。14は高杯脚部片。3ヶ所の円形穿しを持ち、その下には三角突帯が付く。A 2区出土。15は胴体部片、径1.2cmの円孔と櫛描波状文が入る。A 2区出土。16は大形器台の杯部体部片。上下2条の三角突帯の中に2段の櫛描波状文が入る。A 2区出土。17はコーヒーカップ状の把手付杯、耳は欠失。底部は静止ヘラ削り。18は小型の頸部がしまる壺。弥生土器か。A 3区出土。19～27は土師器。19・20は甕小片。19は復元口径10.6cm、20は16.2cmを測る。いずれもB 2区出土。21～23は椀で復元口径12.2～12.8cmを測る。21は口端部が外反、22・23は内傾気味に直立する。21～23はA 2区出土。24～27は高杯、24は脚部に3ヶ所の円孔穿しが入る。24はB 3区、25・26はA 3区、27はA 2区出土。28・29は中実の支脚。断面は28が方形に近い円形、29が略円形。いずれも表面は2次的に焼けている。28はA 3区、29がB 2区出土。30～32は小型の鉢。平底で体部が内湾気味に開く器形。30は弥生土器。30・32がA 3区、31がA 2区出土。33・34は土師器の甑底部片である。33がA 2区、34がA 3区。35・36は板付Ⅱ式の如意形口縁の甕。口唇部には刻目がある。35はA 3区、36はC 3－21区出土。37は弥生中期後半の無頸壺。口縁部に2個1組の孔が1対付く。A 2区出土。38は断面円形の角状の不明土製品、A 3区出土。39は土器片利用の円板。周縁は擦っている。D 3－3区出土。40は土器片利用の紡錘車。A 2区出土。41は投弾、重さ10.5gを測る。C 3区出土、44～47・49は太型蛤刃石斧。いずれも破損品である。石質は玄武岩。48は扁平打製石斧か。石質は玄武岩。44はE 3区、45はC 2－2区、46はC 2－21区、48はD 3－8区、49はC 3－2区出土。50～55は扁平片刃石斧。いずれも破損品で石質は頁岩。50～52・55はB 2区、53はB 3区、54はA 3区出土。56～58は柱状片刃石斧で刃部を欠失。石質は56・58が頁岩。57が砂岩。56はB 2区、57がD 2－22区、58がA 2区出土。59は石鏃小片か。表面は欠損が著しいが研磨、灰色で砂岩製。60・61叩石、60は砂岩製である。上下両端に使用痕が残る。B 2区出土。61は緑泥片岩の円礫を利用したもの。62～64は砥石片。62は柱状片刃石斧の可能性もある。石質は堆積岩（砂岩か）で表面には粘板岩が乗る。63は砂岩。64は玉磨き用か、深い溝状の使用痕が付く。石質はチャート。62はC 2区、63・

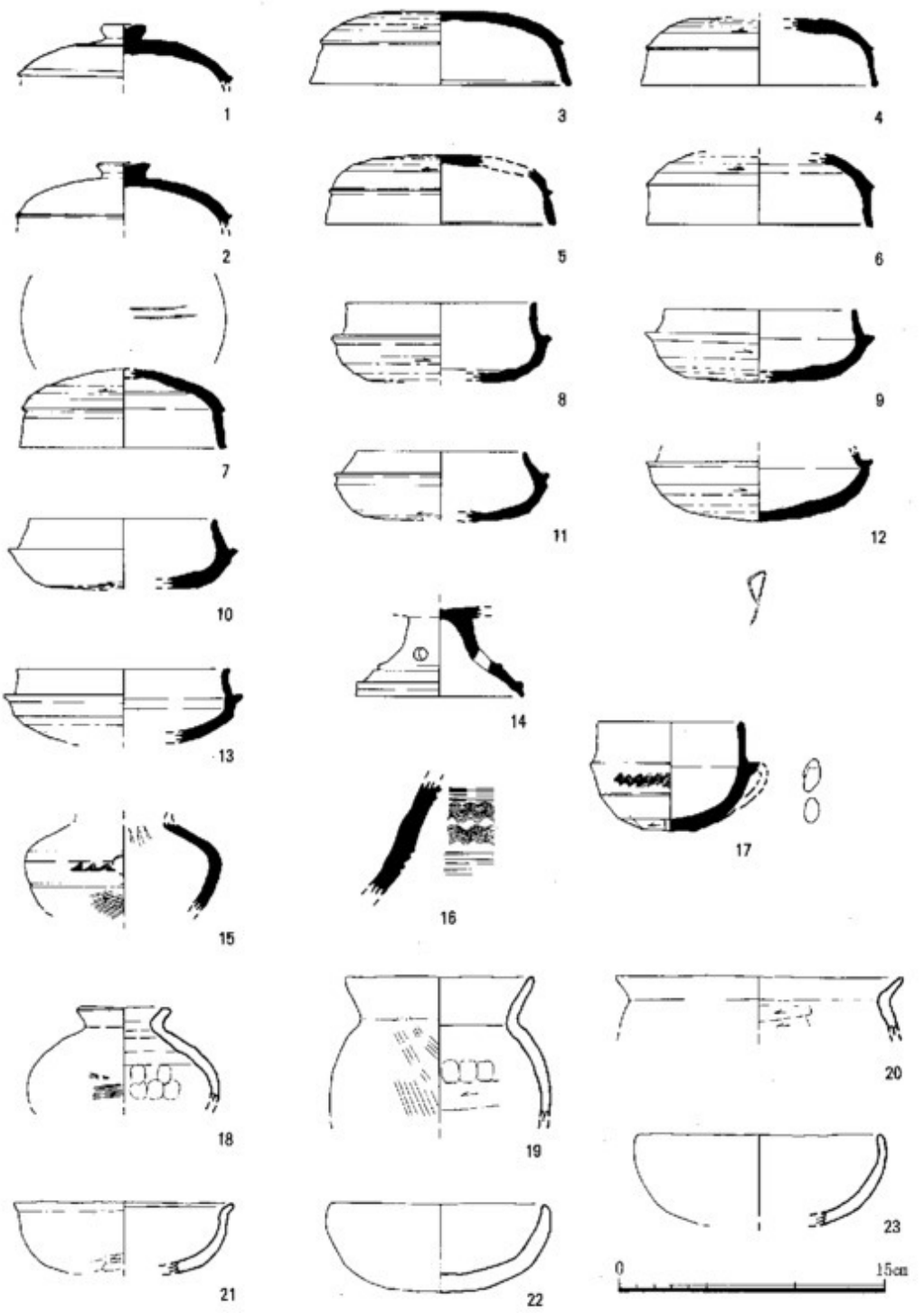


Fig.13　包含層出土遺物１　（1/4）

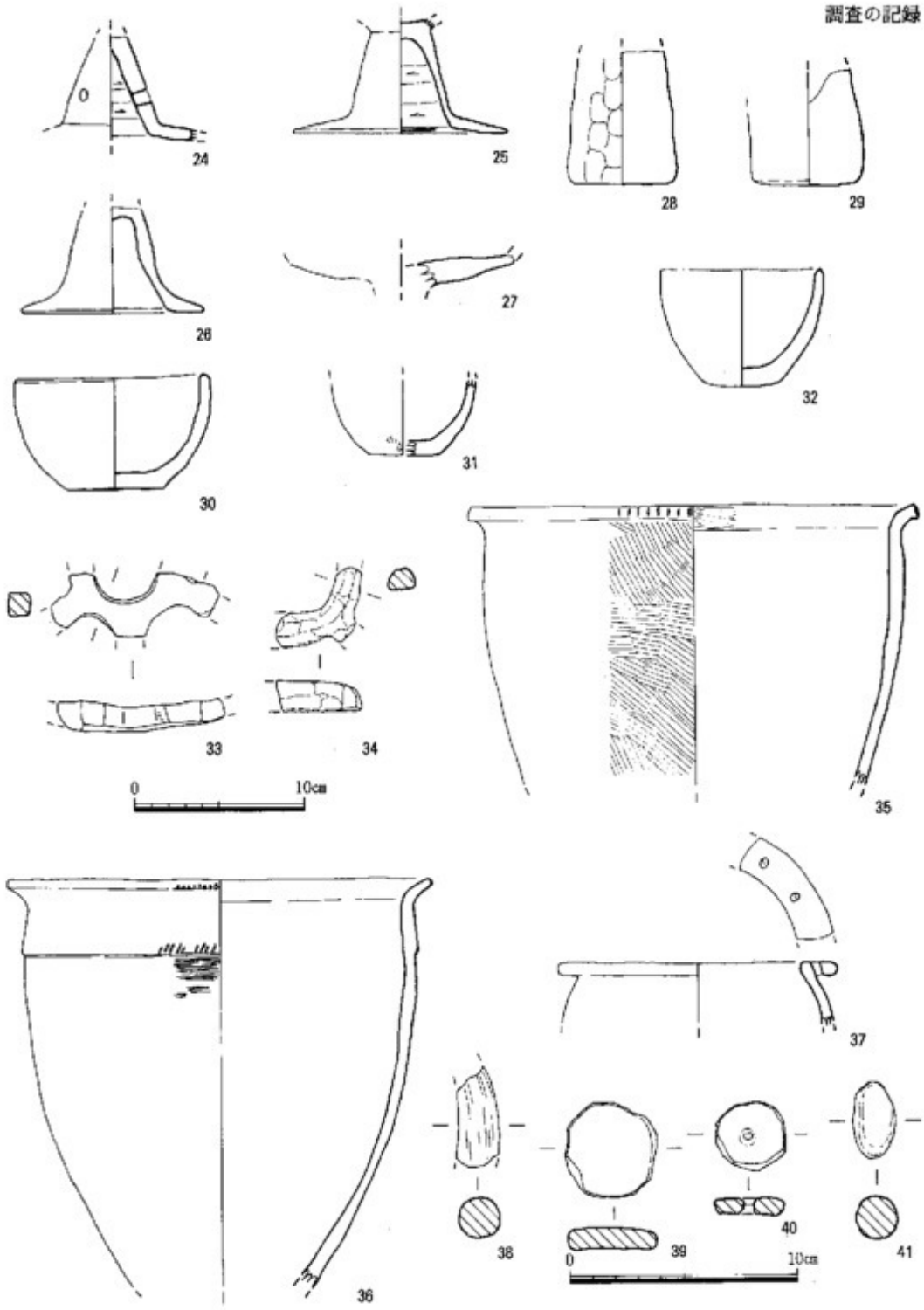


Fig.14　包含層出土遺物２　（1/４・1/３）

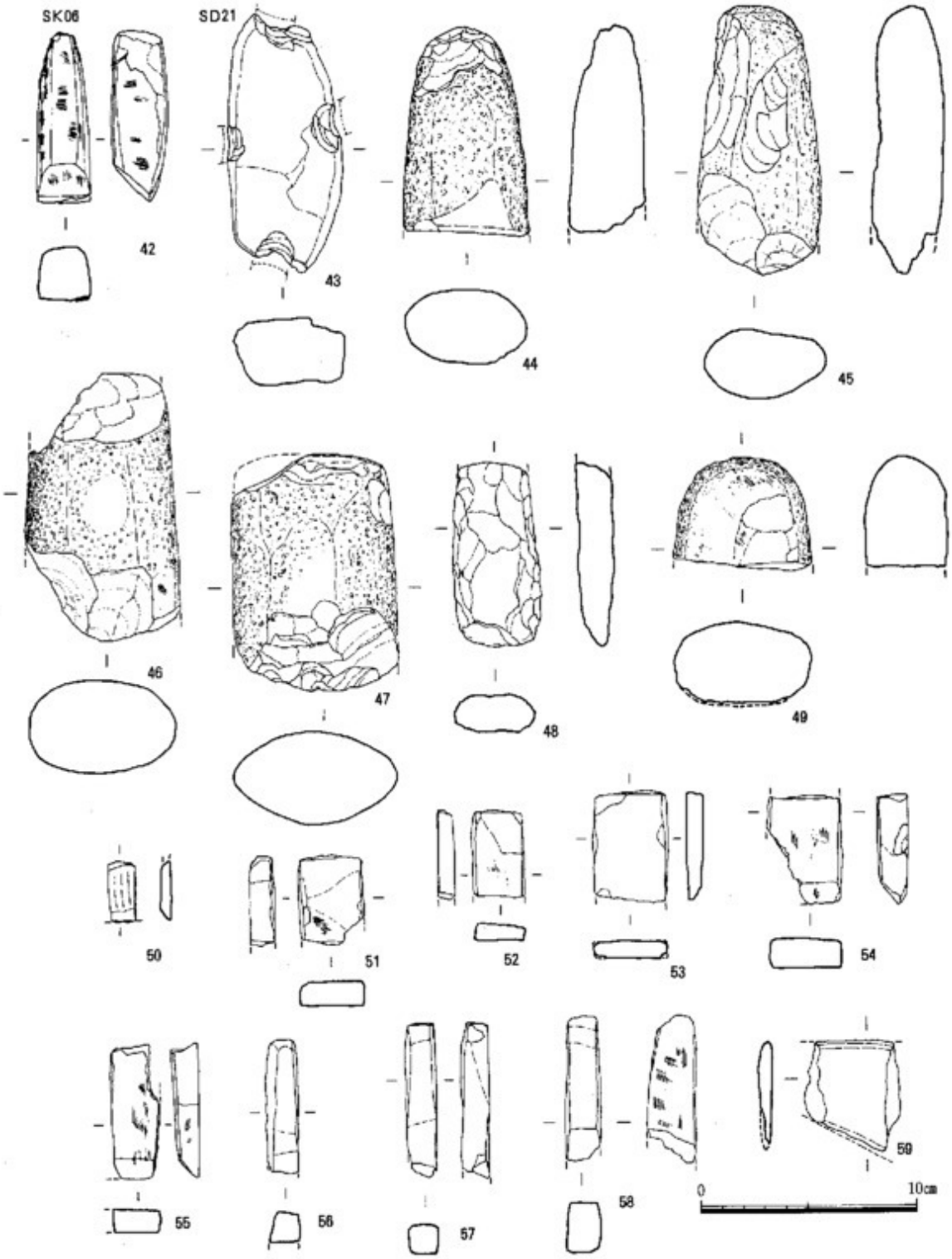


Fig.15　包含層出土遺物 3　（1/3）

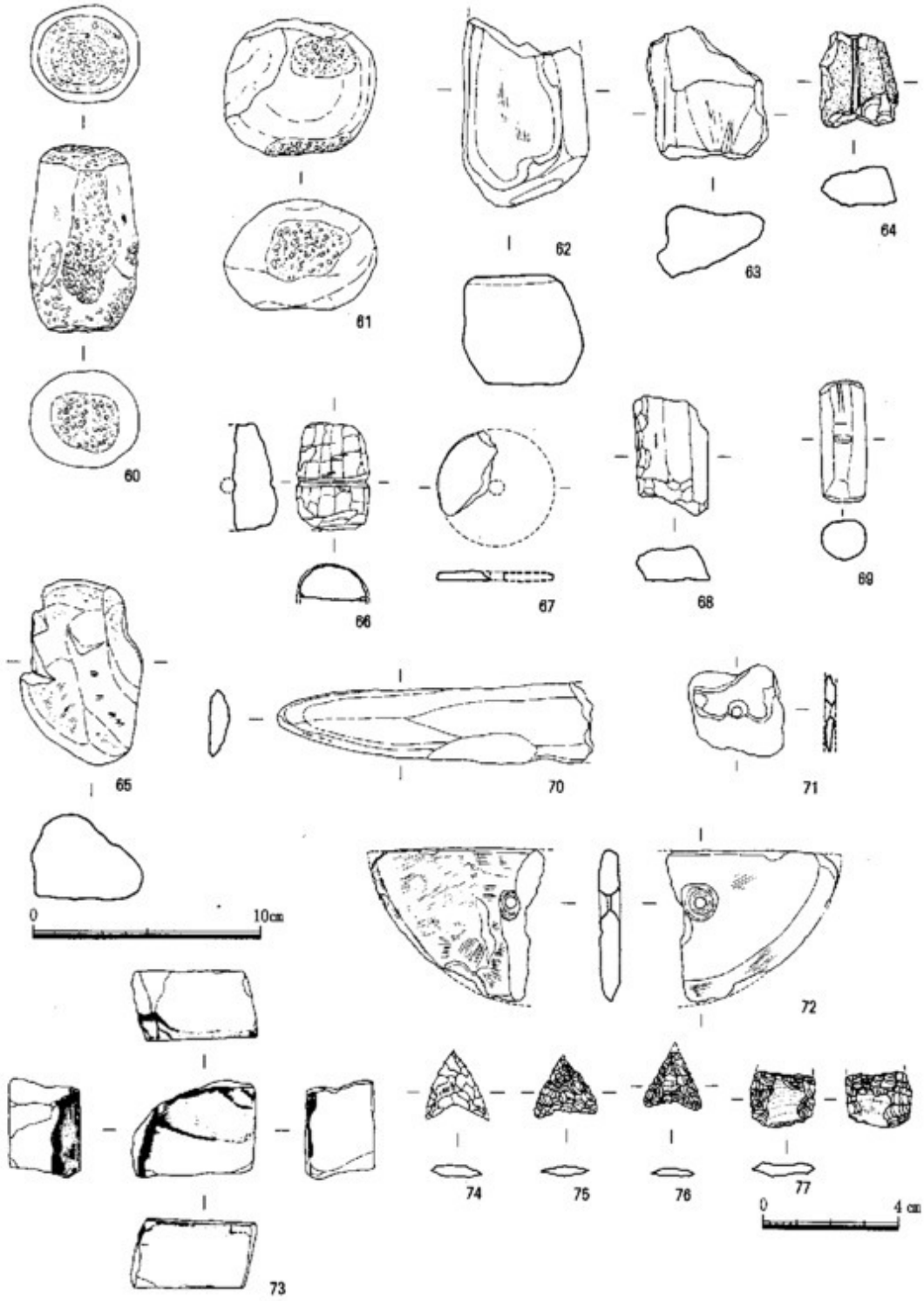


Fig.16　包含層出土遺物　(1/3・1/2)

64はＢ２区出土。65は自然転礫利用の敲石か。側面に使用痕が残る。石質は火成岩系。66は滑石製のもの。いずれもＣ２区出土。67は砂岩製の紡錘車片。復元径5.1cm を測る。Ｂ３区出土。68は頁岩製の不明製品。石斧の一部か。Ａ２区出土。69は滑石製の棒状石製品。上面は平坦で刻目と浅い抉りがある。漁撈具か。Ｂ３区出土。70は石剣、砂岩製であるが風化がひどく表面は剥落が著しい。Ｂ２－８区出土。71は石包丁の小片。孔が中心にあり、転用品か。Ａ２区出土。72は外湾刃半月形石包丁の半損品。表面は剥落するが片面には研磨擦痕が残る。Ｂ２区出土。71は砂岩、72は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス。73は鋳型転用砥石の小片。一辺が5.5×4.4cm、厚さ3.1cm。上面が鋳型面で焼けこげている。左側面が他側面に比べよく焼けており、湯口の可能性がある。とすれば中広か中細の銅戈の可能性がある。石質はアプライトでＢ２区出土。74～77は打製石鏃。石質は74がサヌカイト、75～77が黒曜石。77はスクレーパーの可能性がある。74はＣ２区、75はＢ３区、77はＢ２区出土。

祭祀遺構出土遺物（Fig. 17、PL. 5）

78～85はミニュチュア土器。78は１号祭祀出土の壺。口縁部を欠失するがほぼ完形。79・80も壺で、口径は79が4.8cm、80が3.3cm を測る。いずれもＡ３区出土。81～83は鉢のミニチュアか。81は逆Ｌ形の口縁が付く。Ａ３区出土。82・83は杯形の鉢でいずれもＢ２区出土。84・85は丸底の底部片。いずれもＢ２区出土。86は土製模造鏡、円形で直径4.1cm を測る。中央部をつまみ上げて紐とし、そこに紐通し孔をあける。Ａ３区出土。87は土製丸玉、直径1.5～1.6cm。

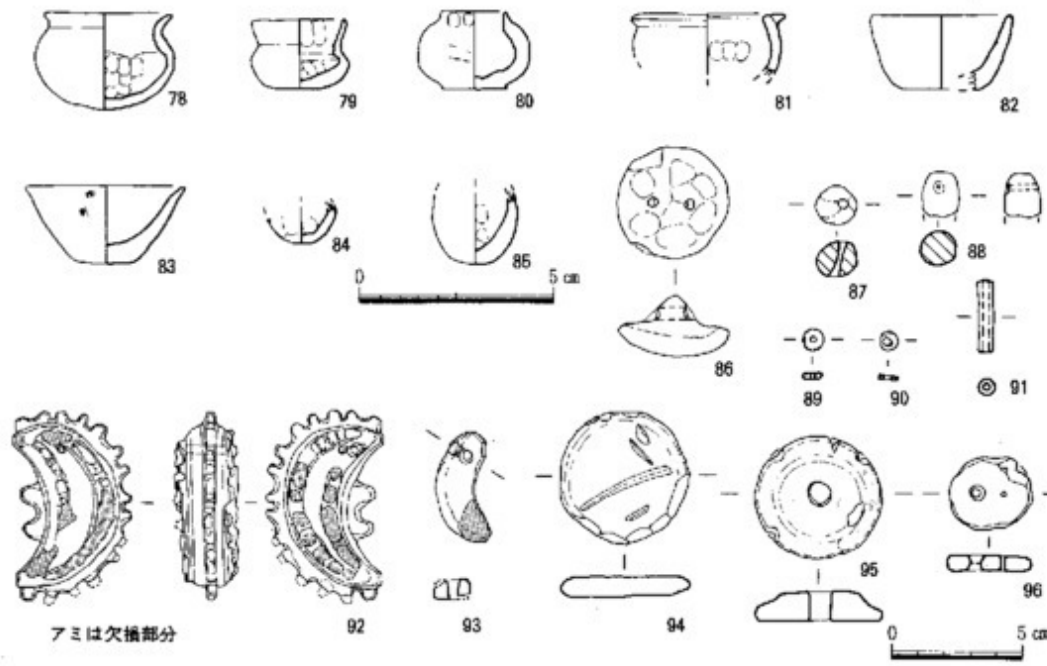


Fig.17　祭祀遺構出土遺物　（1/3・1/2）

B 2 区出土。88は土製勾玉の頭部片。B 2 区出土。89・90はA 3 区出土の滑石製臼玉。直径 5 ～ 6 mm で薄い。91は滑石製管玉。B 2 区出土。92は滑石製の子持勾玉、部分的に欠損するが残りは良い。全長7.3cm を測る。 2 号祭祀出土。93は扁平なコンマ形の滑石製勾玉、全長2.4cm で 1 号祭祀出土。94は円盤形の滑石製品、表面は擦っている。A 2 区出土。95は滑石製の紡錘車、直径4.7×4.9cm、厚さ1.1cm、孔径0.9cm を測る。B 2 区出土。96は滑石製の有孔円板。やや楕円気味で、径は3.1×2.8cm、、厚さ0.6cm を測る。大・小 2 ケ所の円孔がある。B 3 区出土。

(2) 弥生時代の調査

土坑出土遺物

SK06（Fig. 18、PL. 6）

97～100は夜臼式土器の甕である。いずれも口縁部に刻目突帯を持つ。97は口縁部が外へ開き、

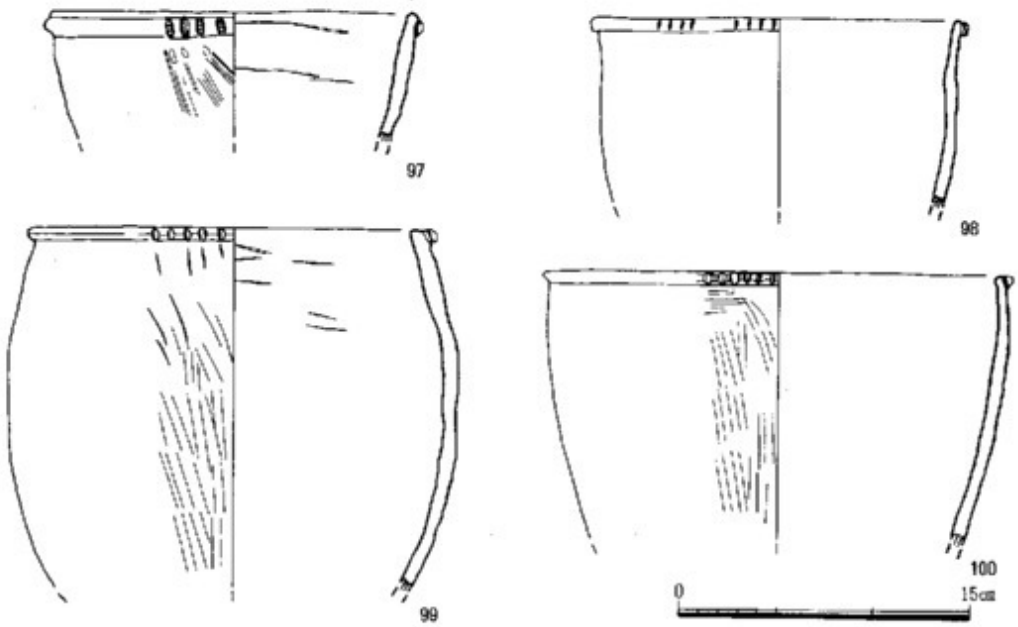


Fig.18　土坑出土遺物　（1/ 4）

口縁より少し下に突帯が付く、98は口縁部がわずかに外傾する器形、99は胴部が丸味を持ち口縁部が強く内傾する器形。100は内湾気味に直立する器形、97と99の胴内面には工具痕が残る。口径は97が19.0cm、98が19.4cm、99が21.0cm、100が24.2cm を測る。42は小型の柱状片刃石斧。刃部と基部付近を欠損するがほぼ完全。全面丁寧な研磨調整。全長7.9cm で石質は明灰色の頁岩。

溝出土遺物（Fig. 20、PL. 6）

119はＳＤ16出土の如意形を呈す甕の口縁部片。口唇部下端に刻目が付く。120はＳＤ18出土の夜臼式土器の甕口縁部片。口縁部にヘラ状工具による刻目突帯が付く。突帯下に煤が付着する。121～123・43はＳＤ21出土。121は鉢口縁部小片。122は壺の口縁部小片。口縁部と頸部の境にはヘラ状工具による沈線が入る。123は底部片。やや上げ底で、組織痕が残る。43は玄武岩の転石の四辺中央を打ち欠いた石錘。石質は玄武岩で、重さ309ｇを測る。

旧河川出土遺物

ＳＤ01（Fig. 19～22、PL. 6）

101～104・109は上層出土。101～104は土師器。101は布留式併行期の甕口縁部片。102～104は高杯。102は杯部片、103・104は脚部片。裾部が外折して開くもの103とラッパ状に開くもの104がある。以上包含層からの混入か。105は小型壺の口縁部小片。頸部に波線状の沈線が巡る。106は板付Ⅱ式期の甕口縁部細片。口唇部に刻目が入る。107は丸味を帯びた夜臼式土器の甕。口縁部下に刻目突帯が付く。108は壺の口縁部小片。以上中層出土。109は甕の脚部片。底部に木葉圧痕が残る。110は板付Ⅱ式期の黒色研磨の小型壺、復元口径7.6cm、器形11.8cmを測る。口縁部以外完形。肩部に複線山形文が入る。111・112は底部片。111は甕・112は壺の底部。113は夜臼式土器の甕口縁部細片。114は夜臼式土器の鉢口縁部片。内面黒色研磨。115～117は夜臼式土器の甕口縁部細片。118は壺底部片か。外面は丹塗りである。115～117は底層以外は下層出土。

124は石斧片で蛇紋岩製か。刃部と基部を失損する。上層出土。125は剥片利用の打製石斧か。玄武岩製で基部を欠損。下層出土。126は柱状片刃石斧の基部片、研磨が進み形はいびつ。石質は頁岩で上層出土。127は外湾刃半月形の石包丁片。石質は硅岩シルト岩か。128は挟入柱状片刃石斧などの未製品か。両端・底面を欠損し、側面・上面は研磨と敲打調整痕が残る。石質は砂岩系の堆積岩か、上層出土。129は礫錐か敲石で、上下両端、上面に使用痕がある。石質は砂岩で中層出土。130は扁平な自然礫を利用した石錘か。重さ218ｇを測り、石質は堆積岩系か。中層出土。131～135は打製石鏃。いずれも黒曜石製で、先端や基端を欠損する。131は下層、その他は上層出土。

136は木製品である。いずれも下層出土。136は農耕具の諸手鍬。かなり破損が著しい。137は鍬の柄穴隆起部か。138は杓子状木製品の一部か。139は木槌のような木製品で芯持材を用いている。全長33.5cmを測る。表面雑な削りで、先端は磨滅し滑らか。外面焼け炭化している。140・141は棒状の木製品で、先端に削りを加え、杭状を呈す。142は板状の加工材、右側片上半に方形の柄穴のようなものがある。143は矢板又は鍬の未製品と思われる板材。表面は部分的に削り痕が残り、下端は焼けている。144は脚付杯である。残存長9.2cmを測る。全面は黒漆を下地に、上に赤漆を塗布している。下層の流木集積層から出土している。145は建築材で、全長約1.5ｍを測る。全面焼けて炭化していた。

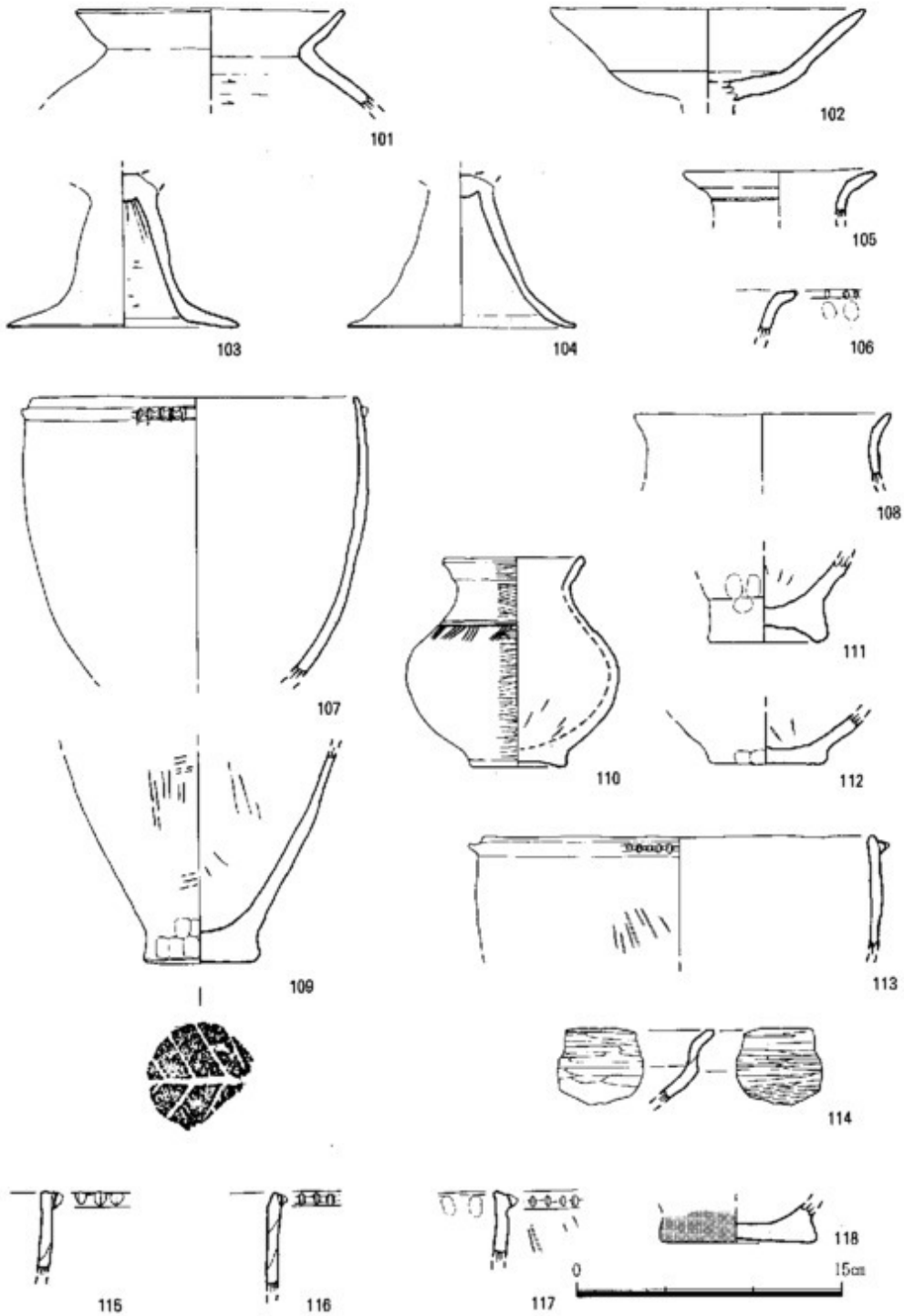


Fig.19　ＳＤ01出土遺物１（1/4）

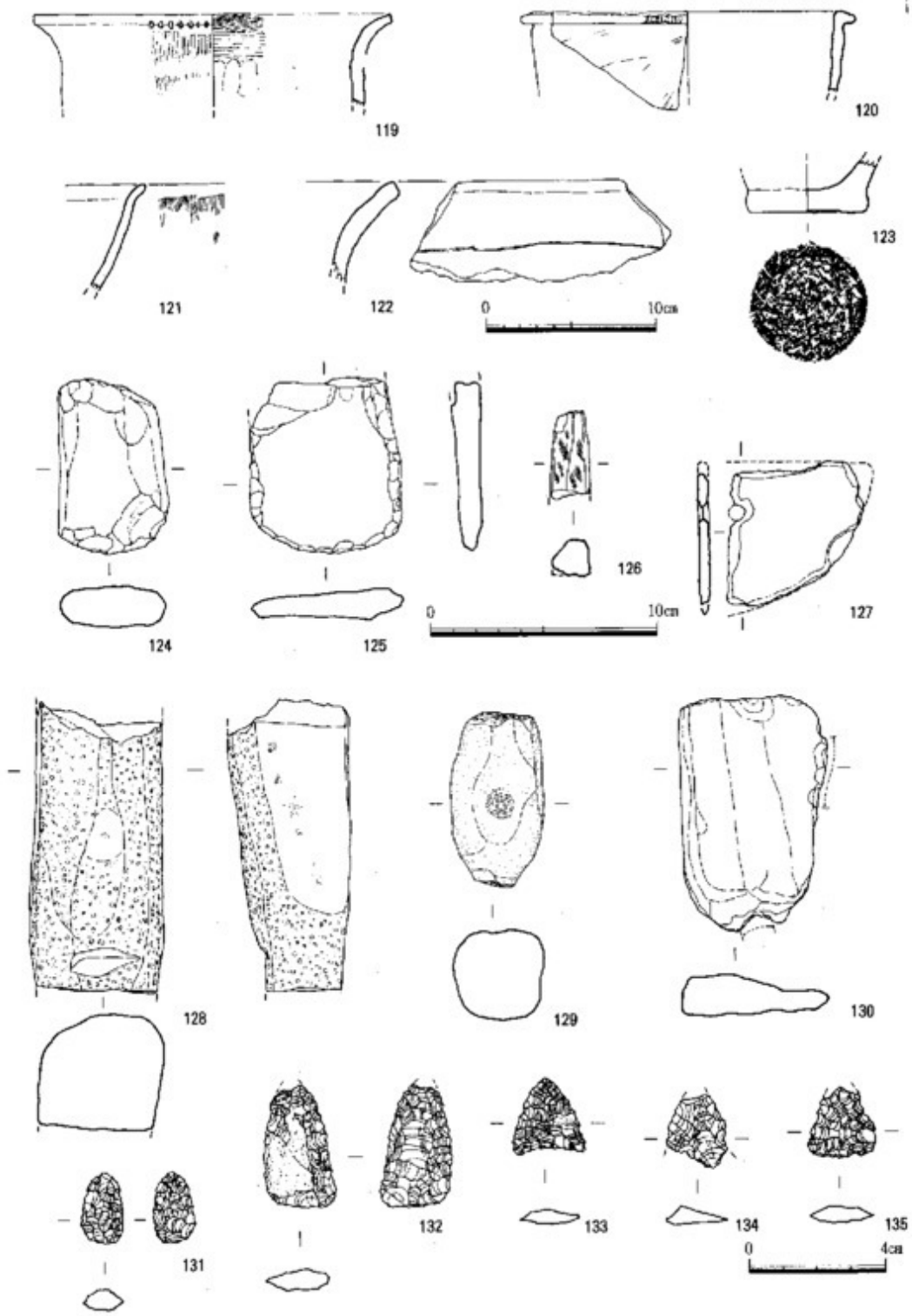


Fig.20　S D01・16・18・20・21出土遺物 2 （1/ 4 ・ 1/ 3 ・ 1/ 2）

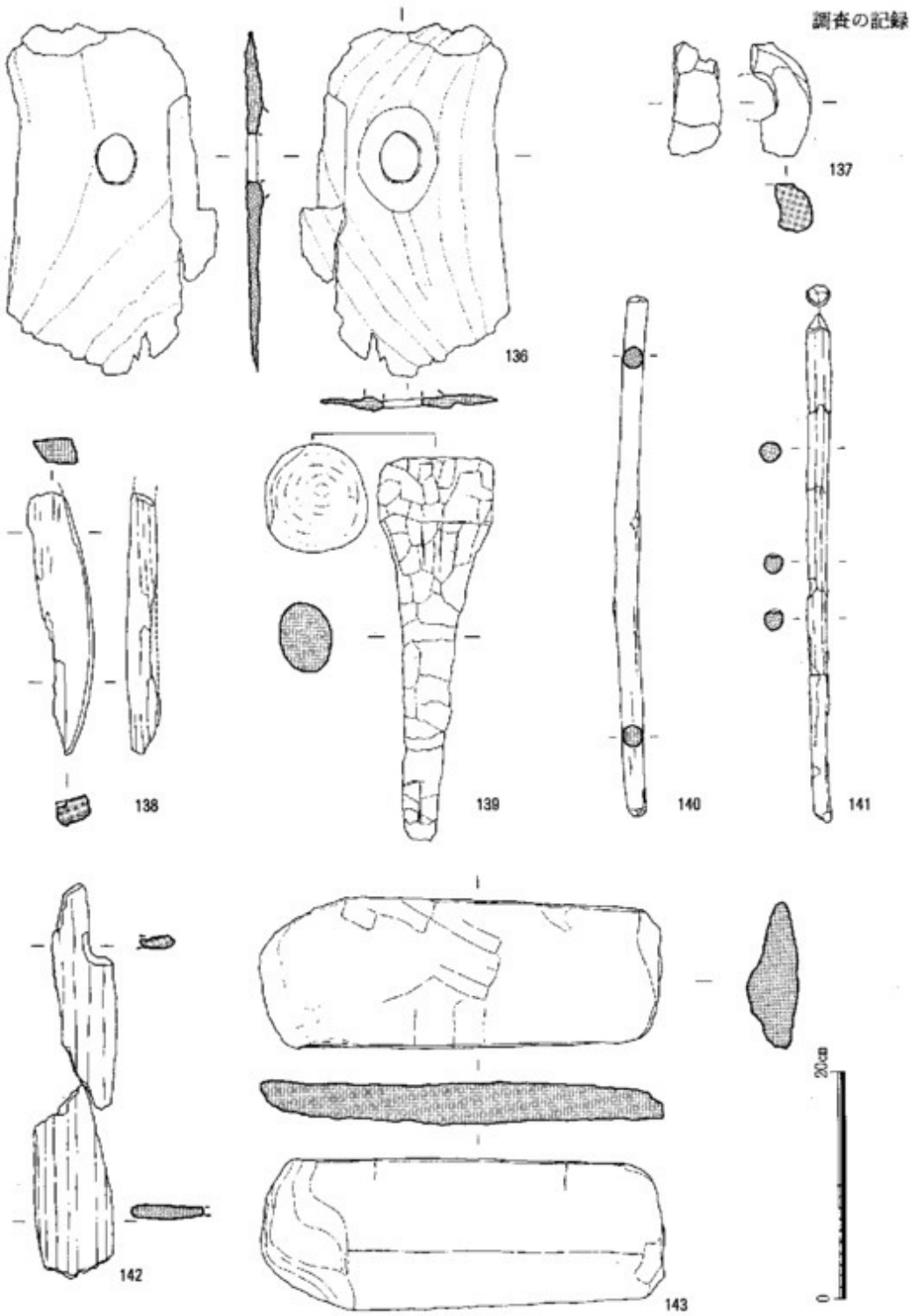


Fig.21　S D01出土木器 1 （1/ 6）

SD15（Fig. 23～40、PL. 7・8）

146～163は上層（第1層）出土。上面には一部包含層の遺物が混入する。

146～150は夜臼式土器の甕。146・147は復元完形品・口縁部に刻目突帯が付くが、刻目はまばら。146の内底に煤が付く。器高は24.0cm、27.6cmを測る。150は夜臼式土器の胴底部片。器表は荒れるが条痕が残る。151は口縁部がわずかに外反する甕で、口唇部に刻目を持つ。板付Ⅱ式のものか。152も板付Ⅱ式の甕で口縁部に密な刻目が付く。外面粗い刷毛で煤が付着し、胴下半は表面が剥落する。153・154は甕の底部片。153は底部に径約1cmの円孔が焼成後穿孔される。154は前期末から中期前半のものか。155～157は壺。いずれも夜臼式土器の中型壺。外面ヘラ研磨で、155・157は黒斑がある。156は丹塗りの大型壺。158は円盤状の丸っこい底部が付く。158は板付Ⅱ期の鉢か。内外面ヘラ研磨。底部に焼成後の穿孔がある。内面黒色研磨。159・160は板付Ⅰ式かⅡ式の壺の肩部片。159は貝殻腹縁による有軸羽状文又は綾杉文、160は貝殻腹縁による綾杉文が付く。160は丹塗りか。161は鉢で口縁部がやや外反する。162は古墳時代のミニュチュア土器。包含層からの混入か。

163～196は中層（第2層）出土。163～169は夜臼式土器の甕。口径は18.5～25.8cmを測る。刻目突帯は口縁部上面に付くもの（164・165・167～169）、やや下に付くもの（164・166）などがある。外面調整は板又は貝殻によるナデで、全体に外面煤が付着し、器表面は剥落するなど荒れている。170は口縁部と胴部との屈曲部にヘラによる刻目を持つ甕。外面は板又はヘラ状工具のナデで、煤が付着する。171～178は板付Ⅰ式からⅡ式前半

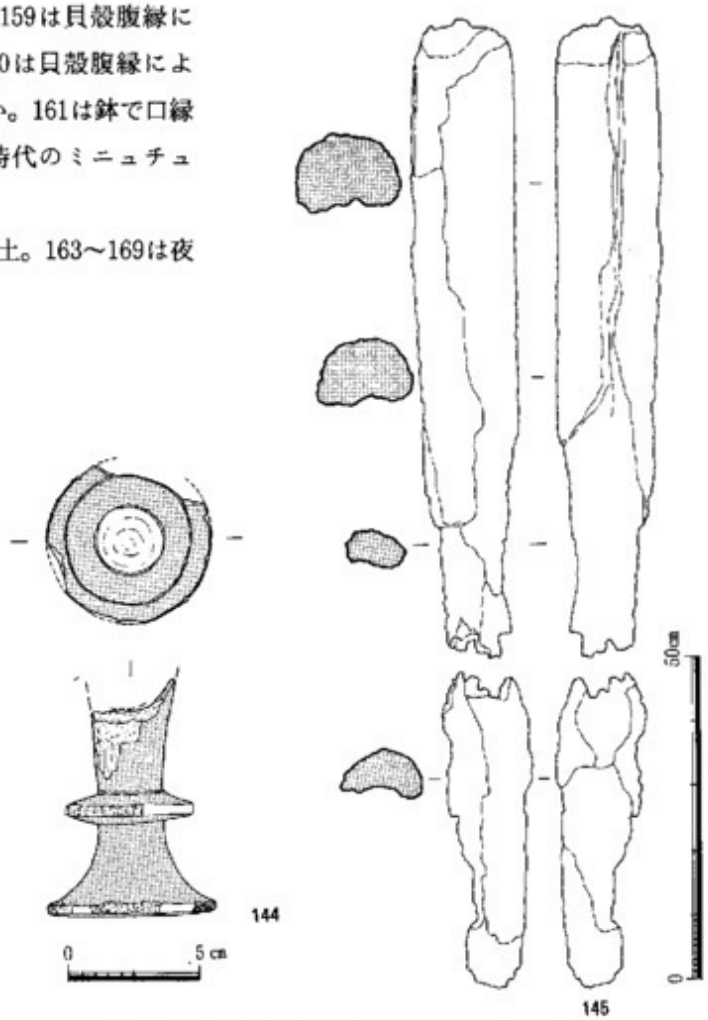


Fig. 22　SD01出土木器2（1/3・1/12）

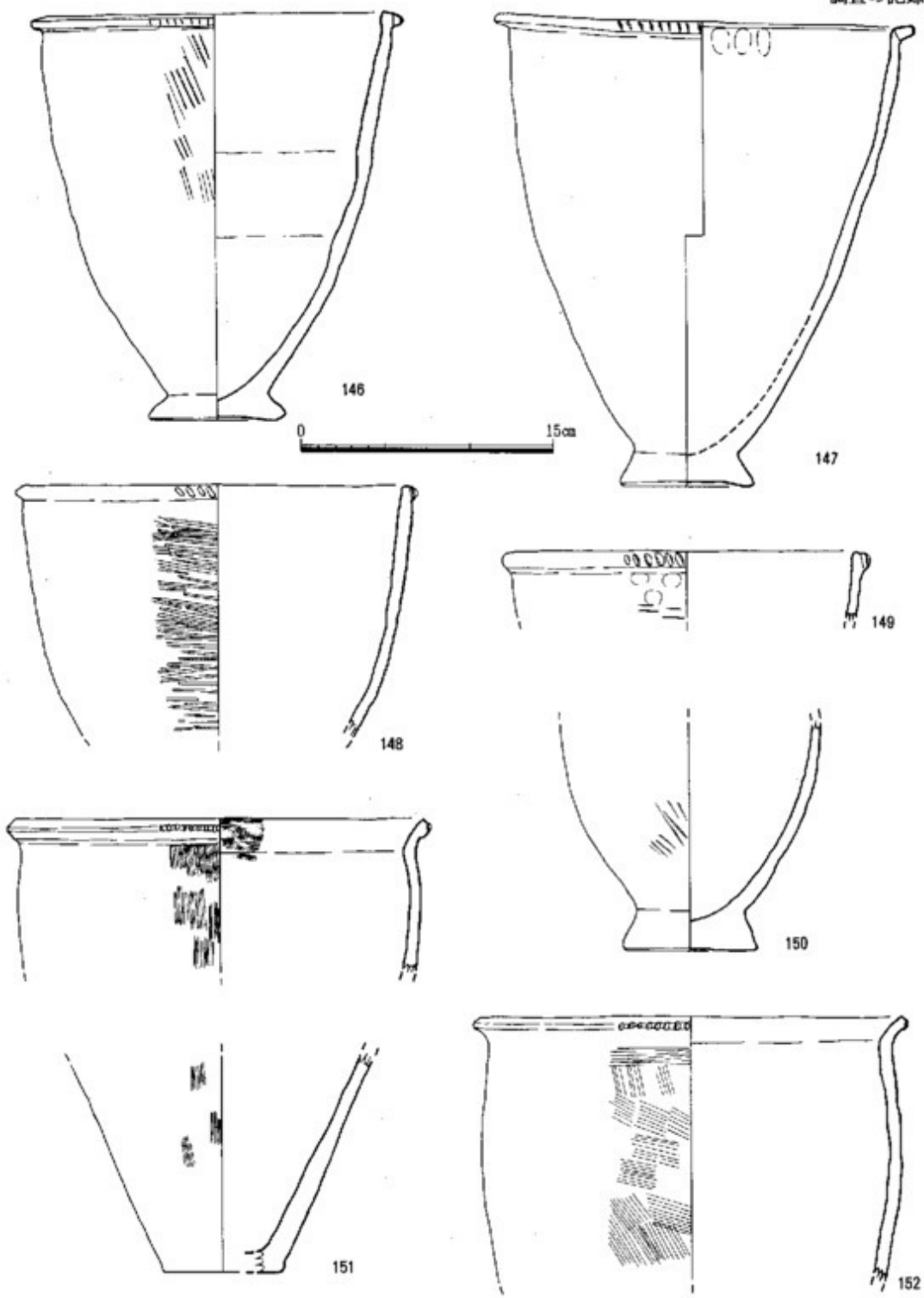


Fig. 23　ＳＤ15出土遺物１（1/4）

期の甕。口径は19.2～27.0cmを測る。171は1/2片で、復元口径23.8cmを測る。口唇部に櫛状工具による刻目が付く。172は口唇部下端にヘラ状工具による浅い刻目が付き、胴外面は粗い縦刷毛。煤が付着し器表は剥落・荒れが著しい。173は復元完形の中型甕。口径24.2cm、器高29.0cmを測る。口縁部と胴部の境に軽い段が付く。内面は器表が荒れる。174はかるく外反する口縁部で、ヘラ状工具による刻目が付く。175は刻目の間隔がやや開き、外面縦又は斜めの刷毛目。176・177もほぼ同様の器形。176は外面煤が厚く付着し、器表が加熱によるものか剥落している。178は胴部がやや膨れる器形。179～181は底部片。179は夜臼式土器の甕底部片か。木葉圧痕が残る。

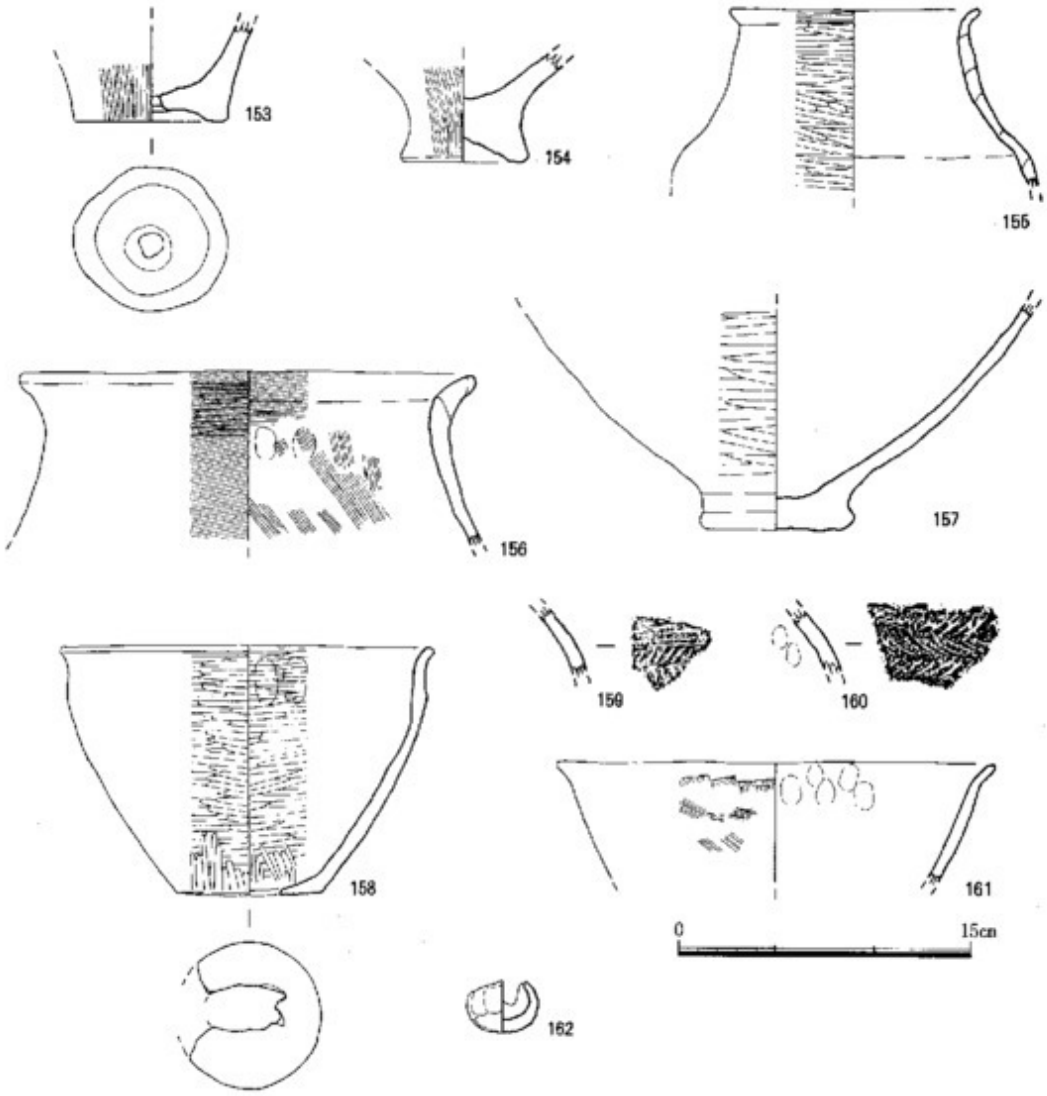


Fig.24　SD15出土遺物2（1/4・1/3）

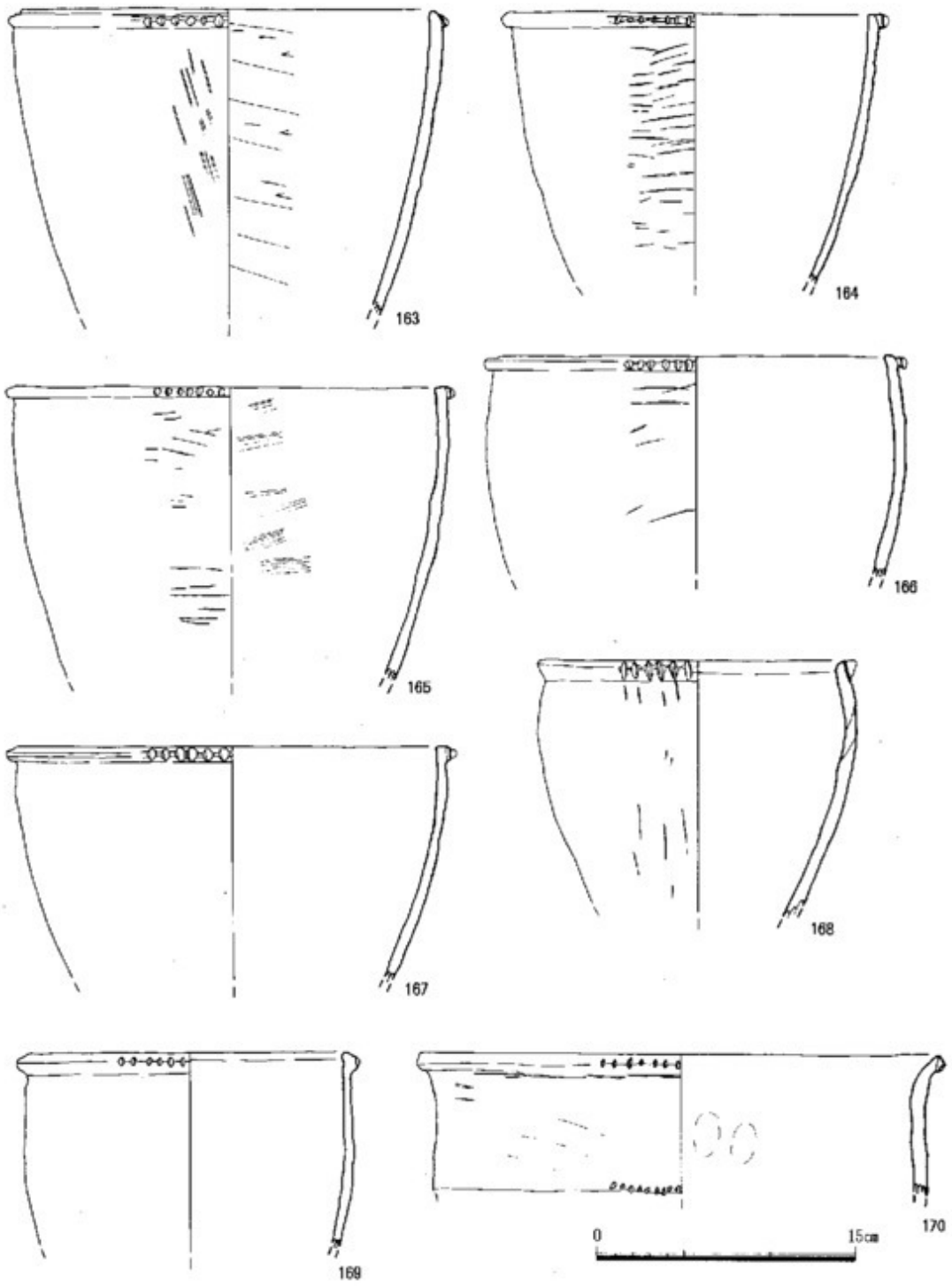


Fig.25　ＳＤ15出土遺物３（1/4）

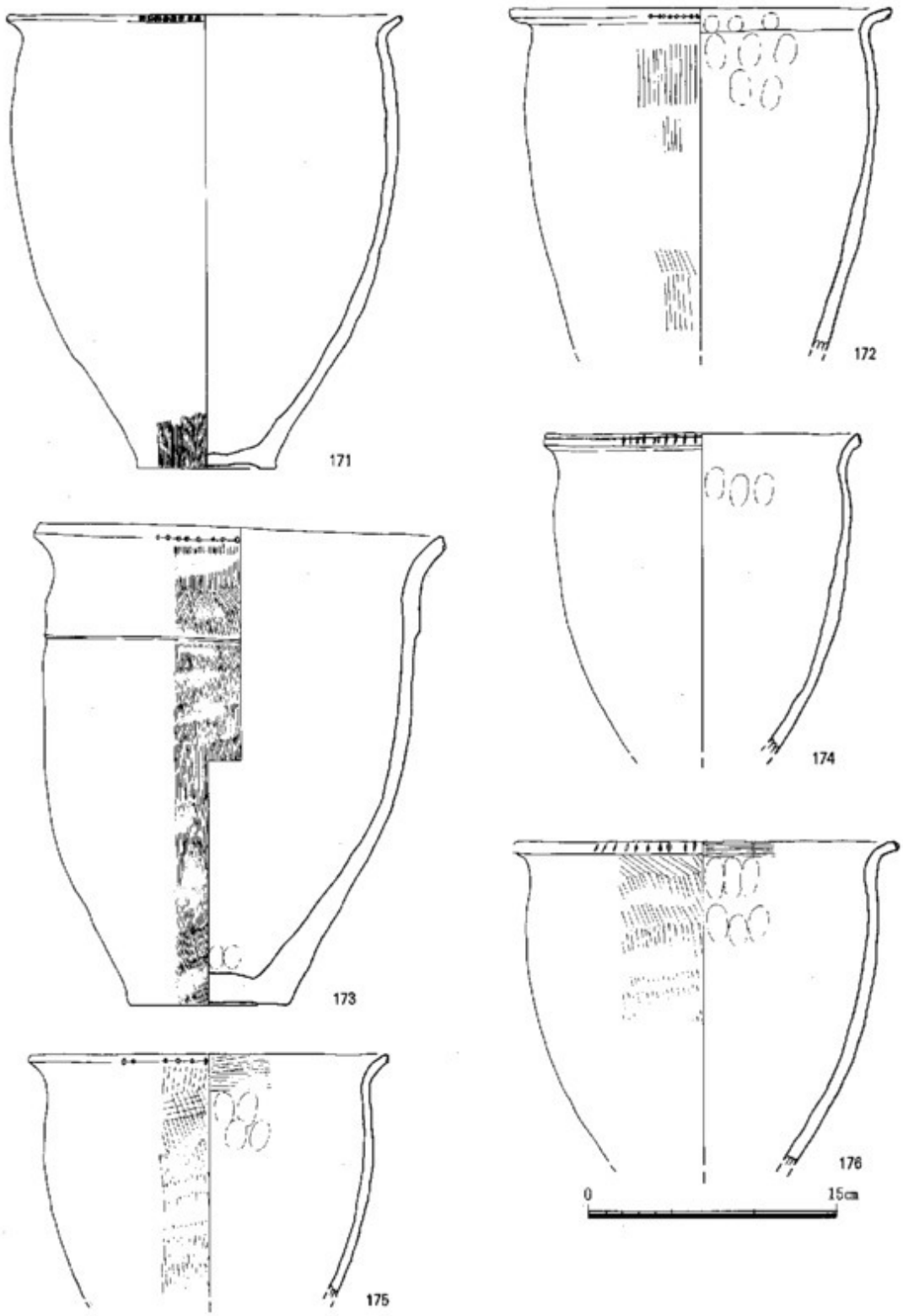


Fig.26　ＳＤ15出土遺物４（1/４）

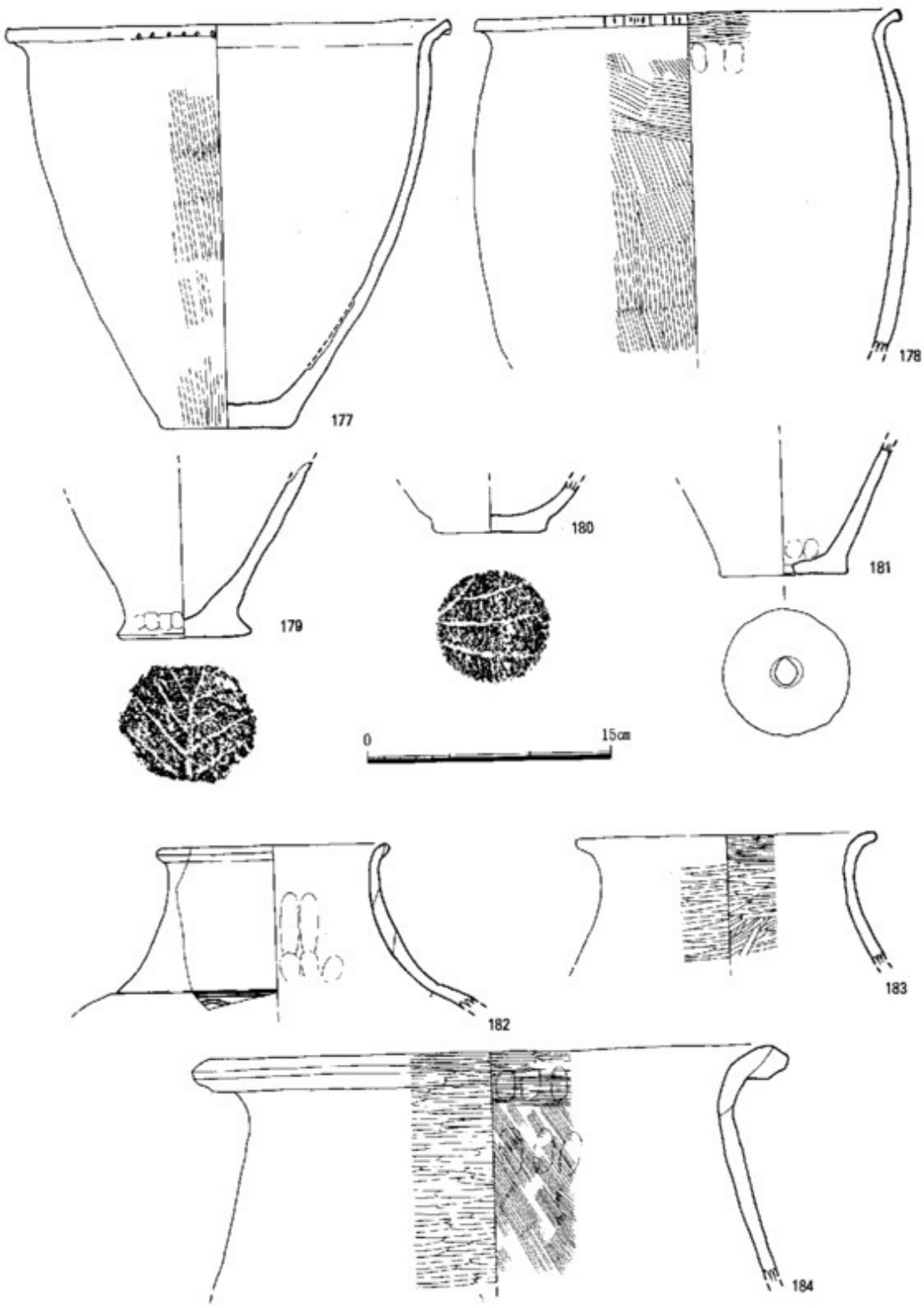


Fig.27　ＳＤ15出土遺物５（1/4）

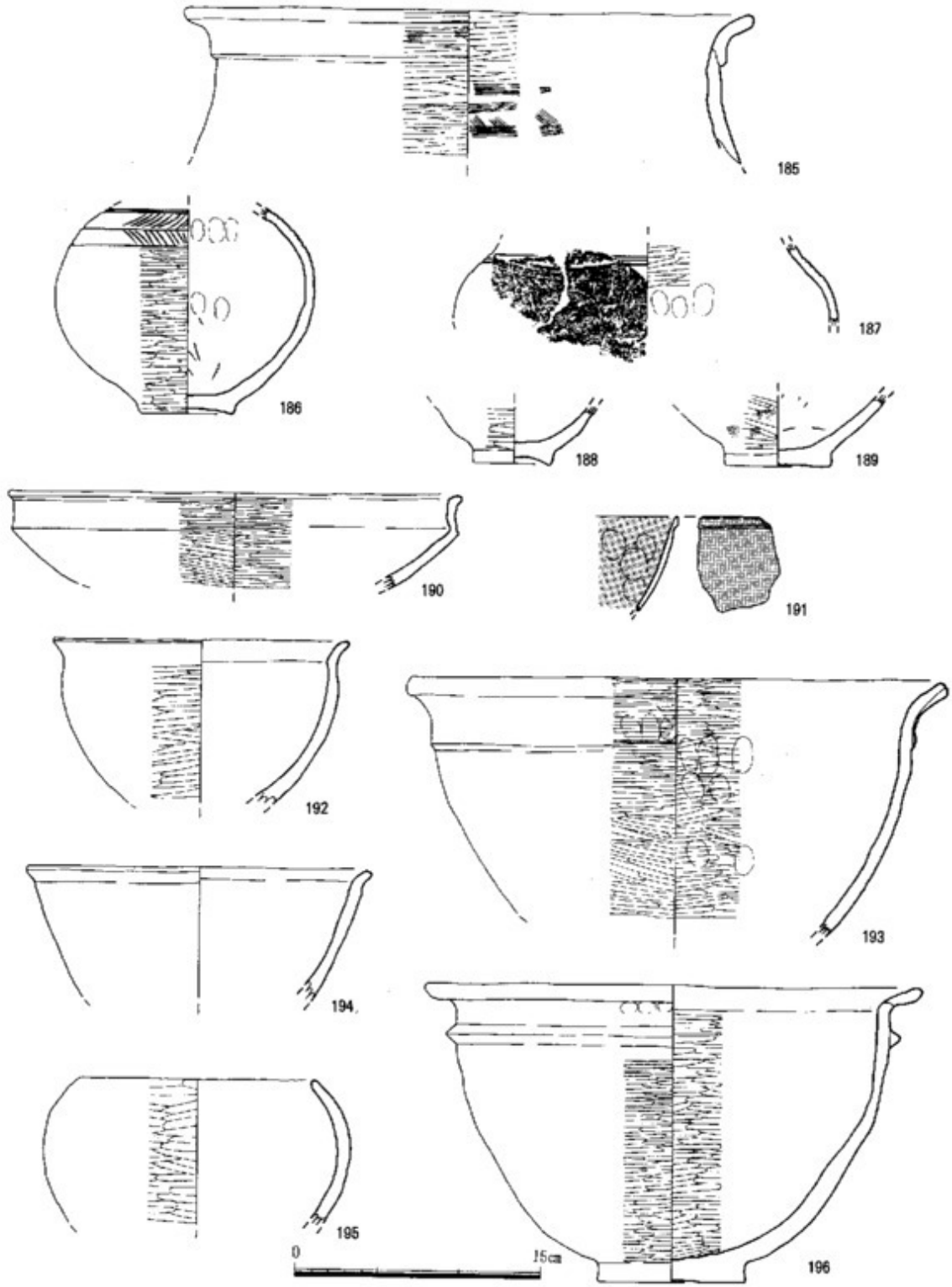


Fig.28　ＳＤ15出土遺物６（1/４）

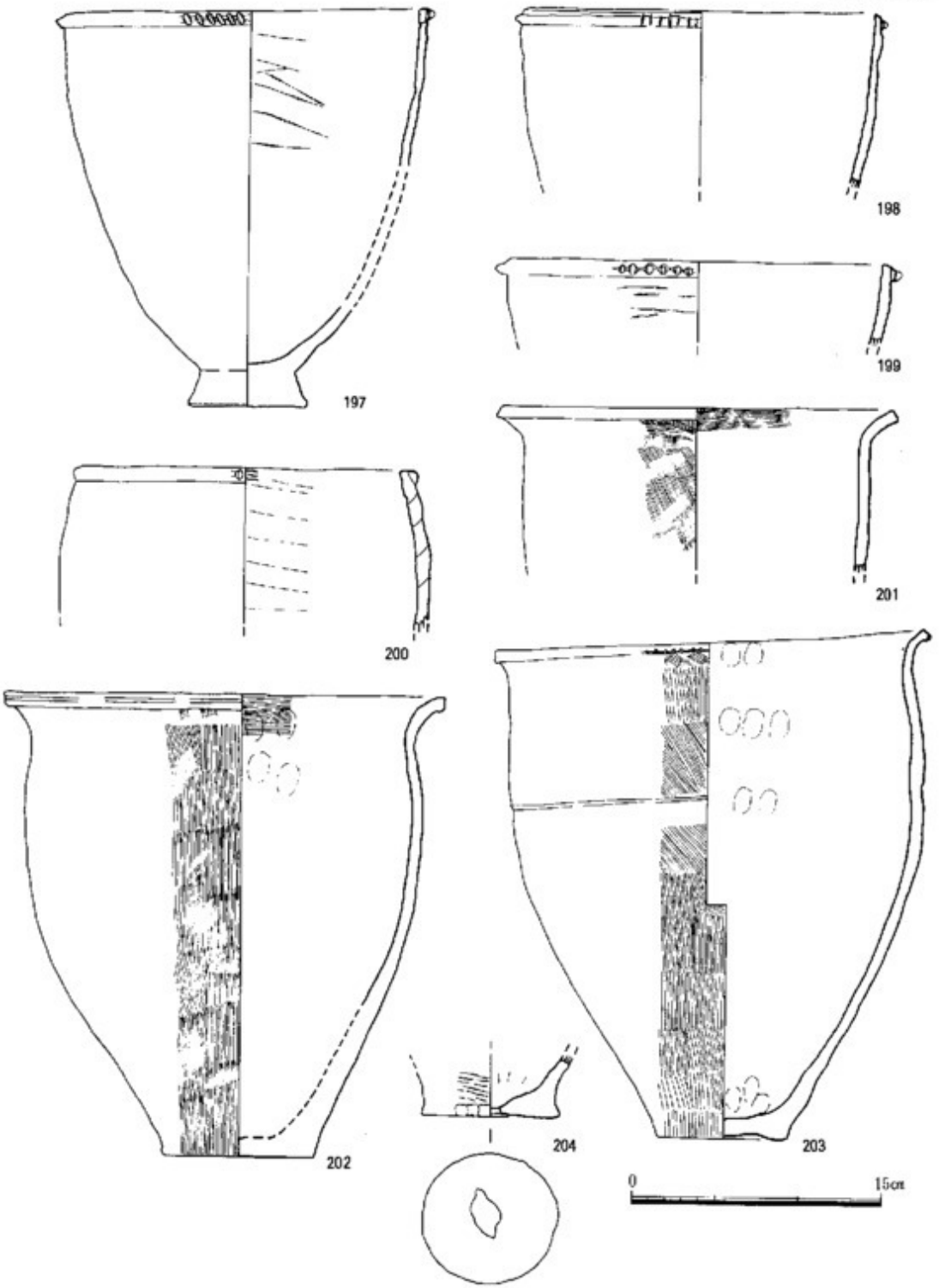


Fig.29　ＳＤ15出土遺物７（1/4）

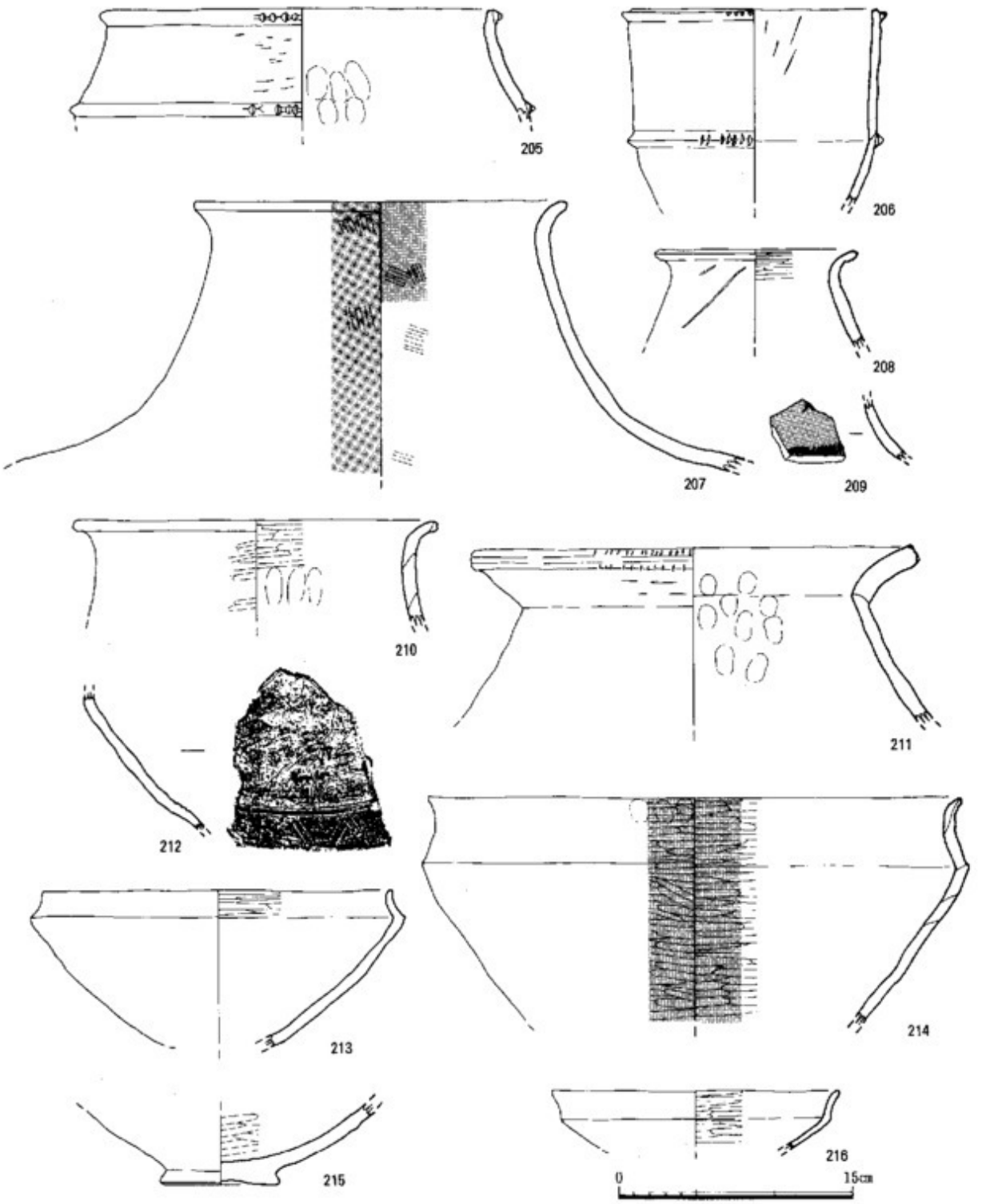


Fig.30　ＳＤ15出土遺物８（1/４）

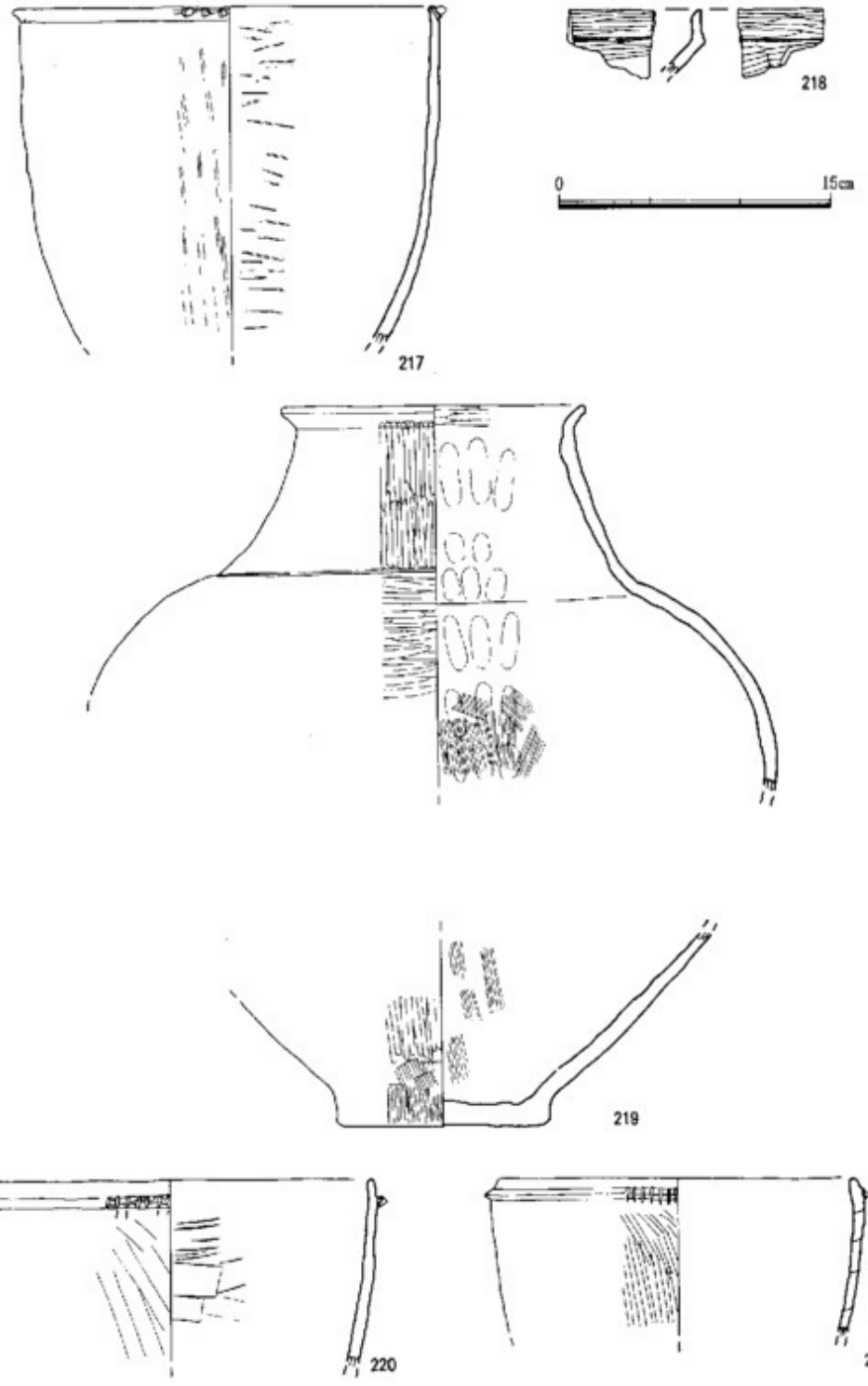


Fig.31　ＳＤ15出土遺物９（1/４）

180も底部に木葉圧痕が残る。181は甕の底部片で、中央に焼成後穿孔の円孔がある。内面に煤が付着する。182～187は壺である。182は頸部と胴部の境に段と2条の沈線、重弧文が入る。183は夜臼から板付Ⅰ式のもの。口縁部の外反は182より強い。184は板付Ⅱ式期の復元口径36.6cmを測る大型壺。口縁部は張付け肥厚する。185も大型品で、口縁部と頸部の境に段が付く。186は丸味の強い壺の胴底部片。胴部上半にヘラによる有軸羽状文を施す。黒斑あり。187は胴部片で頸部と肩部の境に段、肩部に2条の沈線と重弧文を施す。188・189は壺と思われる底部片。188はやや上げ底。190は夜臼式土器の鉢。黒色研磨で復元口径27.4cmを測る。192も精製の鉢口縁部小片。内外面丹塗り。192～196は板付Ⅰ～Ⅱ式の鉢。口径は14.8～32.0cmで中型から大型品。口縁部が軽く外反するもの192・194、口縁部が肥厚し段を有すもの194、口縁直下に三角突帯が付くもの197、口縁部が内湾するもの196、に分ける事が出来る。外面調整は194以外はヘラ研磨。

197～216は下層（第3層）出土。197～200は夜臼式土器の甕。197は胴部・口縁部を一部欠失するがほぼ復元完形。口径22.4cm、器高23.5cmを測る。外面には煤が付着する。198・199は口縁

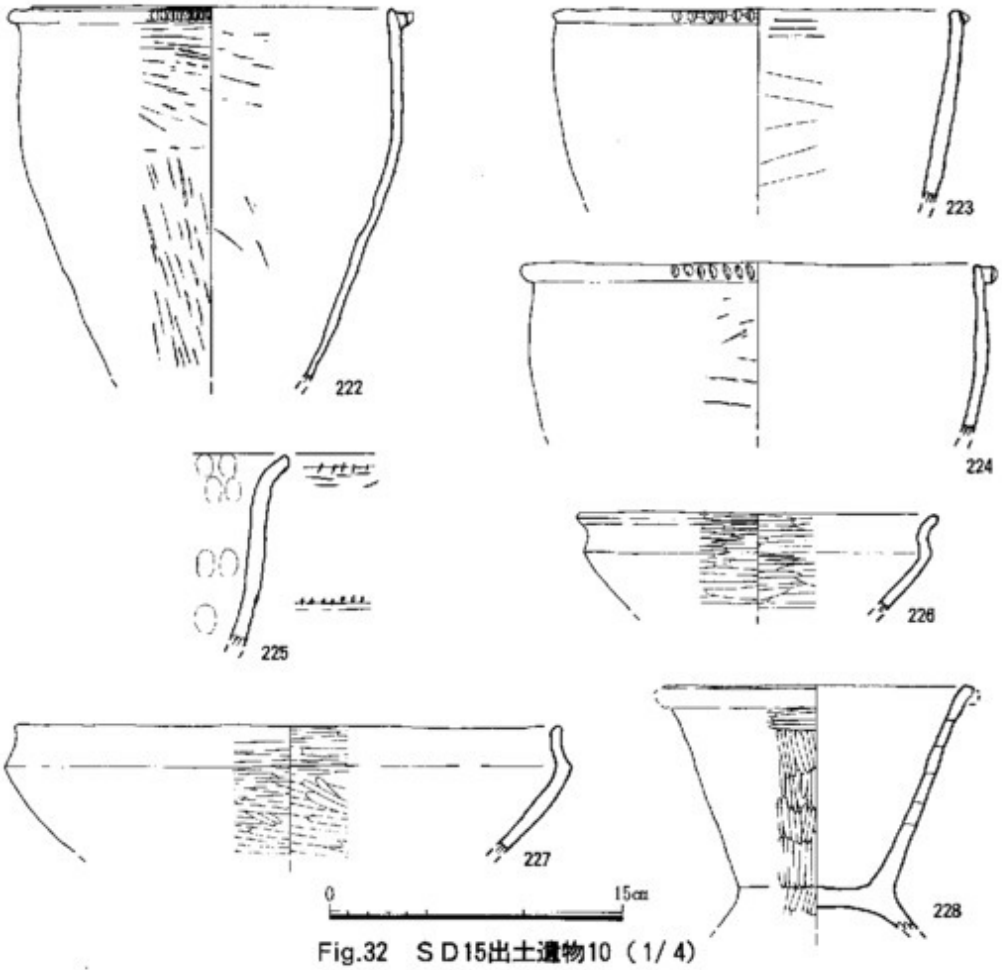


Fig.32　ＳＤ15出土遺物10（1/4）

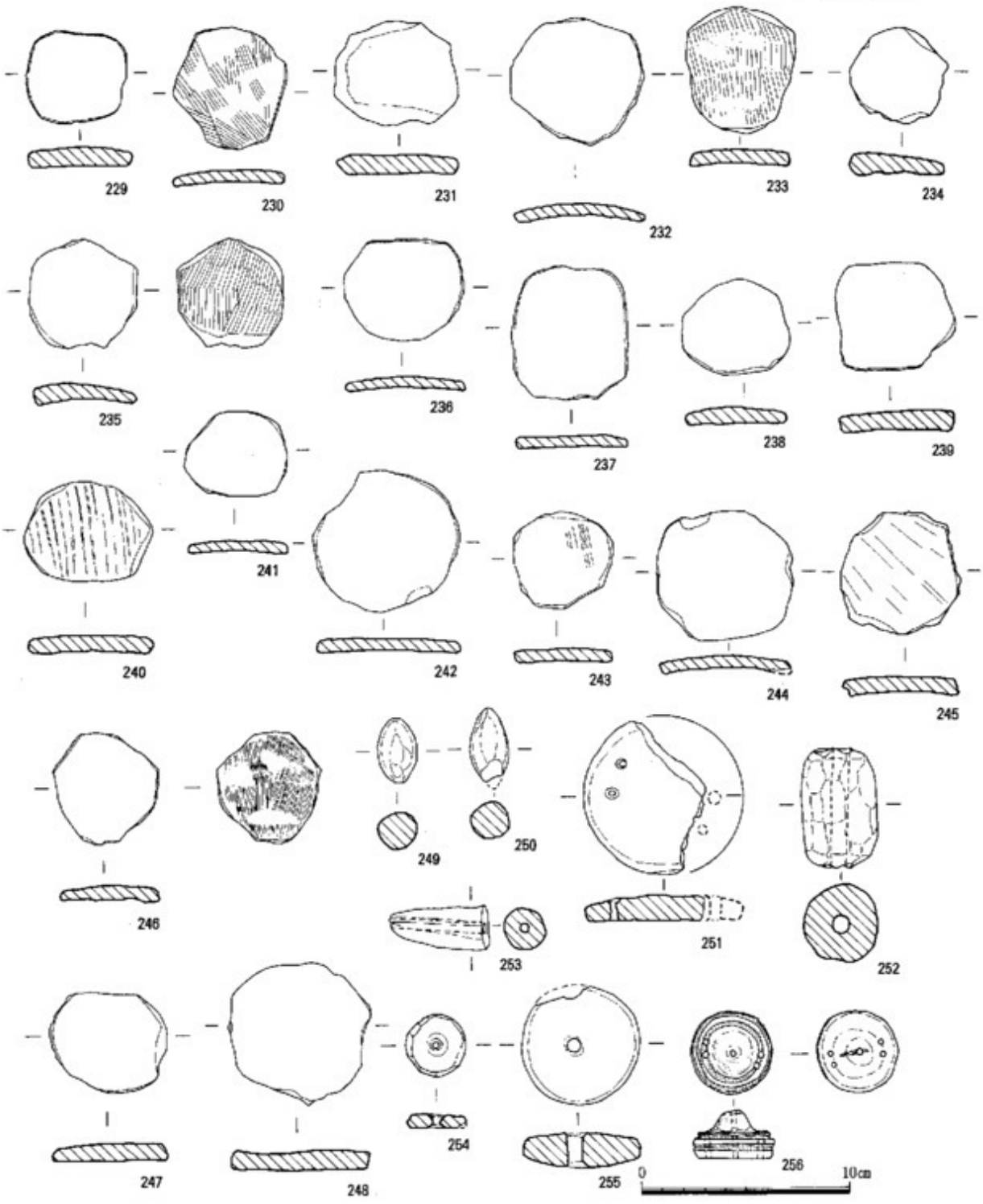


Fig.33　ＳＤ15出土遺物11（1/3）

部よりやや下に刻目突帯が付く、外面は煤が付着する。201は胴部がやや丸味を持つ。201～203は板付Ⅰ式・Ⅱ式の甕。202は復元口径26cm、器高27.6cmを測り、外面は刷毛目で煤が付く。203は口径25.7cm、器高30cmを測る。板付Ⅱ式で口唇部に刻目を持つ。204は底部で、中央に焼成後の外底からによる穿孔がある。内底は煤が厚く付着する。205は口縁部と屈曲部に刻目突帯が付く器形。外面横方向の条痕。206は口縁部と胴部に刻目突帯が付く。内面煤が付着し黒色、下層と接合した。207～212は壺。207は夜臼式土器の大型壺。外面ヘラ研磨、内面刷毛、丹塗りである。208は中型壺で、頸部にヘラによる刻線があり、彩文があったのか赤色顔料が残る。209は彩文壺の小片。黒色の地である。210は丹塗研磨の壺口縁部片。211はⅠ式からⅡ式前半の大型壺、口径は28cmを測る。口縁部はやや肥厚し、口唇部上下に刻目が付く。212は胴頸部片で、肩部に複線山形文が入る。213～216は口縁部がく字状に屈折する鉢。213は高杯の可能性もある。外面黒色研磨、上半は器表が剥落する。下層の出土。215は大型品で復元口径33.8cmを測る。内外丹塗り研磨。215は鉢か壺の底部片。内面に煤が付着。216はく字状に開き気味に屈折する。214～217迄は夜臼式土器。

217～219は底層（第4層）出土。217は夜臼式土器の甕、外面縦方向・内面横方向の条痕。全面煤が付着し、特に外面がひどい。218は黒色研磨の鉢の小片。219は夜臼式土器の大型の丹塗壺。口径16.7cmで胴部最大径は肩部近くにある。外面丹塗りでヘラ研磨。胴肩部内外に列点状のへこみがあり、刷毛目が残る。

220～229は底層下半（第5層）出土。220～225は甕。220～224は夜臼式土器の甕。口径は19.8～24.8cmを測り、突帯は口縁部よりやや下に付くもの220・221、口縁部に付くもの222～224がある。いずれも刻目は深く、外面は煤が付着する。225は板付Ⅰ式の甕。外反する口縁部と胴部に刻目が付く。226・227は黒色研磨の鉢口縁部片。207は内面煤が残る。228は脚部が欠失の深鉢形土器。口縁部には突帯が付き、ヘラ研磨。

229～248は土器片利用の円盤。229～235は上層、236～242は中層、243～248は下層出土。周縁は大半のものは全周を擦るが、部分的に擦る。重さは最

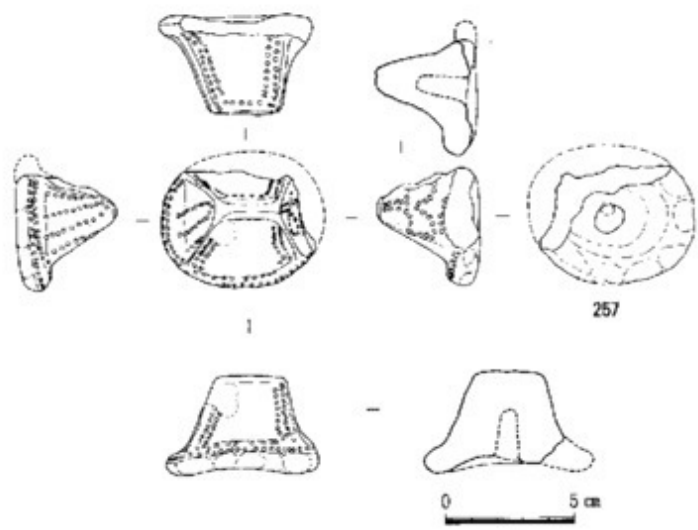


Fig.34　ＳＤ15出土遺物12　（1/3）

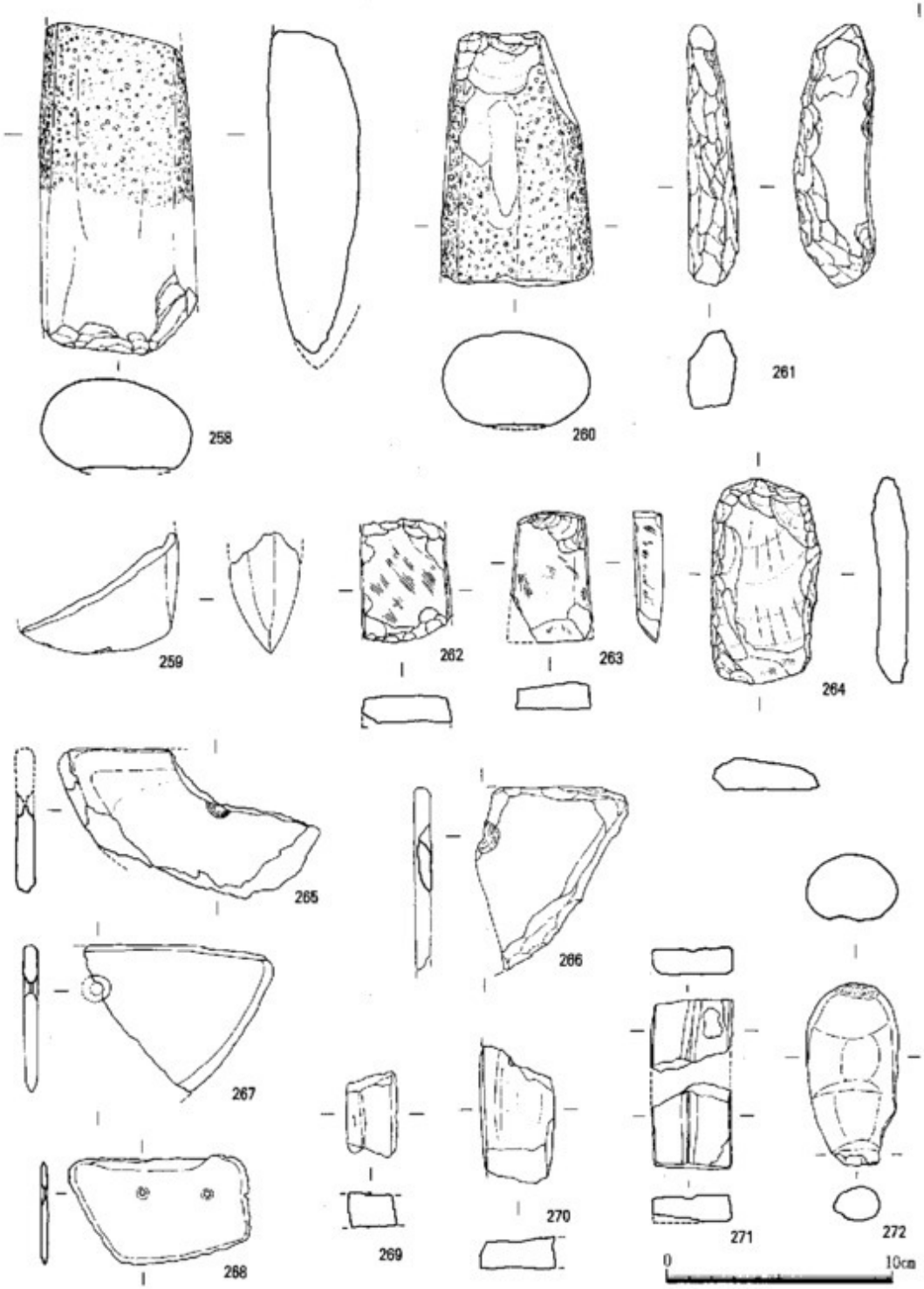


Fig.35　ＳＤ15出土遺物13（1/3）

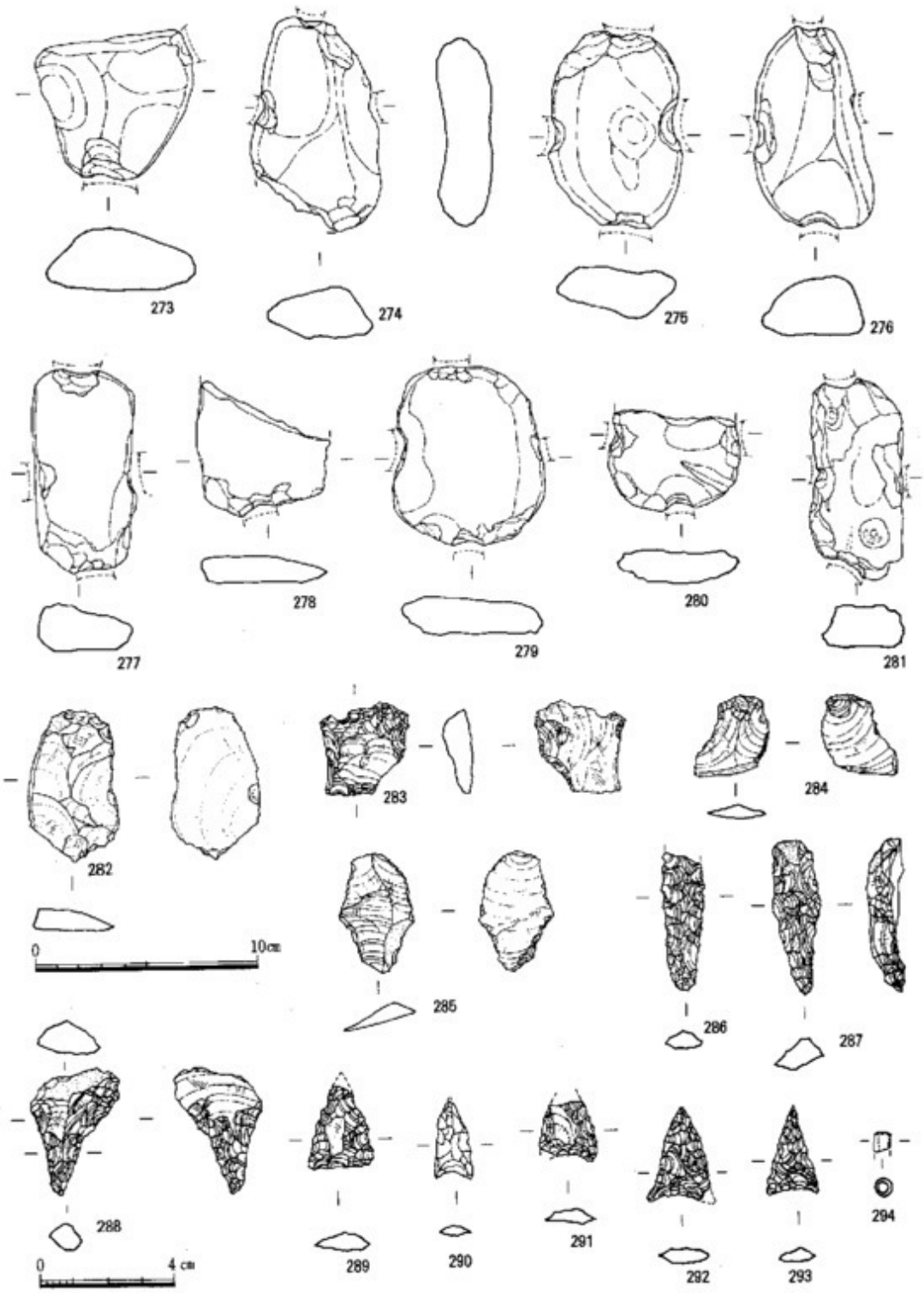


Fig.36　ＳＤ15出土遺物14（1/3・1/2）

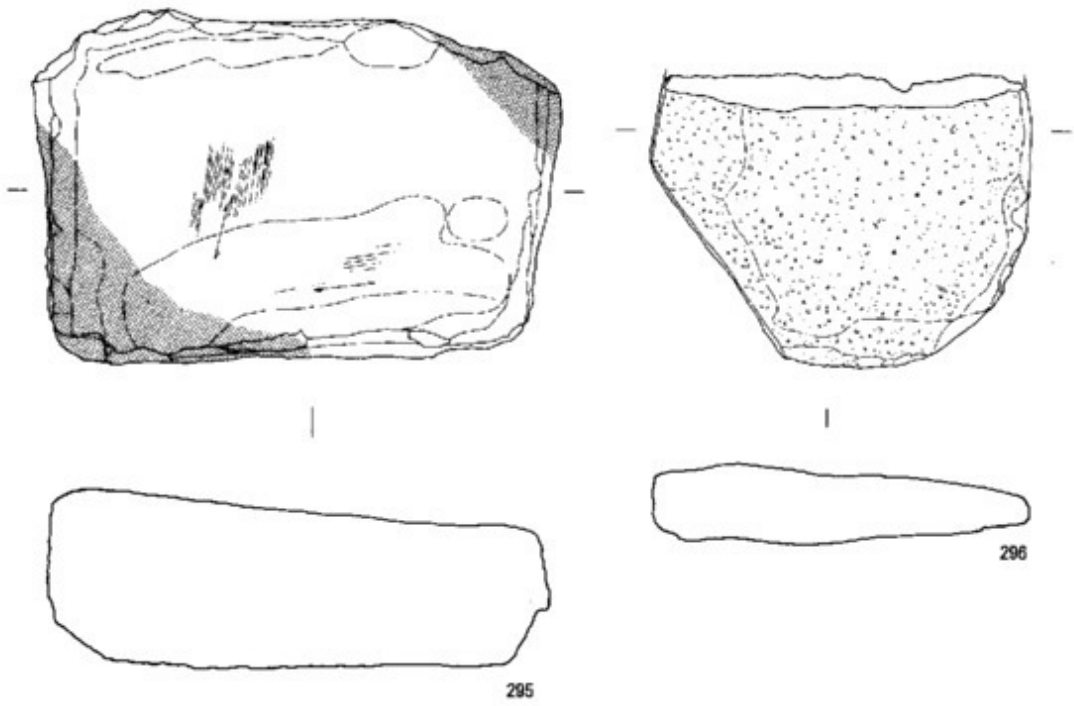


Fig.37　ＳＤ15出土遺物15（1/5）

小4.8×4.1cm、15.4ｇから、最大5.6×6.4cm、49.5ｇまである。249・250は土製投弾。249は全長3.0cm、重さ10.5ｇ、250は一回り大きく、残存長3.6cm、重さ11.2ｇを測る。251は蓋形の土製品、黒色研磨でナデ、２個１組の紐通し孔がある。252は太めの管状土錘。長さ5.7cm、直径3.6cm、重さ17.1ｇを測る。下層出土。253注口土器の注口部で上層出土。254・255は土製紡錘車。254は土器片利用。255は直径5.7cm、最大厚1.6cmを測る中層出土。256は紡錘車形の土製品、直径3.9cm、高さ2.9cmを測る。中央部は山状に突出し、中央と両側に２個ずつ円孔がある。黒色の下地に、沈線部分を中心に赤色顔料が残る。257は家形の土製品。一部欠損するが、残存長6.0cm、残存幅4.6cm、高さ3.9cmを測る。平面形は楕円形を呈すか、側面は台形状で家の屋根形を呈し、裾部はやや反る。底面は中窪みし、中央に直径1.2cm程の孔が深さ２cm程穿たれている。内面には指おさえ痕が残る。各面に竹櫛状工具による刺突文が施される。色調は暗褐色で、粗砂を多く含む。焼成は良く、第２層出土。

258～260は中層出土の太型蛤刃石斧の破損品。いずれも玄武岩製。261は上層出土の抉入柱状片刃石斧の未製品、頁岩製。262・263は扁平片刃石斧の破損品。長さ5.5～5.8cm。石質は頁岩。262は中層。262は中層、263は底層下半出土。264は扁平打製石斧の未製品か。石質は褐色味のある頁岩か。底層下半出土。265～268は石包丁の破損品、石質は硅岩シルト岩か。265は下層か

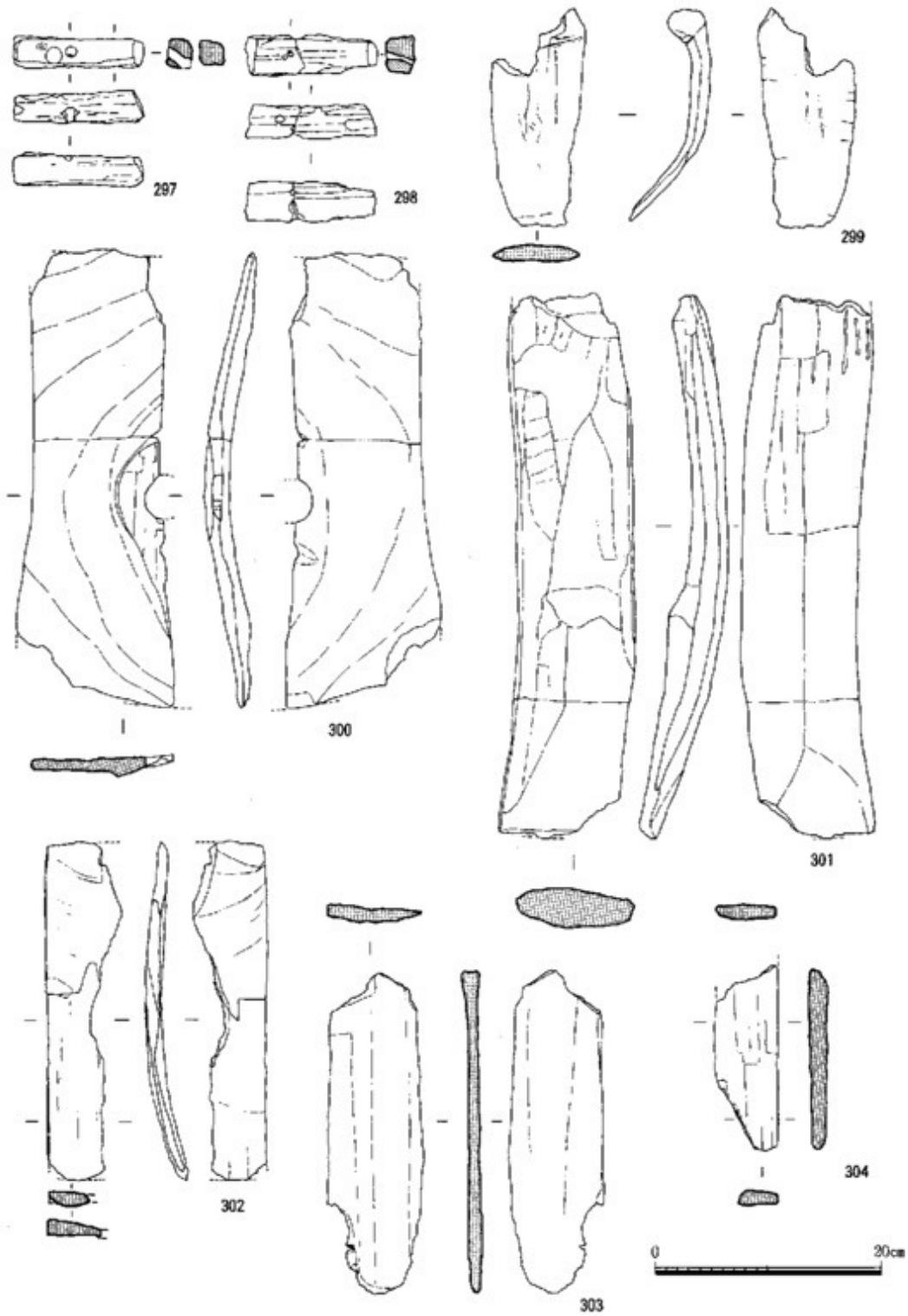


Fig.38　ＳＤ15出土木器１（1/6）

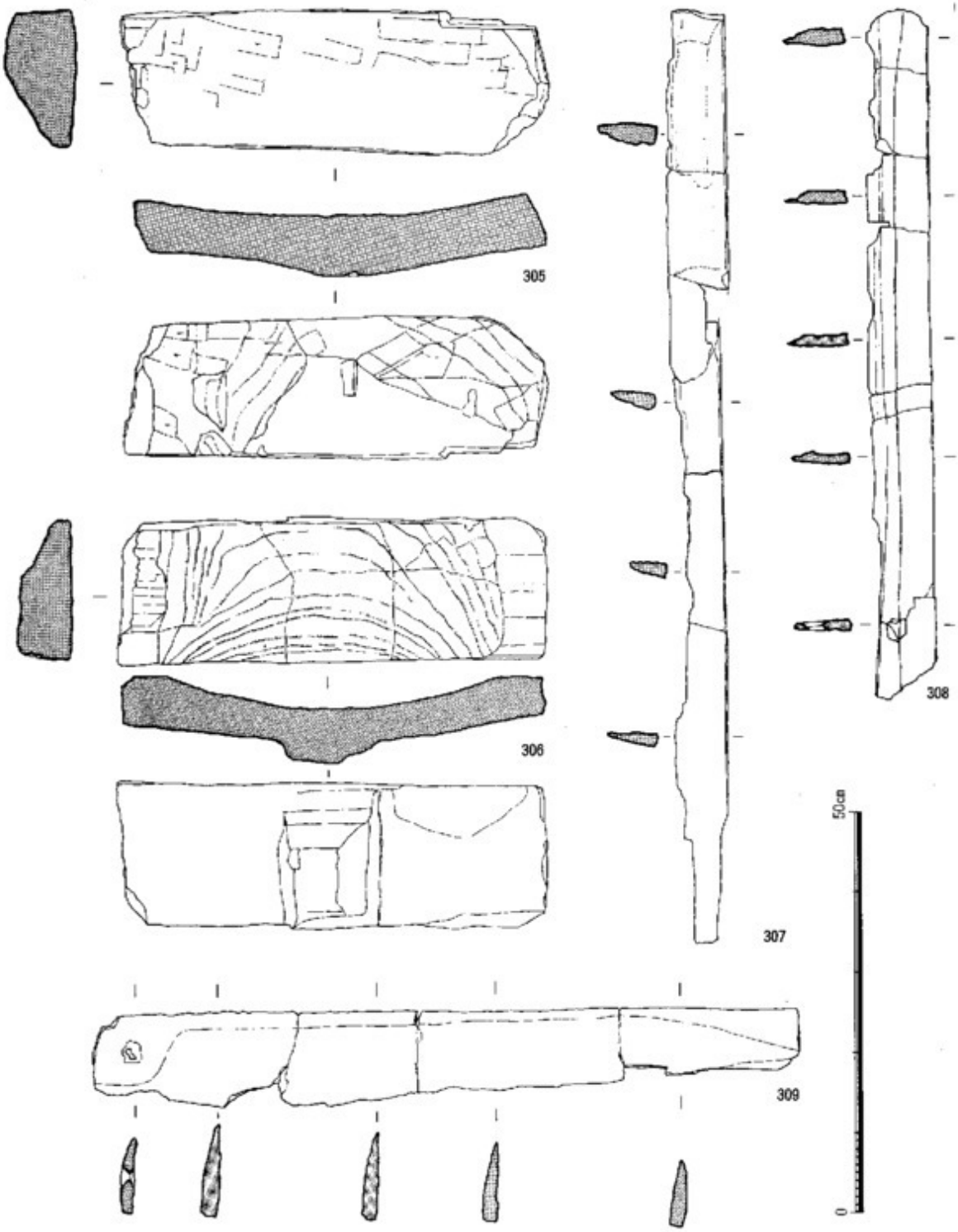


Fig.39　ＳＤ15出土木器２（1/8）

ら底層、266～268は中層出土。268は良く擦り減っている。269～271は砥石片。269は石斧の可能性もある。270は泥岩、271は砂岩製の小型品で、上面中央に使用痕が溝状に残る。２次的火力を受ける。272は花崗岩製の礫錐、下端を錐部として使用。273～281は打欠き石錐。石質は276が変成岩系のほか玄武岩。280は不明。上・中層からの出土が多い。282～285は黒曜石製の使用痕のある剥片。286～288は黒曜石製の錐。上・中層出土。289～293は打製石鏃。290がチャートの外は黒曜石。294は管玉の欠損品。直径0.5㎝で碧玉製。295は砂岩製の砥石又は台石。全長33.8㎝、幅22.7㎝を測る。焼けている。296は玄武岩製の台石。敲打痕が残り、又磨滅している。

297～309は中層から底層出土。297・298は断面方形を呈す加工材。斜めの円孔がある。299は反りのある不明木製品。300は平鍬の破片。301は反りのある鍬の未製品か。302は平鍬か、部分的に焼ける。303・304は加工木材。305・306は鍬の未製品か。削りが残る。307～309は大型の板材。309の左端に方形孔がある。

4．まとめ

調査の成果の若干の整理を行いまとめとする。今回の調査で得られた成果は多い。まず遺跡の時期は弥生時代前期と古墳時代中期の２時期が中心である。前期の遺構は土坑ＳＫ05や06と旧河川ＳＤ01・15などである。ＳＫ06は遺物から見て弥生時代初頭頃か。旧河川ＳＤ01は前期中頃から後半、ＳＤ15は遺物に多量の夜臼式土器片を含むが、層的に夜臼の単純層は分別出来なかった。流水等による撹拌で遺物は混在する。しかし洪水を示すような粗砂礫層が挟まっておらず、静水状態の三ヶ月湖的な状況と思われる。その後徐々に埋没し、上面に弥生時代中期中頃から後期の遺物を含むＳＤ16などが切り込み、その時期には粗方埋没していたのであろう。その後古墳時代中期の５世紀中・後半頃迄浅い窪みとして残り、そこに子持ち勾玉を伴う祭祀が行われたのであろう。周辺の祭祀遺跡として下山門遺跡がある。子持勾玉の出土例は市内では６例目、吉武遺跡第３地点・第５地点各１点[註1]、久保園遺跡１点[註2]、比恵遺跡群１点[註3]、梅林の井の本１点[註3]などがある。調査区では水田遺構か確認出来なかったが、ＳＤ01出土の多量の炭化米の検出から確実に水田経営は周辺で行われていたであろう。最後に予算・時間、また担当者の力量不足から充分に遺物の整理・検討を行えず、遺物も一部しか掲載出来ず、はなはだ不充分なものとなった。詳しい検討については今後の課題としたい。

註１　『吉武遺跡群Ⅳ』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第194集
註２　『久保園遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書　第91集
註３　小田富士雄『九州考古学研究古墳時代編』1979年

拾六町平田遺跡周辺の地質と地形

下山正一（九州大・理）・磯　望（西南学院大・文）

早良平野の地質の概要

図1および2は早良平野の地質図およびほぼ南北方向の地質断面図である。表層分布の多くを須崎層が占めているのが目だっている。低位段丘構成層である大坪砂礫層や完新統の住吉層

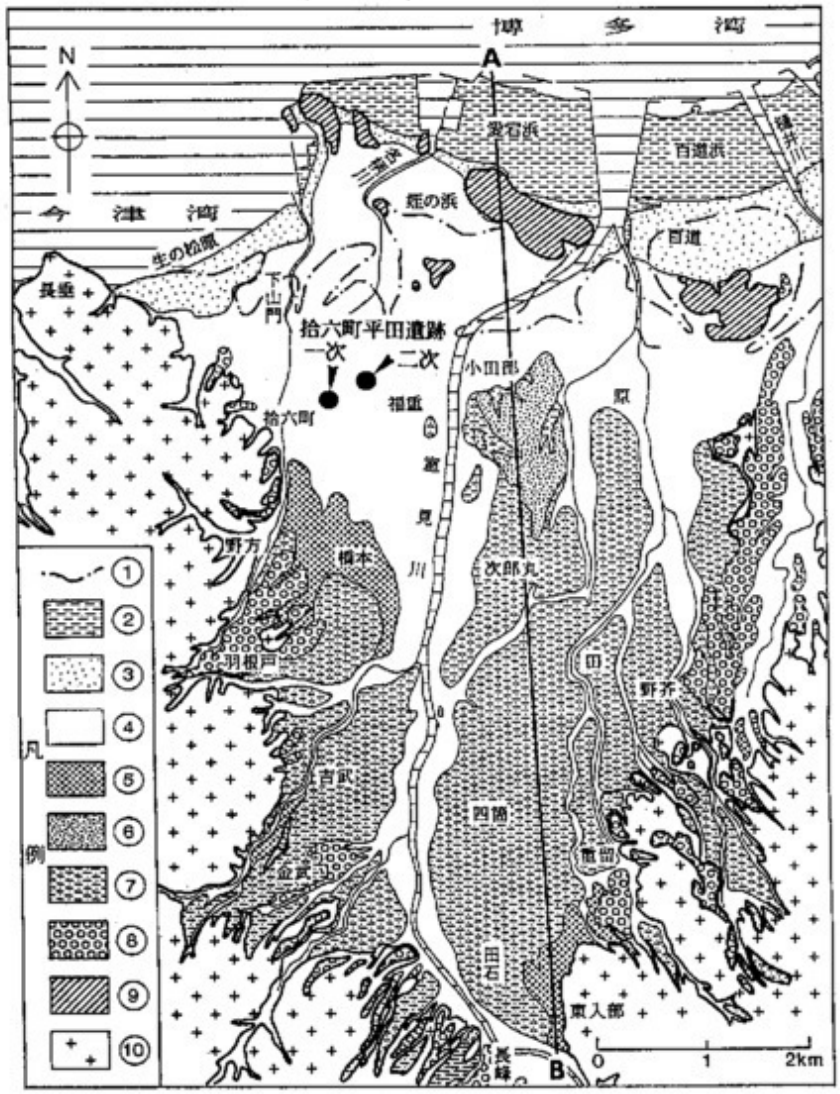


図1　早良平野地質図

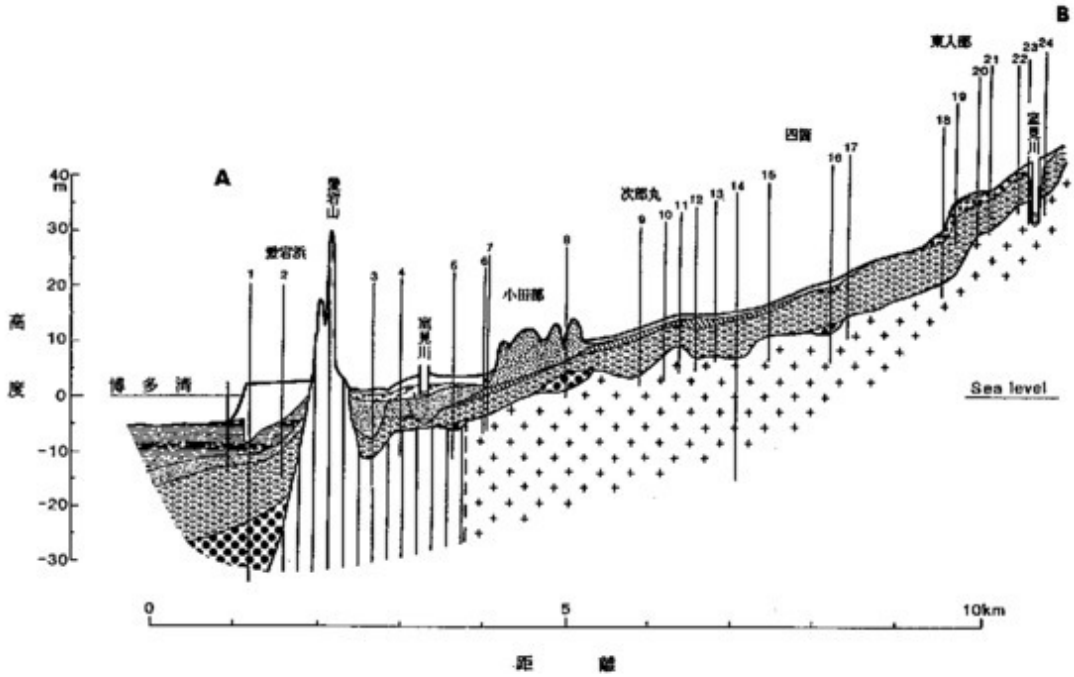


図2　地質断面図（断面線の位置は図1参照）

の分布はごく限定的で、薄い。早良平野の完新統は東北部の百道から原と北部の下山門から福重にかけて分布している。今回の拾六町平田遺跡第一次・二次調査地点は完新統分布域の中心を占めていて、その自然層の形成時期の決定は早良平野の発達史を考える上で重要である。

従来の地質図では早良平野中央の微高地群は、人頭大の比較的新鮮な礫層が卓越することから、沖積地ないし低位段丘堆積物とされてきた。しかし、最近の調査で、ごく薄い完新世河床堆積物と東入部の低位段丘構成層を除くと、これらの微高地表面の大部分には須玖火山灰層基底部分の粘土が残されていて、須玖火山灰層のみが除去された侵食面であることが判明した。また、問題の礫層は中位段丘下位構成層である須崎層でできていることが判明した。小田部に須玖火山灰層の残丘が存在すること、早良平野の台地や丘陵上に中位段丘の堆積面群のみが残存し、低位段丘面がないことなどは、この間接的な証拠と言える。

拾六町平田遺跡周辺の地形

拾六町平田遺跡は、早良平野西部の室見川と十郎川とのあいだの沖積低地に位置し、室見川水系下流部の分流に起源をもつ名柄川流域に位置する。遺跡を含む周辺の土地は、昭和50年代まで水田として利用されていたが現在は周辺地域の宅地化にともない、約1m程の層厚の人工的盛土によって埋め立てられている。この地域で生じた宅地化の進行に伴う人為的地形改変の

行なわれる以前の地形要素を詳細に検討する目的で、1947（昭和22）年３月22日に米軍の撮影した空中写真を判読し、地形分類図を作成した（図３）。

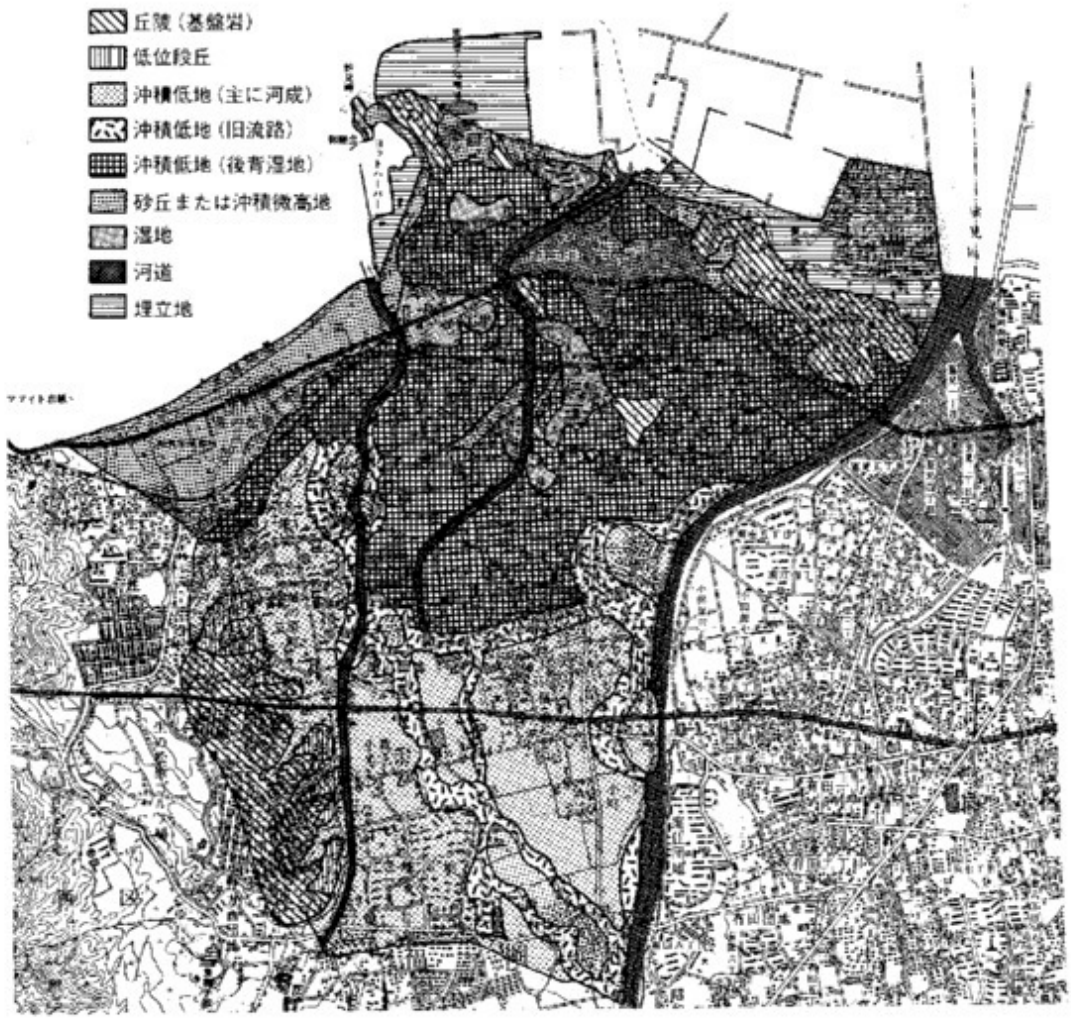


図３　調査地域周辺の地形学図

調査地域の名柄川流域低地とその周辺は次のような地形要素からなる。北部の博多湾沿岸は、愛宕山から小戸にかけて第三系の堆積岩からなる残丘が点在しその間を繋ぐように発達した砂州を核に、海抜5m程度の高さまで薄い風成砂を載せる砂丘が形成されている。これらの砂丘は、箱崎砂層に対比され、縄文海進に関連して成立したものである。姪の浜商店街や生の松原付近では、砂丘上に弥生時代の遺構が分布し、弥生時代以前に砂丘が既に成立していたことが確認されている。

海岸部の砂丘と残丘列の内陸側は、拾六町平田遺跡第二次調査地点付近までひろがる低平な後背湿地をなす。後背湿地の内部は、五島山などの第三系の残丘や、これと関連するものと推定される砂丘状の微高地も分布するが、これらを除くときわめて低湿で、一部は地盤沈下の影響で湛水状態の湿地を形成していた。これらの後背湿地は、博多湾岸に前記の砂丘列が形成された結果生じたもので、沖積世の海進期には河口の干潟を形成して泥層（青色粘土層）を堆積させた。

福重・十郎川旧地付近から橋本にかけての低地は、室見川のデルタ状の分流によって形成された河成低地と低地面を若干刻む旧流路からなる。低地を構成する地層は花崗岩質の円礫（礫径5～20cm）とマトリックス（充填物質）の砂泥質堆積物からなる。この層相は砂をマトリックスとする通常の花崗岩質の河川堆積物とやや異なり、早良平野に特有の、中位段丘構成層の浸食と沖積世の再堆積とを示唆している。旧流路は室見川から北西方向に向かう分流と、後背湿地の干潟の澪に起源をもつ浅谷からなる。

拾六町平田遺跡は、室見川の氾濫にともなって形成された沖積低地と、干潟を構成した砂丘背後の後背湿地の境界付近に位置する。1977（昭和52）年作成の福岡市都市計画図をもとにして、50cm毎に低地の等高線図を作成し調査地点を示してみると、調査地点付近で、北西に向かう室見川の分流の谷地形が不鮮明になり、東西にのびる旧干潟の縁を示唆するような東西性の等高線分布を示し、南北方向に数十センチの段差が見られることがわかる（図4）。第一次調査地点は図4に示された段差のすぐ海側にあり、後述する年代資料などから縄文晩期頃は旧干潟の縁辺に位置していたものと推定される。第二次調査地点は東西にのびる澪起源の浅谷に位置しているが、弥生期までには陸化している。

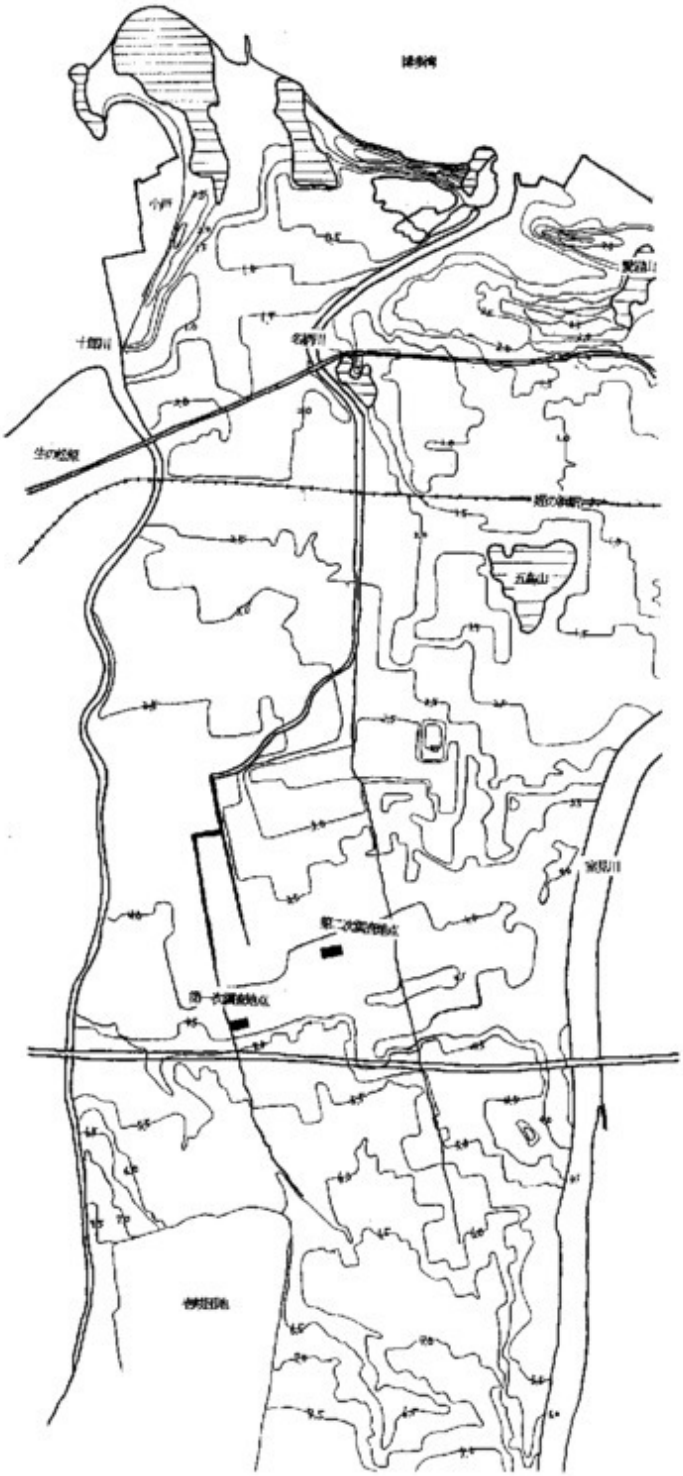


図4　等高線図（数字の単位はm）

拾六町平田遺跡の地山の地質

1．第一次調査地点

第一次調査地点の地表面高度は＋4mである。地表から1mの深さの部分は埋積土ならびに人工攪乱土層である。1.3mの深度に弥生時代後半の水田遺構面が認められた。水田遺構面以下が自然層部分（地山）である。自然層の上限から1m下まで青灰色粘土層からなり、所々に腐植の挟みが認められる。青灰色粘土層の下には細礫・粗粒砂混じり粘土層が発達し、標高＋1.5mの層準に樹木片を多数含んでいた（図5）。この樹木片の放射性炭素年代値が測定され、その

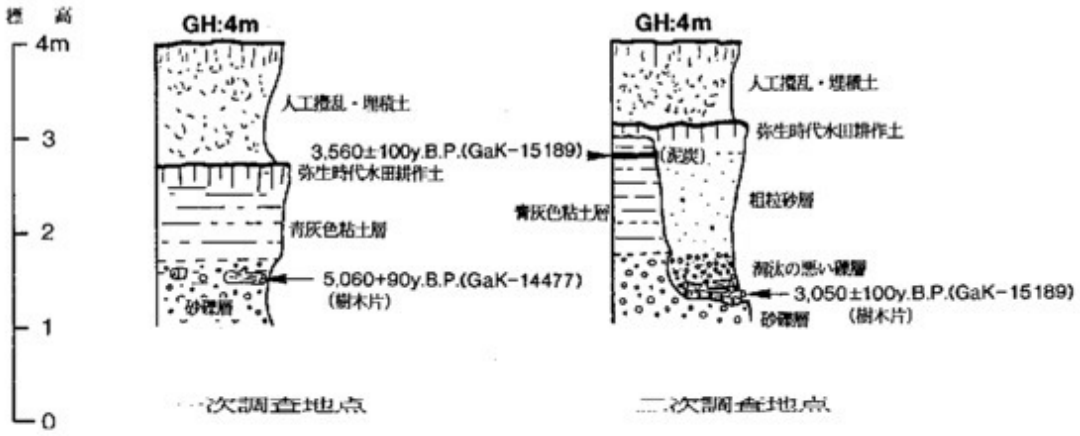


図5　拾六町平田遺跡一次・二次調査地点柱状図

値は5,060 ± 90y.B.P.（3,110 B.C.）（GaK-14477）である。この時期は縄文時代前期に当たり、福岡における完新世の最高海面期直前で、当時の海面は現在より1mほど高い位置にあった（図6）。青灰色粘土層は縄文時代前期・中期の高海面期に対応して、海岸砂丘背後の塩性湿地に堆積したものと考えられる。

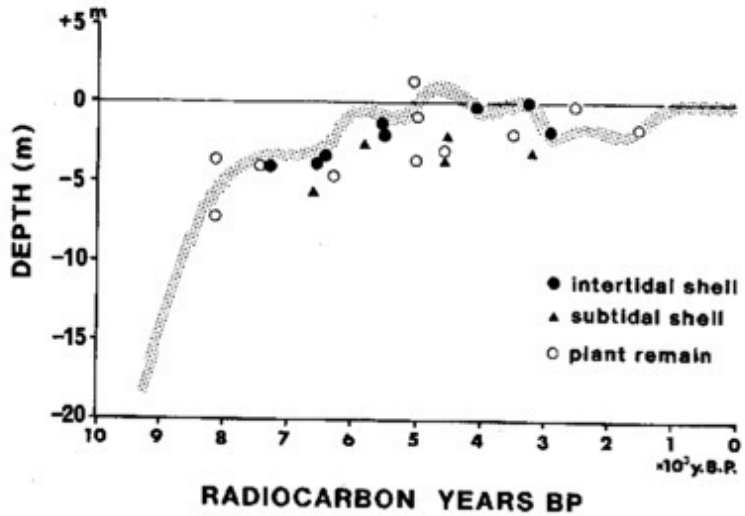


図6　福岡市周辺の過去9千年間の海水準変動曲線

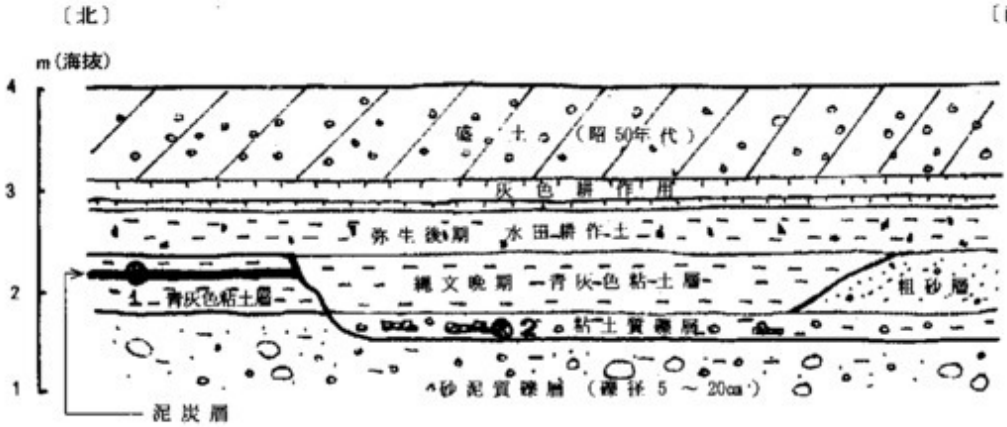
2．第二次調査地点

第二次調査地点の地表面高度は一次の現場と同様に＋４ｍである。地表から0.9ｍの深さに弥生時代後半の水田遺構面がある。その下0.3m（標高+2.7m）には厚さ５cm程の泥炭層が挟まれている。泥炭層の放射性炭素年代値は3,560±100y.B.P.（1,610 B.C.）（GaK-15189）である。泥炭層の下は0.3ｍの厚さの青灰色粘土層からなり、所々に腐植質の挟みが認められる。青灰色粘土層の下には細礫・粗粒砂混じりの粘土層が発達している。弥生時代後半の水田遺構面の下には地山の自然層を切る深さ１ｍの旧河川地形が縄文時代晩期以降の文化層で埋積されている（図５・７）。この旧河川の流向はほぼ東方向で、基底付近の細礫層（標高+1.3m）から樹木片が多数出土した。この樹木片の放射性炭素年代値が測定され、その値は3,050±90y.B.P.（1,100 B.C.）（GaK-15190）である。

測定された年代値から泥炭層と樹木片を含有する砂礫層の状況を考察する。まず、泥炭層の堆積時期は縄文時代後期で、福岡における完新世の高海面期の３つ目の小ピークにあたる（図６）。当時の海面は現在のそれと１ｍほど高い位置にあった。青灰色粘土層は縄文時代前期・中期の高海面期に対応して、海岸砂丘背後の塩性湿地に堆積したものと考えられる。一方、樹木片の年代は約3000年前で、弥生の小海退の最盛期に入りかけている（図６）。この時期の海面高度は現在より１～２ｍ下がったため、河川による海岸低地付近の侵食がやや活発になった。遺跡の地山に切り込んだ、縄文晩期の河川の跡はこれをあらわすものとして注目される。

図７は、第二次調査地点の模式地質断面を示したものである。調査では、曲流しながら西から東に向かう埋没谷が発掘されており、図７は、その断面を示した。この断面と、放射性炭素年代値から、この地域のいわゆる弥生海退の年代を、3,050±100y.B.P.頃と限定することができた。また図の南側にある粗砂層は、縄文晩期の青灰色粘土層と同時異相で、デルタ性堆積物と判断される。

なお、今回の放射性炭素年代測定は下山および磯が学習院大学木越研究室に、測定依頼したものである。



1　Gak-15189
3560±100y.B.P.

2　GaK-15190
3050±100y.B.P.

図7　第二次調査地点模式地質断面図

花粉分析による拾六町平田遺跡の古環境の復元

野井英明（北九州大学）

拾六町平田遺跡から採取した土層試料の花粉分析を行ない、植生と気候の変化を推定した。

試料

分析に用いた試料は、SD15第２号ベルト東壁（13点）とSD01（６点）から、ともに約10㎝間隔で採取した計19点である。（図１、２）。試料を採取した土層は、本遺跡立地以前に同地域を流れていた河川の流路を埋めた堆積物であり、大部分は、粘土あるいは砂質シルトからなる。その年代は、遺物の検討によると、SD01は弥生時代前期後半以降、SD15は縄文時代晩期終末ないしは弥生時代前期初頭以降であると考えられている。（山崎私信）。

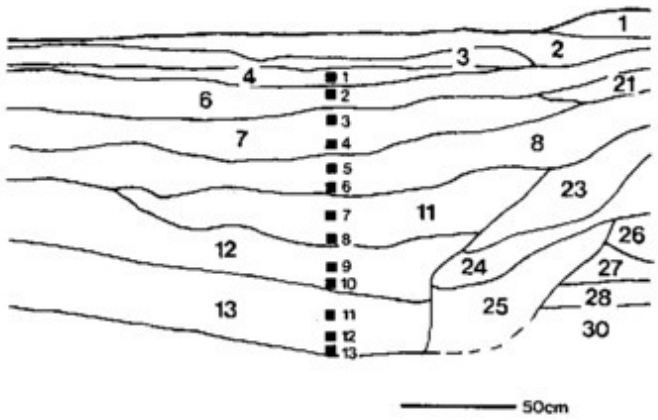


図１　花粉分析試料採取層準（SD15第２号ベルト東壁）.

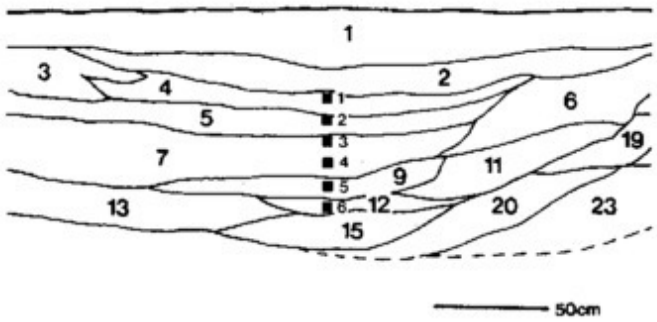


図２　花粉分析試料採取層準（SD01）.

花粉分析結果

花粉分析の結果は、木本花粉を基数とする各分類群の百分率を求め、主要なものをダイアグラムで示した（図3、4）。

花粉組成は、SD15、SD01ともに、全層準を通して、シイノキ属、アカガシ亜属を主とする照葉樹林を構成する常緑広葉樹が卓越する組成を示す。しかし、SD15の試料番号7以上では、ニレ―ケヤキ属、コナラ亜属が、試料番号2以上ではブナ属、カエデ属などの落葉広葉樹が増加する傾向が見られる。SD01では全層準で、ブナ属、カエデ属、エノキ―ムクノキ属などの落葉樹広葉樹が常緑広葉樹とともに出現する。草本類は、イネ科、ヨモギ属を主とするが、種類数、出現頻度ともに概して少なく、SD15の試料番号7以下では、試料番号9を除くときわめて低率である。しかし、SD15では試料番号6以上で増加し、SD01では、SD15の試料番号6以上の部分とほぼ同様の出現傾向を示す。

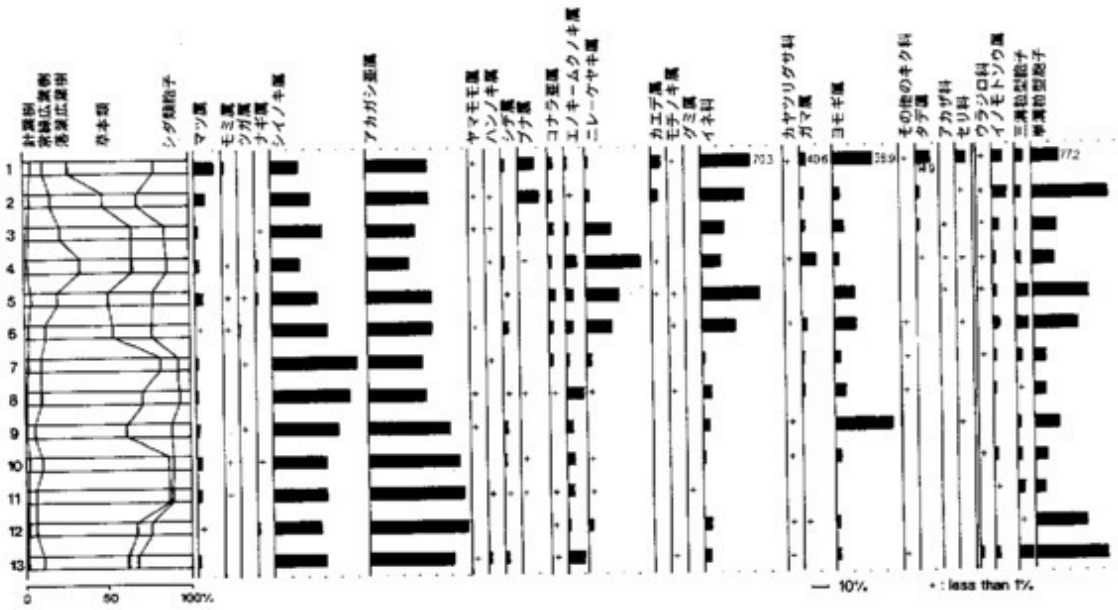


図3　SD15　2号ベルト東壁から採取した試料の花粉ダイアグラム.

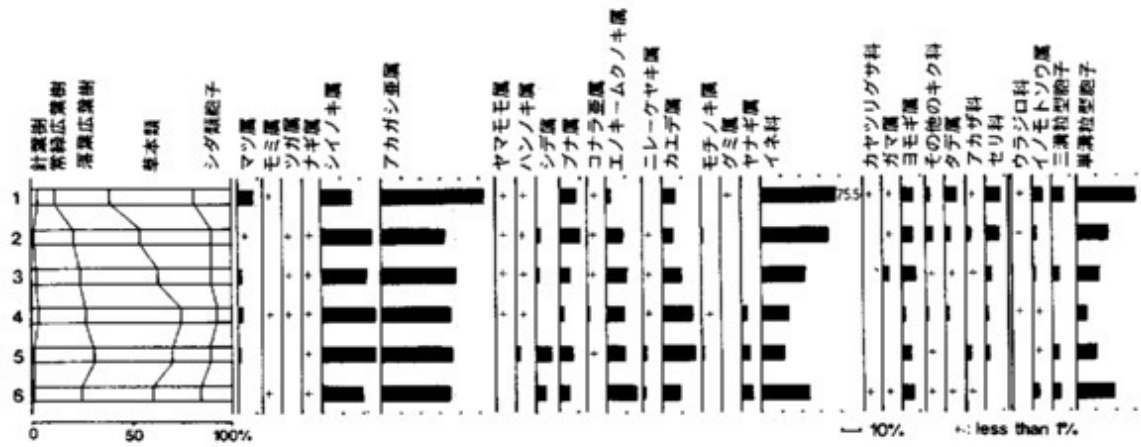


図4　SD01から採取した試料の花粉ダイアグラム.

考察

花粉分析結果から推定される同遺跡の古環境を、SD15の分析結果（図3）に基づいて考察する。

第13層から第11層（SD15試料番号13～7）にかけての時期は、シイノキ属、アカガシ亜属の花粉が卓越することから、同遺跡の周辺はシイ類、カシ類からなる照葉樹林で被われており、試料採取地点の河川跡が浅い水に被われた、わずかな広さの水面として残っていたであろう。草本花粉が低率であることから、この森林は、ほとんど人間の手が着けられない状態であったであろうと考えられる。また、この時代の気候は、現在とほぼ同じである。第8層（SD15試料番号6）の時代になると照葉樹林が優勢であった森林にニレやコナラなどの落葉広葉樹が侵入をはじめる。このことから、気候はやや冷涼化し始めたと考えられる。この時期から、イネ科の草本やヨモギが増え始めるが、これは、気候の冷涼化に伴って海水準が低下し、湿地であったであろうこの地点が少し乾燥し、草本類が生育できるようになったためと考えられる。さらに、第6層（SD15試料番号2～1）になると、ブナ属の花粉が検出されることから、気候はさらに冷涼化し、周辺の山地では、山腹までブナあるいはイヌブナを主体とする冷温帯林に被われたであろう。したがって、当時の気候は、現在よりもやや冷涼であったと考えられる。また、第4層（SD15試料番号1）では、マツ属花粉が増加し、イネ科、ヨモギ属などの草本類花粉も急増する。このことから、この時期に至って、森林を切り開くなどの人間の活動が活発になっ

たことが推定される。これは、気候の冷涼化に伴う海水準の低下によって、同地域が乾燥化し、人間が住む環境として適するようになったこととも無関係ではないであろう。

結論

拾六町遺跡の第13層から第4層にかけての時代の古環境変化は、次のようにまとめられる。

1　植生は、照葉樹林が卓越する植生から、照葉樹林に落葉広葉樹を交える植生に変化する。

2　気候は、現在と同じ気候から、現在よりもやや冷涼な気候への冷涼化が認められる。

3　第4層では、人間活動の活発化によると考えられる植生破壊を反映した植生になる。

福岡市拾六町平田遺跡第２次調査出土の種実について

桃崎祐輔（筑波大学大学院歴史人類学研究科）

１．はじめに

拾六町平田遺跡は十郎川流域の低地、標高４ｍに立地する。第２次調査で検出されたＳＤ01・ＳＤ15はともに旧河川で、ＳＤ15は集落を囲む環濠のような役割を果たしていたらしく、下層に縄文時代晩期終末～弥生時代前期前半（夜臼，板付Ⅰ期）の遺物を含んでおり、弥生時代前期後半（板付Ⅱ期）の遺物を主体とするＳＤ01下層に先立って形成されたと推定される。両者とも河道内堆積物の下層が滞水包含層となっているため有機質遺物の遺存が良く、建築材・木製農耕具片を含む加工材などとともに若干の種実遺体も得られている。以下本論では種実遺体の観察に基づく同定結果を示し、あわせて古植生に関する若干の考察を行なった。

２．種実の内訳

拾六町平田遺跡第２次調査出土種実遺体一覧

遺構	層位	地区	日付	種類	個数	内訳
ＳＤ15旧河川	下層	Ａ３－15		イチイガシ殻斗	1	
		Ｂ２－22	90730	オニグルミ核	1	半欠１
		Ｂ23		ムクロジ果実	1	膠減１
ＳＤ01旧河川	下層	トレンチ北	90613	ヒョウタン果皮	1片	ヘソ部破片
				ツブラジイ果実	31	完形13、破片18
				イチイガシ果実	1	完形１
				イネ種子	塊状	炭化種２塊
				ツバキ科果実	2	破片２
				クスノキ核	2＋	破片２以上
				ナワシログミ核	1	完形１
				その他微細種子	複数	未同定
		トレンチ南		ツブラジイ果実	48	殻斗付完形２、完形42、破片４
				イチイガシ果実	1	殻斗付完形１
				クサギ？種子	1	破損１
		ベルト北	90929	ツブラジイ果実	29	完形24、破片５
				イチイガシ果実	2	果皮片１、未熟果１
		Ｗ53	90623	ヒョウタン果皮	1	細長形頸部破片。本来全長30cm前後か
				ヒョウタン果皮	10片	１個体分。果実はマヨネーズ容器形。

３．種実の種類と植物利用

出土種実の和名、学名・出土部位を整理すると以下のようになる。

〈ＳＤ15下層〉

クルミ科　オニグルミ　*Juglans mandshurica* Maxim.（核）

ブナ科　イチイガシ　*Quercus gilva Blume.*（殻斗）

ムクロジ科　ムクロジ　*Sapindus mukurossi* Gaertn（種子）

〈SD01下層〉

ウリ科	ヒョウタン	*Lagenaria leucantha* Rusby var.*Gourda* Makino.（果皮）
イネ科	イネ	*Oryza sativa* L.（籾・穂）
ブナ科	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata* (Thunb.) *Schottky.*（果実）
	イチイガシ	*Quercus gilva Blume.*（果実）
グミ科	ナワシログミ	*Elaeagnus pungens* (Thunb.)（核）
クスノキ科	クスノキ	*Cinnamonum Comphora Sieb.*（核）
クマツヅラ科	クサギ	*Clerodendron trichotomum* (Thunb.)（種子）

このほか同定できなかった種実が数点あった。

これらは他の遺物とともに通常の発掘の過程で取り上げられた資料であるが、遺跡周辺の自然環境や栽培植物の片鱗をうかがわせ、植生を推定する資料となる。

SD15下層から回収された種実はわずか3種3個体である。オニグルミ核は半截されており中味を食べるために割った残骸であろう。ムクロジ種子は黒滑で硬く、羽根つきの羽根に使われる。やや深く貫入する臍点が特徴的であり、この部分に羽根を差して用いる。自然植生では比較的珍しい植物であるが、各地の遺跡からはしばしば種子・木材が出土する。

SD01下層からは7種以上の種実が得られている。栽培植物ではイネ、ヒョウタンがあった。イネはすべて短粒のジャポニカ種で、稲穂がそのまま炭化して検出されている。水田の落穂が埋没したものであろうか。ヒョウタンは数個体分に相当する各部位の破片が出土しており、加工痕はないが種子が伴っていないようなので容器残骸の可能性が考えられる。緩く張った胴部が徐々にすぼまり頸部が細くなるマヨネーズ容器形のものと全長30cmに及ぶと推定される細長形がみられ、球形やフラスコ形のものとは異なっている。ヒョウタンは縄文時代早期にはすでに存在が認められるが、縄文時代晩期終末～弥生時代前期にかけてメロン類など他のウリ類とともに新品種が導入されたらしく、生業の変化利用頻度も高まったと推定される。

野生植物のうち、食用になるものはツブラジイ・イチイガシ・ナワシログミである。堅果の大半を占めるツブラジイはアク抜きが不要で生食したり、煎って食用にすることができるが、資料に人為的な皮剥ぎの痕などは認められず、流路周辺に生えていた樹木から落果し、そのまま埋没したものであろう。ナワシログミは初夏に液果が赤く熟し、甘味があり食用となる。拾六町平田遺跡の弥生人たちも、これらの植物を積極的に利用したものであろう。

4．早良平野内の種実遺体出土遺跡との比較

以上の同定結果を踏まえ、早良平野内の遺跡で過去に種実の報告が行なわれた四箇・湯納・鶴町遺跡と拾六町平田遺跡出土の種実の様相を比較してその位置付けを試みることとしたい。

四箇遺跡（早良区四箇）は標高20m強の扇状地上の遺跡で、弥生時代中期頃のJ－10地区の水

路よりイチイガシ(310)、シリブカガシ(1)、クヌギ(3)、ブナ(4)、アカメガシワ(7)、クスノキ(102)、モモ(2)、ノブドウ(6)、ツバキ(12)、イヌガヤ(2)、クロマツ(2)、カヤ(1)、ヤマモモ(2)、ヤマビワ(1)、ムクロジ(3)、エゴノキ(134)、マルミノヤマゴボウ(1)、クサギ(2)、カナムグラ(4)ハトムギ？(ジュズダマ？12)、ヤブニッケイなどが検出されている。

湯納遺跡（西区大字拾六町字東）は標高５～10m強の低台地裾にひろがる集落遺跡で、調査区東縁の溝群より弥生時代後期後半の遺物とともに植物遺体が検出されている。

１号溝からはモモ。２号溝からはモモ、スモモ、ツブラジイ、イチイガシ、クスノキ、アカメガシワ、ヤマビワ、イヌガヤ、ジュズダマ、カラスウリ、タデ、エゴノキ。５号溝からはモモ、スモモ、ヤマモモ、ヒョウタン、ジュズダマ、ノブドウ、ツブラジイ、イチイガシ、アシ、クスノキ、イヌガヤ、クロマツ、ムクノキ、エゴノキ、クサギ、センダン、アカメガシワ、カナムグラ、マクワウリ、キカラスウリ、ウキヤガラ地下茎。２号井戸、Ｉ－ＺＯ35ピットからはモモ、アラカシが検山されている。これらのほか古墳時代前期初頭の井堰・包含層よりモモ、イチイガシ、クスノキ、エゴノキ種子が出土している。

鶴町遺跡（早良区大字免）は標高10m程度の低地に立地し、板付Ⅱ期の第１号溝からオニグルミが出土しているほか、古墳時代前期初頭の第２号溝からはイチイガシ、スダジイ、アカメガシワ、ツブラジイ、クヌギ、クロキ、カヤ、エゴノキ、ノブドウ、イヌガヤ、ヤマモモ、エビヅル、ホウノキ、ゴンズイ、ヤマビワ、ツバキ、クサギ、センダン、クスノキ、オニグルミ、ツタ、クリ、スモモ、モモ、フジ、ミクリ、タデ、カナムグラ、エノキが検山されている。

これらの遺跡のうち、鶴町遺跡第１号溝が拾六町平田遺跡ＳＤ01とほぼ同時期でオニグルミが出土しているのを除くと他はすべてより新しい時期のもので、時期が下るに従って栽培植物や水田雑草が充実することが窺える。また樹木の種実は基本的にツブラジイ、イチイガシ、クスノキ、ツバキなどの組み合わせで典型的な照葉樹林の植物相を示しており、拾六町平田遺跡ＳＤ01下層（弥生時代前期後半）の様相と相通じている。よって早良平野は弥生時代前期から古墳時代初頭にいたるまで基本的には照葉樹林の植物相で一貫していると考えられるが、立地や年代によって若干の変動があるようである。

野井英明（1991）氏は福岡市東区比恵遺跡の24・25次調査で花粉分析を行ない、弥生時代前期はシイ・アカガシ属の照葉樹を主体にエノキ－ムクノキ属・マツ属を多く交えているのに対し、弥生時代中期にはアカガシ属がシイ属を凌駕し、エノキ－ムクノキ属は減少すると述べている。そしてエノキ－ムクノキ属はシイ属（下部帯）からカシ帯・ツガ帯（上部帯）への遷移に際して一時的に出現することから弥生時代前期から中期にかけて最寒月の平均気温にして約１℃気候の冷涼化があったと推定している。

拾六町平田遺跡の２次調査では組織的に種実が検出されたわけではなく、量的な信頼性は低いが、シイ属のツブラジイがアカガシ属のイチイガシより多いことは注目される。弥生時代中

期の四箇遺跡でアカガシ属のイチイガシが優勢であるのとは対照的であり、野井氏が指摘した冷涼化を反映している可能性は残される。とくに拾六町平田遺跡の種実はシイ属の比率が高く、暖地の植物であるナワシログミを含んでいることもあわせ冷涼化以前の様相を示していると考えられる。ただ早良平野の遺跡で報告された出土種実は多くが非定量的資料であるため、今後定量的な資料による検証が必要である。

早良平野のなかで拾六町平田・湯納遺跡は西寄り、鶴町・四箇遺跡は東寄りに立地しているが、往時には西の室見川・十郎川、東の金屋川およびその支流が平野内を蛇行して氾濫原をなし、そこには低湿性のアシ原や照葉樹林がひろがっていたと考えられる。こうした植生は水田や市街地に蚕食されて大半が失われているが、現在でも島状に神社の叢林が残されており、昼なお暗い照葉樹林は、開墾が本格化する以前に広く平野を覆っていた景観を髣髴とさせている。早良平野全体の自然植生および栽培植物の変遷について、より詳細な復原が望まれる。

本稿の執筆にあたり福岡市教育委員会の山崎龍雄氏に御配慮頂き、観察と報告の機会を頂いた。種実の整理に際しては筑波大学大学院環境科学研究科の伊藤由美子氏、人文学類の森脇賢君の協力を得、西野元先生、西田正規先生に御指導を仰いだ。記して御礼申し上げたい。

参考文献

粉川昭平（1976）「第Ⅴ章　福岡市鶴町遺跡出土の種子について」
『鶴町遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第37集　pp.50－53.
粉川昭平（1977）「第６章　福岡市四箇Ｊ－10区出土の種子について」
『四箇周辺遺跡調査報告書（Ⅰ）』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第42集　pp.83－87.
細川隆永・粉川昭平（1977）　「６　植物遺体について」「湯納遺跡」
『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第５集』　福岡県教育委員会　pp.69－76.
寺沢薫・寺沢知子（1981）　「弥生時代植物質食料の基礎的研究」『橿原考古学研究所紀要』５
太田三喜（1982）『考古学研究中間報告４－出土果実および種子の同定Ⅰ』埋蔵文化財天理教調査団
渡辺誠・粉川昭平（1982）「菜畑遺跡の大型種子」『菜畑遺跡』唐津市教育委員会　pp.467～473.
藤下典之（1984）「江上Ａ遺跡およびＢ遺跡から出土したヒョウタン仲間　*Lagenaria siceraria* STANDL.とメロン仲間　*Cucumis melo* L.の遺体について」　pp.107－112.
『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町木製品（本文）・総括編－』　富山県埋蔵文化財センター
山崎純男（1986）「縄文から弥生へ－縄文時代と稲作農耕の開始」
『早良王墓とその時代』　福岡市歴史資料館図録第11集　pp.32－33.
岩本陽児（1987）「貯蔵穴出土の種子について」
『野多目拾渡遺跡Ⅲ－野多目中央公園付設道路拡幅に伴う発掘調査報告書』
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第160集　pp.18－22
笠原安夫（1987）「第６章　福岡市四箇遺跡の種子分析について」
『福岡市早良区　四箇遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第172集　pp.186－201
野井英明（1991）「比恵遺跡24・25次調査によって得られた試料の花粉分析」
『比恵遺跡群(10)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第255集　pp.229－233.
野井英明（1992）「拾六町平田遺跡第一次調査の花粉分析」
『拾六町平田遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書　第305集　pp.33－36.

拾六町平田遺跡出土木胎漆器の塗膜について

(財) 京都市埋蔵文化財研究所　岡田文男
福岡市埋蔵文化財センター　本田光子
宮内庁正倉院事務所　成瀬正和

拾六町平田遺跡出土木胎漆器の塗膜層および赤色顔料の種類について調査した。

試料

試料は、破断面より2～3mm角の細片を採取した。採取試料をそのままで検鏡した所、朱粒子をいくつか認めたが、大半の粒子は細かすぎて、赤色顔料の種類はわからなかった。採取試料はそのままで蛍光X線分析を行った後、断面観察のため常法によりエポキシ樹脂に封入し、研磨により厚さ数μmの薄片を作成した。

蛍光X線分析

理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、印加電圧；40kV、印加電流；20mA、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管の条件で測定を行った。赤色顔料の主成分元素としては鉄だけが検出されたが、赤色のない部分からも同程度に鉄が検出されているので、この鉄は本体に由来するものと考えられる。

塗膜構造の観察

塗膜断面からは木材組織内部にも漆が浸透していることが観察された。その上に褐色の層が1層あり、厚さは約40μmである。(写真1参照)。この層は肉眼的には黒漆層として見えるものである。この黒漆層の上に赤漆が塗布されている。赤漆塗膜中には、赤く透明感のある粒子が認められ、粒子の大きさは最大のもので10μm、全体としては非常に細かい（写真2参照)。この赤色粒子は、従来の顕微鏡観察とX線分析結果を総合すると朱（硫化水銀HgS）と判断できる。塗膜構造は「生地固め　＋　黒　＋　朱」と推定される。

まとめ

本例は、比恵遺跡25次調査出土の脚付杯と形状および赤彩の状況が酷似するが、それは表面的なものである。比恵25次例は木炭粉を混和した下地が施されていたが、本例にはそれらしきものは認められない。また、塗膜の厚さも薄い。赤色顔料も比恵25次例はベンガラであったが、本例は朱である可能性が高い。本例の塗膜構造は、赤色顔料の種類も含めて、四箇遺跡22次調

漆膜断面の顕微鏡写真

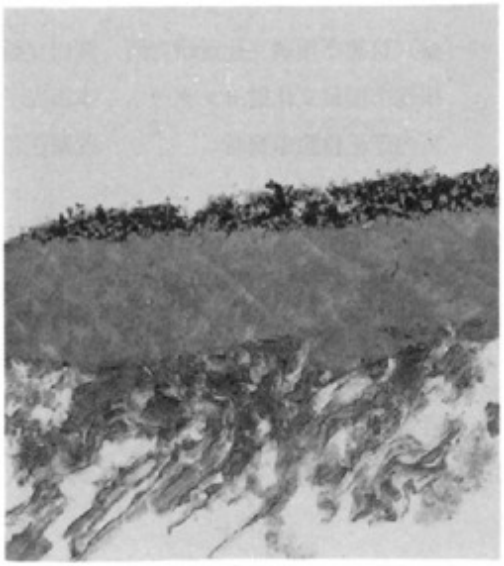


写真１（約200倍）

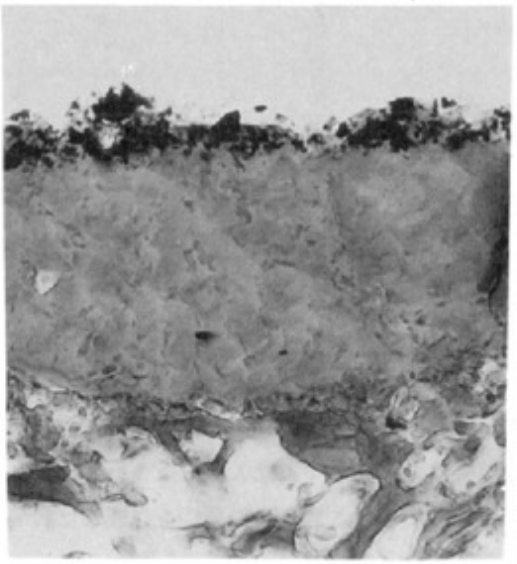


写真２（約400倍）

査出土の腕輪形木製品に共通する。※

木炭粉を混和した下地を持たず、塗膜が薄いという特徴を持つ技法は比恵25次の黒塗りの漆器にも観察されるが、時期が下るにつれこの傾向が強まり、弥生時代中期後半から後期以降古墳時代へ継承されるものである。※

同じ外観の脚付杯でも比恵25次例と長崎県里田原遺跡例は共通の塗膜構造を持ち、※※本例は異なる。漆器の製作時期、方法、集団について考える時、非常に興味深い事例である。塗膜構造調査例の増加が望まれる。

※　岡田文男　「福岡市出土の縄文晩期から古墳時代にかけて漆器の塗膜構造の観察について」
『比恵遺跡群11』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第289集

※※成瀬正和、本田光子、岡田文男
「彩文土器、木胎漆器の赤色顔料について」
『比恵遺跡群10』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集

(1) 調査区遠景（北から）

(2) 調査区全景（西から）

(1) ＳＤ01（北から）

(2) 木器出土状況（南から）

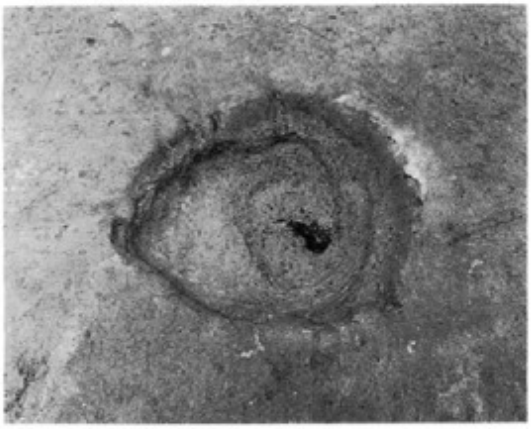
(3) 遺物出土状況（南から）

(4) 木器出土状況

(5) ＳＤ01炭化米出土状況

(1) ＳＫ05（東から）

(2) ＳＫ06（北から）



(3) ＳＫ07（南から）

(4) ＳＫ08（東から）

(5) ＳＫ25（東から）

(6) ＳＫ17（北から）

(7) ＳＤ02（北から）

(8) ＳＤ16・18（北から）

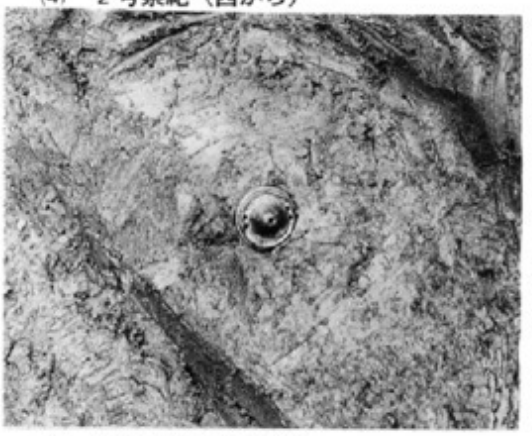
(1) ＳＤ19（南西から）

(2) ＳＤ20・21（東から）

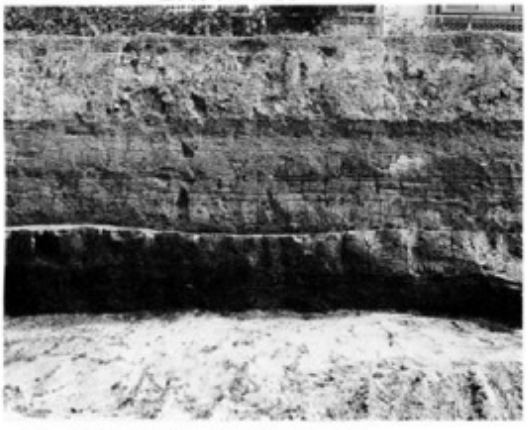
(3) １号祭祀（南から）

(4) ２号祭祀（西から）

(5) ＳＤ15遺物出土状況

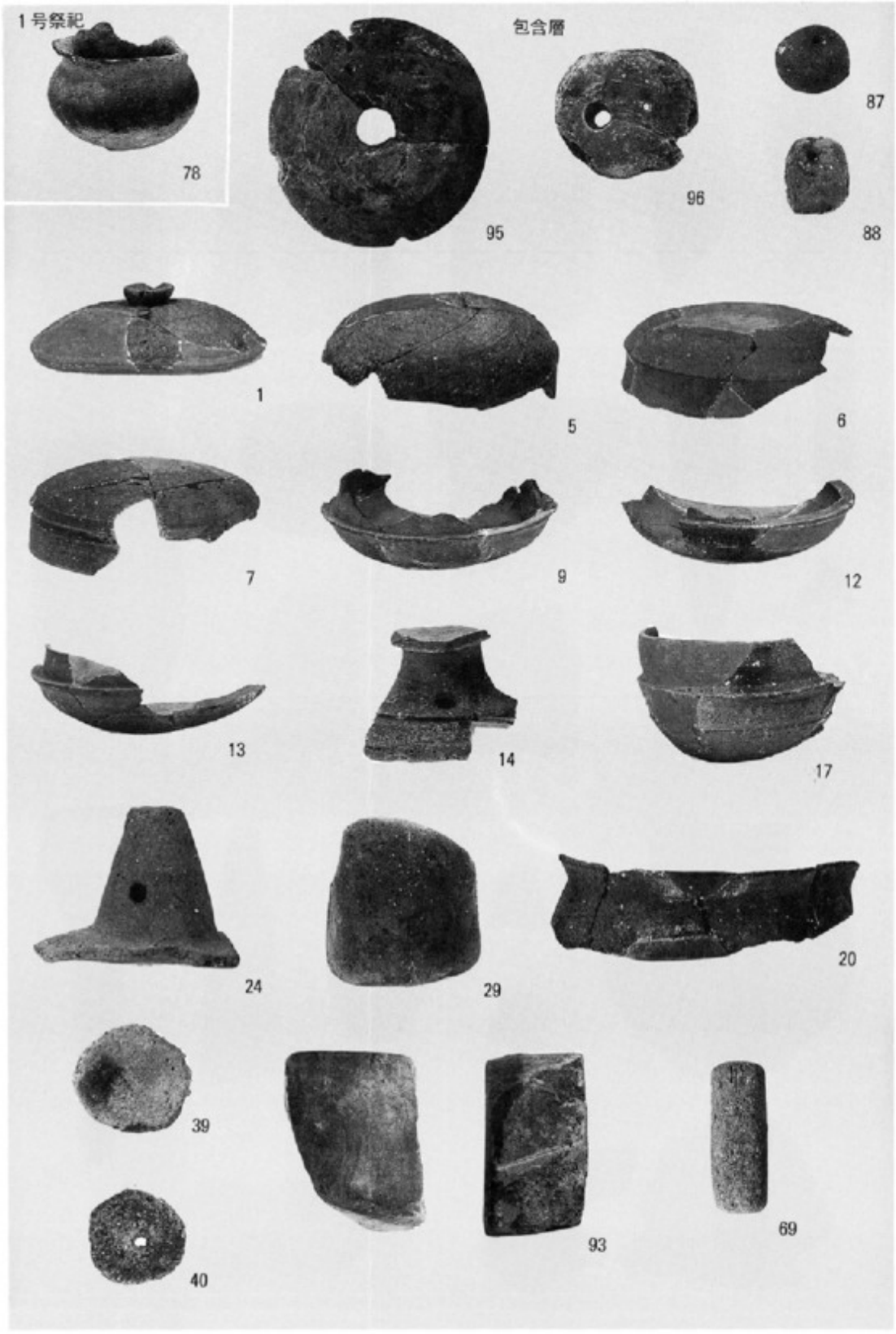


(6) ＳＤ15遺物出土状況

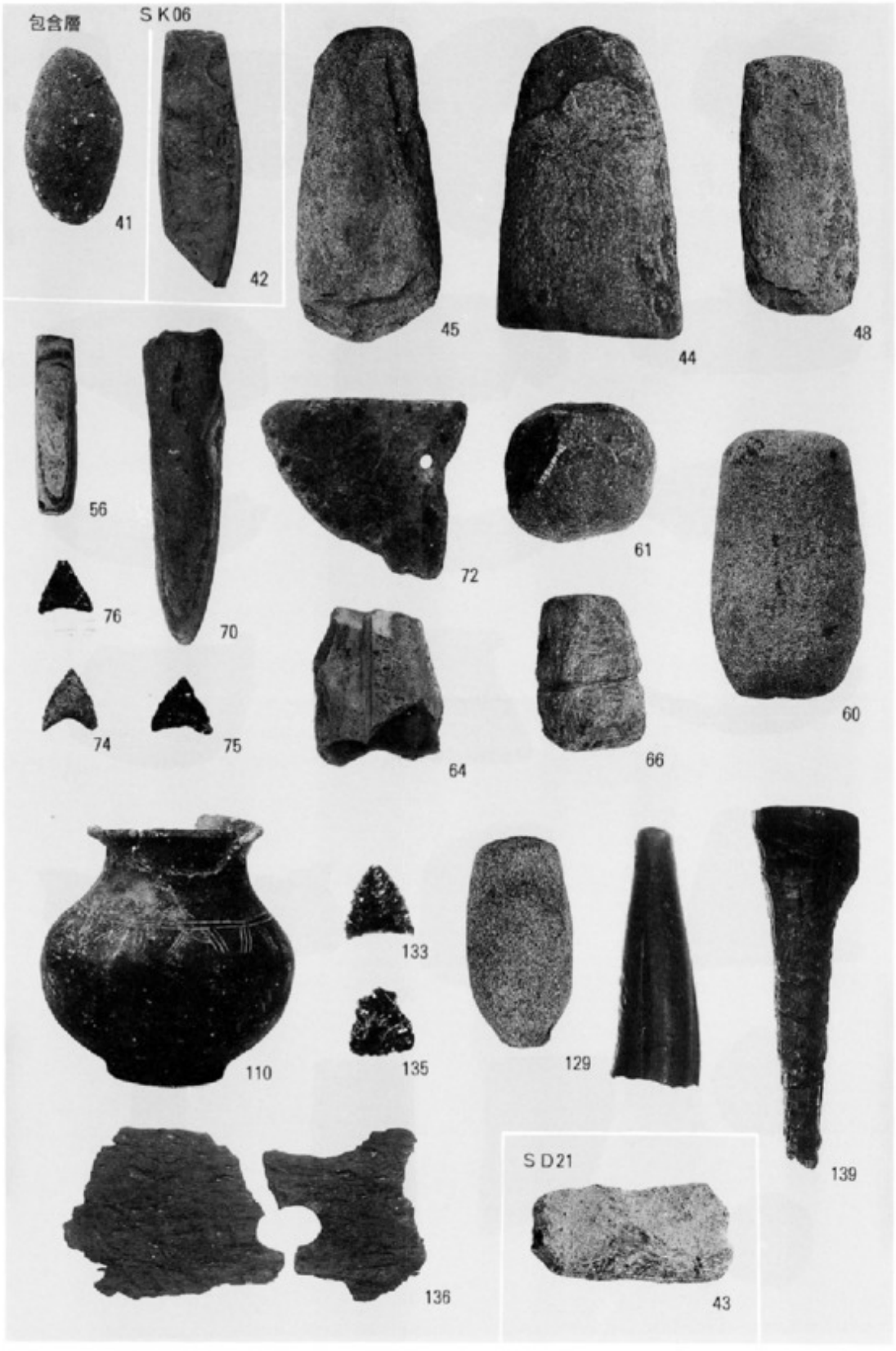


(7) 調査区南壁土層（北から）

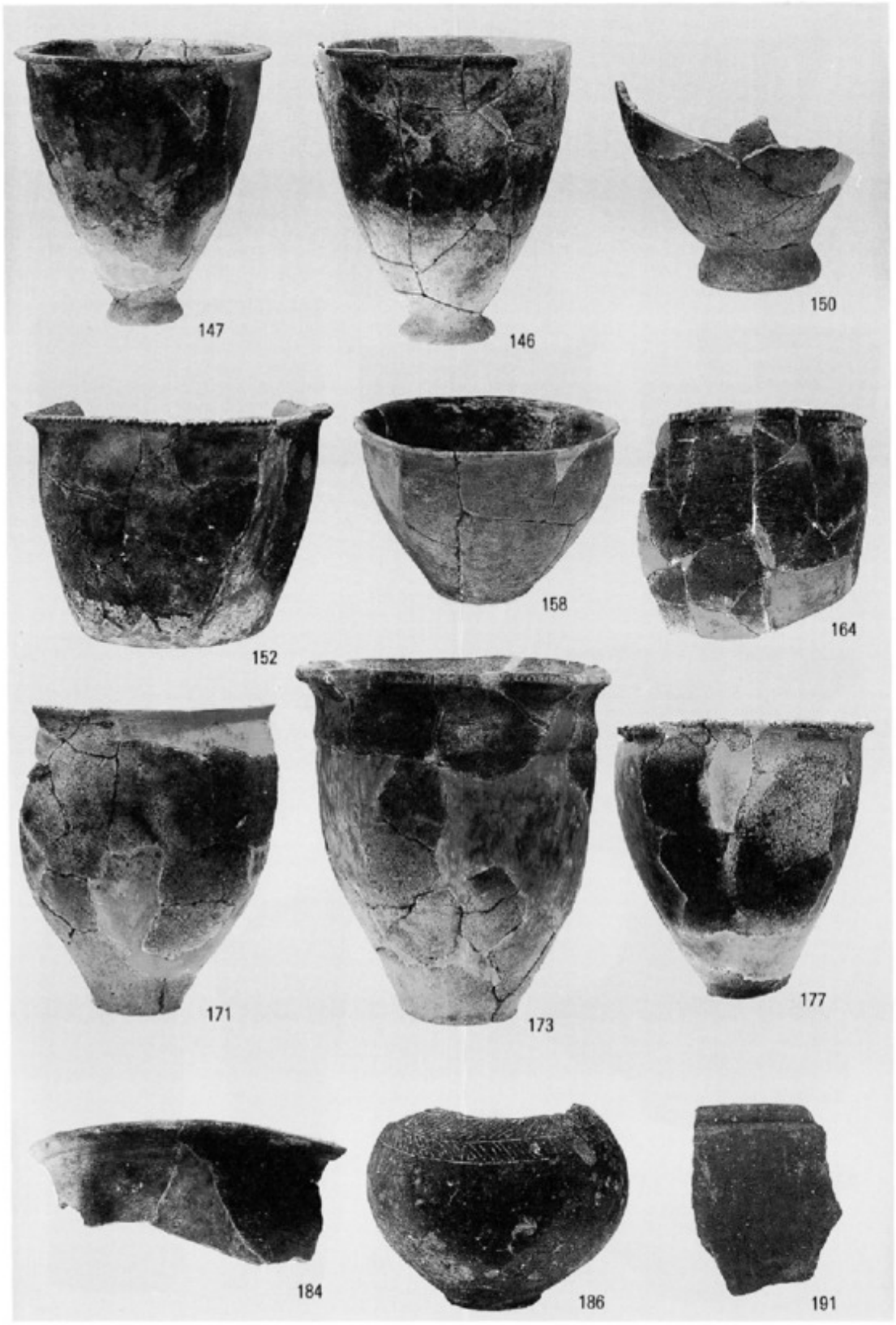
(8) ＳＤ15第２号ベルト土層（東から）



祭祀遺構・包含層出土遺物


包含層
SK06
41
42
45
44
48
56
72
61
60
76
70
74
75
64
66
110
133
135
129
139
136
SD21
43

溝・SD01出土遺物



SD15出土遺物1

SD15出土遺物 2

拾六町平田遺跡

第2次調査

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第349集

1993年3月31日

発　行　　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区大神一丁目8番1号

印　刷　　㈲松古堂印刷